

令和3年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

中程度を表す副詞の研究

— 「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を中心に —

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻日本語学専門

原 美築

令和4年3月

凡例

一、用例番号、図表番号は各章ごとに付す。

一、注は、章ごとに番号を付し、原則として脚注の形で示す。

一、例文の前に付した記号は、その文の許容度を示す。記号*は、非文であることを示し、記号??は、非文とは言い切れないが不自然さのある文を示す。

一、用例中の表記は原文のままとし、主な対象形式に下線、波線、囲み線を付す。

一、用例の末尾には、カッコで出典を示す。

一、文中における参考文献は、氏（名）に続けて(年号)の形式で示す。ただし、カッコ内に含まれる際は、年号のカッコは省く。文献の題目・所収などは本稿末尾の【参考文献】欄にまとめて掲げる。

(本文一頁：40字×30行)

目次

序章 本研究の位置づけ	1
1. 本研究の目的	1
2. 「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を対象語とする理由	2
3. 程度副詞の〈評価性〉について	5
3.1. 渡辺(1990)について	5
3.2. 田和(2011)(2012)(2017)について	7
3.3. 本研究における〈評価性〉の定義	8
4. 本研究の構成	9

【第 I 部】 各語の比較検討による評価的側面

第1章 各語の統語的傾向の概観	13
1. はじめに	13
2. 統語的特徴による分類	13
3. 統語的特徴から見る 3 語の分布	14
第2章 静態述語を修飾する用例について	17
1. はじめに	17
2. 被修飾語の評価分類	17
3. 被修飾語の分布による分析	19
3.1. 全ての語に共通して表れる被修飾語群	19
3.2. 「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群	21
3.3. 「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群	21
3.4. 「まあまあ」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群	22

3.5.「まずまず」にのみ現れる被修飾語群	23
3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群.....	24
3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群	26
4. 静態述語修飾用例に見られる各語の特徴についてのまとめ	27
4.1.「まずまず」について	27
4.2.「まあまあ」について	28
4.3.「そこそこ」について	28
第3章 動的述語を修飾する用例.....	29
1.はじめに	29
2.被修飾語の評価分類.....	29
3.各語の被修飾語群による分析	31
3.1.全ての語に共通して表れる被修飾語群	31
3.2.「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群.....	33
3.3.「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群.....	34
3.4.「まあまあ」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群	35
3.5.「まずまず」にのみ表れる被修飾語群	37
3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群.....	38
3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群	39
4.動的述語修飾用例に見られる各語の特徴	43
4.1.「まずまず」について	43
4.2.「まあまあ」について	44
4.3.「そこそこ」について	44
第4章 名詞を修飾する用例.....	45

1.はじめに	45
2.被修飾語の評価分類.....	45
3.各語の被修飾語群による分析	47
3.1.全ての語に共通して表れる被修飾語群	47
3.2.「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群.....	50
3.3.「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群.....	51
3.4.「まあまあ」、「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群.....	52
3.5.「まずまず」にのみ表れる被修飾語群	53
3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群.....	55
3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群	57
4.名詞修飾用法に見られる各語の特徴.....	60
4.1.「まずまず」について	61
4.2.「まあまあ」について	61
4.3.「そこそこ」について	61
第5章 述語となる用例.....	63
1.はじめに	63
2.述語用例の下位分類.....	63
3.応答表現の詳細分析.....	65
4.相対的評価表現の詳細分析	68
5.絶対的評価表現の詳細分析	73
6.まとめ	78
7.【第Ⅰ部】のまとめと【第Ⅱ部】への展開.....	80
7.1.示しうる程度の範囲.....	80

7.2.話者の評価判断の介入度	81
7.3.【第Ⅱ部】への展開	82

【第Ⅱ部】各語の〈評価性〉

第6章 中程度を表す「まずまず」の〈評価性〉	87
1.はじめに	87
2.現代語「まずまず」の種々の用法	88
3.文全体にかかる用法	89
4.程度副詞用法	91
4.1.B用法の特徴	91
4.2.C用法の特徴	92
4.3.D用法の特徴	93
4.4.程度を高(大)と評価する用法「まずまず」の持つ意味機能	94
5.用法間の関わり	96
5.1.用例数の推移	96
5.2.近世以前の用例	97
5.3.明治・大正期の用例	98
5.4.「新潮の100冊」による用例	99
5.5.「まずまず」の用法獲得過程	100
6.まとめ —現代語の「まずまず」が基盤としてもつ意味—	101
第7章 中程度を表す「まあまあ」の〈評価性〉	105
1.はじめに	105

2.先行研究・辞書記述.....	105
3.「まあまあ」の種々の用法についての概観.....	106
4.各用法の時代ごとの分布.....	108
5.程度副詞用法「まあまあ」の評価性.....	110
5.1.感動詞促し用法との関連.....	111
5.2.副詞的用法「まあまあ」について.....	112
5.3.程度副詞用法「まあまあ」の評価性.....	115
5.4.否定的な見方を示す程度副詞「まあまあ」について.....	117
6.まとめ.....	118
第8章 中程度を表す「そこそこ」の〈評価性〉.....	121
1.はじめに.....	121
2.「そこそこ」の種々の用法.....	122
3.各用法の特徴.....	124
3.1.名詞用法.....	125
3.2.状態副詞用法.....	126
3.3.接尾辞的用法.....	129
3.4.程度副詞用法.....	131
4.まとめ.....	135
第9章 接続表現からみる「まずまず」「まあまあ」の違い.....	139
1.はじめに.....	139
2.「まずまず」「まあまあ」に関する辞書記述の確認.....	140
3.「まずまず」「まあまあ」を分析する観点.....	141
4.調査方法.....	142

5.調査結果	143
5.1.「まずまず」「まあまあ」の用例における接続表現の出現率傾向.....	143
5.2.接続表現を伴わない用例について	145
5.3.並列系接続表現をとる用例について	147
5.4.逆接表現出現位置による「まずまず」「まあまあ」の違い.....	148
5.5.「まあまあ」がマイナスの語を修飾する用例について.....	151
6.まとめ	151
終章 本研究のまとめと今後の課題	153
1.本論のまとめ	153
2.各語における話者の想定と結果の対応関係	154
3.今後の課題	156
用例出典	159
参考文献	160
初出一覧	163

序章 本研究の位置づけ

1. 本研究の目的

本研究は、中程度を表す程度副詞「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を取り上げ、3語がもつ〈評価性〉を明らかにすることを目的としている。

本研究の意義を示すにあたり、まずは現代日本語の「程度副詞」の典型と「評価(性)」との関連について確認する。

程度副詞を体系的に述べた先行研究としては、工藤(1983)、仁田(2002)が詳しい。工藤(1983)は程度副詞の規定として「(相対的な)状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞」と述べている。仁田(2002)は程度副詞の中心的な働きを「属性(質)の状態の帯びている程度性に対して、その度合いに言及することによって、属性や状態のありようを限定し特徴づけるもの」としている。本研究が対象としている「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」は用例(1)に示すように¹、状態性をもつ語にかかり、その程度を限定する用法が見られ、程度副詞と認められることがわかる。

(1) 彼の成績は(まずまず/まあまあ/そこそこ)良い。

また、工藤(1983)は「おそろしく」「すばらしく」「異様に」「猛烈に」などの語を例に挙げ、「もともとはコトガラの中核のひとつであるアリサマに対する評価となり、さらに、その評価の対象面であった程度限定性が表面化しかけているものと考えられる」と述べており、それが「「けっこう・なかなか」などの評価性を裏面にもつ程度副詞に連続する」と言及している。ここから、工藤(1983)において既に、程度副詞と「評価(性)」が表裏一体であることが示唆されていることがわかる。

仁田(2002)においては「評価」という語こそ使用されていないものの、「ギンギンに」「ガンガンに」を例にとり、「使用により程度性があることから来る、強烈に高度な程度性の付加を意図した臨時的な使用もまた、少なくない(仁田(2002;p.156))」と指摘し、「メチャ明るい」「超寒い」「バカでかい」「クソ暑い」などのように、接頭辞的な使い方もつものもあると説明している。工藤、仁田の論から、極端に程度が大きいことを示す語彙は他品詞からの派生が多く、元の語彙の評価的な要素が反映されやすいことがわか

¹ 以下、本章における用例は全て作例である。

る。2021年東京オリンピックのスケートボード解説で各メディアに取り上げられ、流行語ともなった「ゴン攻め」も仁田（2003）の挙げる「接頭辞的な使い方をもつもの」の1つであろう。接頭辞的な語彙要素が程度副詞の一種と呼べるかどうかは別として、程度極大を表す要素は、他品詞から派生するかたちで生産されやすいものであるといえる。

一方、「移行・派生型の程度副詞には、低程度を表すものはまず見当たらない（仁田2002）」とあるように、程度が大きくない副詞に関しては、「評価」の側面に焦点を当てて論じられることが少ない現状にある²。しかし、程度がそれほど大きくなく、かつ評価（性）への関与が強い程度副詞は存在する。その例として挙げられるのが、本研究が取り上げる「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の3語である。従来、あまり扱われてこなかった、程度が大きくない程度副詞の評価的な側面を検討していくことは、程度副詞と「評価」のかかわりをより精緻に記述することを可能にする。

本研究は、先行研究の少ない中程度を表す程度副詞を複数取り上げ比較検討し、語義を詳しく論じることを中心的な目的とする。その目的を達成する過程で、程度副詞と「評価」の関係性を掘り下げ、派生的な程度副詞の語彙形成の仕組みについて示唆を与えることを可能とする点でも意義があると考えられる。

2. 「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を対象語とする理由

「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の3語は、「①表す程度」、「②統語的な特徴」、「③語形式」、「④用法の多様性」といった4点において類似した特徴をもつ。「①表す程度」と「②統語的な特徴」が非常に近いことから、3語は「程度の大小」や統語的役割の違いによって区別して論じることは困難である。よって、「評価」の側面から各語を検討する意義がより強いものになると考えられる。また、「③語形式」と「④用法の多様性」でも共通点をもつことから、それぞれの〈評価性〉について共通の条件下で検討することが可能となる。そのため、語同士の比較検討結果や、類似点・相違点といった記述を体系的に行うことができる。これらの理由から、上記4点において類似する3語を対象語として選定した。以下、「①表す程度」、「②統語的な特徴」、「③語形式」、「④用法の多様性」について、詳しく説明する。

² 「随分」「相当」など程度極大とまではいかない「程度大」については一定数研究成果がある（鳴海（2009, 2012）、田和（2017）など）。

まずは、3語の表す程度について確認するため、再度、用例(1)を挙げる。

(1)彼の成績は（まずまず／まあまあ／そこそこ）良い。

(1)の場合、3語が「良い」の程度限定をしていることは明らかであるが、その程度は「大」であるとも「小」であるとも言い切れない。対象とする程度副詞を伴わない形（「彼の成績は良い」）と比較すると、やや「良い」の程度が抑えられているようにも感じられるが、「やや」「少し」といった、程度小を表す程度副詞ほど程度を低く見積もっているともいえない。3語は、いわば「中くらい」の程度を表していると捉えられる。また、3語を比較したときの相対的な程度の大小は判断しがたく、個々の内省や発話場面、文脈に依拠する。よって、3語を単純に比較した場合、「程度の大小」では差異化が困難であり、3語は同じレベルの程度を表す副詞であるとまとめられるだろう。

次に、統語的な特徴についてである。3語とも、典型的な程度副詞としての使用例である用言を修飾する用例（用例(2)）に加え、連体修飾格「の」を伴い名詞を修飾する用例（用例(3)）、形容動詞の形を取って述語として働く用例（用例(4)）がある³。

(2)今回の試験の結果は（まずまず／まあまあ／そこそこ）良い。

(3)今回の試験は（まずまず／まあまあ／そこそこ）の結果だ。

(4)今回の試験の結果は（まずまず／まあまあ／そこそこ）だ。

また、(2)、(3)のように修飾語をとる用例の場合、被修飾語にマイナスの語を取りにくいという点も3語に共通している（用例(5)）。この特徴は、程度副詞研究で頻繁に取り上げられている典型的な程度副詞にはあまり見られない共起制限である。

(5)??今回の試験の結果は（まずまず／まあまあ／そこそこ）悪い。

以上、3語の表す程度と被修飾語との共起制限をまとめると、図1に示す通りとなる。

³ ただし、修飾する品詞別の用例の出現率や述語として働く用例の出現率には差がある（第1章3節参照）。

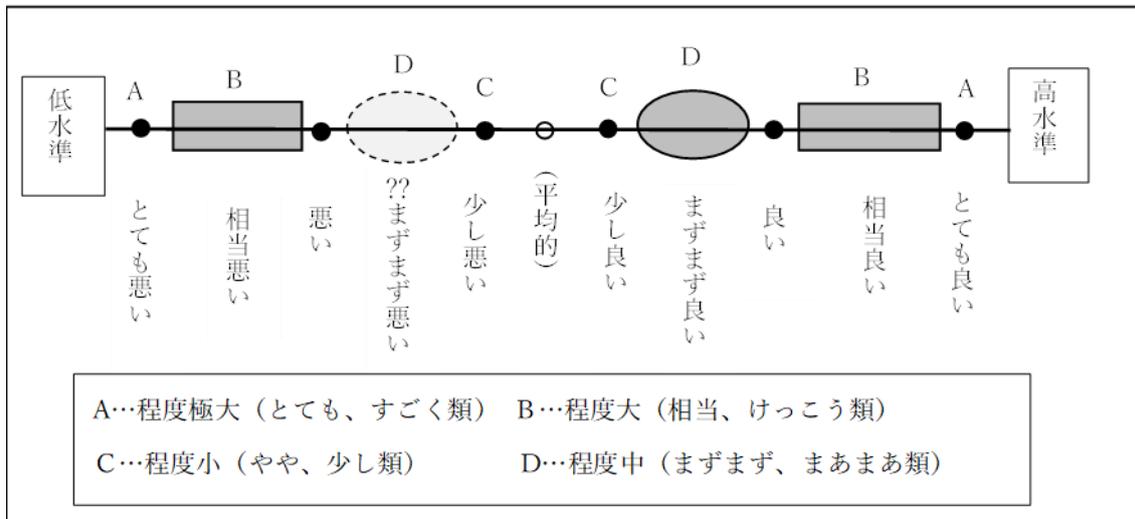


図1 「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の意味区分と被修飾語の共起制限

続いて、3語の語形式である。3語はいずれも、単独形式「まず」「まあ」「そこ」が繰り返される畳語形式である。前節で、程度副詞の評価の側面は、他品詞からの語彙の要素が強いことを示唆する研究があることを述べた。そこから、〈評価性〉の内実を探る上で、3語とも派生元の語（単独形式）を持つことは重要な手がかりになると考えられる。

最後に、3語の用法の多様性についてである。第6章～第8章で詳しく論ずるが、3語はいずれも程度副詞としての用法以外の用法をもつ。例えば、「まずまず」は、「この事故は信号無視が原因で起こったと見てまずまず間違いない」といった後の文の確実性を示すものがある。「まあまあ」は「まあまあ、こんなに大きくなって」「まあまあ、落ち着いて」といった類の感動詞としての用法をもつ。「そこそこ」は「朝食もそこそこに出かける」といった状態を表す用法や「彼は二十歳そこそこで会社を立ち上げた」というように数量詞につく接尾辞的用法がある。これら程度副詞以外の用法は、程度副詞としての用法に先行する形で使用されており⁴、程度副詞としての用法は他の用法から派生したものであると捉えられる。ここから、程度副詞以外の用法は各語が程度副詞として用いられる際の、程度限定と異なる側面、つまり、本稿が明らかにしようとしている評価的な側面を探る上で関連性が強いものと考えられる。

以上より、3語は「表す程度」「統語的特徴」が非常に近く、「何らかの評価を表す点」も

⁴ 第6章5節、第7章4節、第8章2節を参照されたい。

共通している。しかし、「表す程度」「統語的特徴」からはそれぞれの違いを論じにくい。よって、本研究では「中程度を表す程度副詞」と認められる「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」3語の〈評価性〉に着目する⁵。

3.程度副詞の〈評価性〉について

単純な程度の大小では各語の特徴を規定できない「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」について、本研究では「評価」の観点から、各語を論じていく。本節では、本研究でいうところの〈評価性〉について定義づけておきたい。

程度副詞について、「評価」という観点から論じた先行研究においては、渡辺(1990)、田和(2011, 2012, 2017)が詳しい。それぞれの先行研究をまとめ、程度副詞と「評価」の関係を詳しく見るとともに、〈評価性〉について規定していく。

3.1.渡辺(1990)について

渡辺(1990)は、程度副詞を「発見系」と「比較系」に二分し、さらにそれらを「評価系」であるか否かで分けて大きく4つの程度副詞の類型を立てている。そして、類型ごとに「比較」「計量」の可否、「判断構造」、被修飾語の「評価⁶」、「表現性」、「量」の違いについて、次ページの表1のようにまとめている。

⁵ 「なかなか」も本節で述べた4点の特徴にかなり近いが、本研究の対象語3語よりも、表す程度が一段大きいと見ており（程度中ではなく程度大）、今回は扱わなかった。しかし、3語との重なる特徴が多く、〈評価性〉が強く表れる副詞である可能性が高いので、今後研究対象としていきたい。

⁶ 渡辺(1990)の述べるところの「評価」は、「Xは〈程度副詞〉Aだ」におけるAの部分（つまり程度副詞の係り先）における語のプラス・マイナスの評価のことである。程度副詞そのものの評価的側面を捉えたものではない。

表1 程度副詞の体系（渡辺 1990;p13 より一部体裁を変更した）

	類	比較	計量	判断構造	評価	表現性	量	
発見系	とても	×	○	発見	±	驚嘆	大	非評価系
	結構	×	○	望外発見	+	脱懸念	(大)	評価系
比較系	多少	○	○	潜在比較	±	反期待	小	評価系
	もっと	○	×	比較	±	吟味	大	非評価系

〈語例〉

とても類：はなはだ、すこぶる、たいへん、きわめて、ひじょうに、ずいぶん

結構類：なかなか、わりに、ばかに、やけに

多少類：すこし、ちょっと、やや、いささか、かなり

ここで「評価系」と示される「結構類」「多少類」については、話者の「先入観念」が前提にあることが述べられている。この「先入観念」と、それが元になって表れる「表現性」は、本研究でいうところの〈評価性〉の考え方に大きく関連する。以下、渡辺(1990)における「結構」の「先入観念」と「表現性」についての記述を引用する。

「結構」の場合の先入観の実態はといえば、それは個別的な「懸念」と呼んでよさそうなもの、ではあるまいか。

結構はやっている。

は、ひよっとすると客が少ないのではあるまいか、という懸念が低く見つめる先入観としてあり、

結構高かった。

は、もっと安いものが手に入ったかもしれなかった、という、現実に矛盾する可能性—それを敢て「懸念」の中に含めて—を先入観として持つ、そういう表現と思われる。優性まで延長して「+」と呼んだのと同じ論法で、反現実の可能性まで延長して「懸念」と呼んで話を進めれば、「結構」の表現性は、その懸念からの解放、「脱懸念」であり、だから量的にはどちらかと言えば「大」の方向かと思われる。量そのものは決して「大」でなく、「小」と言う方がふさわしいかも知れないが、脱懸念、懸念からの解放である

から、心理的に「大」の方向である。

この記述から、話者の先入観とそれが元になって表れる表現性によって、客観的な程度の大きさと話者視点の程度の大きさが異なることを指摘していることがわかる。話者による基準（渡辺(1990)の言葉でいえば先入観念）と物事のありようが比較され、それらを比較した結果に対する判断が「表現性」であるといえる。この話者による基準と、それを元にした「表現性」の考え方は、同程度を表す程度副詞がもつ〈評価性〉を明らかにする観点として非常に有用であると思われる。

ただし、渡辺(1990)は、程度副詞の体系を述べる研究の端緒であり、それぞれの類の代表格として扱っている「とても」「結構」「多少」「もっと」の4語については一定の説明があるものの、同類に括られている語同士の差異については言及がない。渡辺(1990)が述べる「先入観念」、表1における「判断構造」「表現性」は各類を代表する「とても」「結構」「多少」「もっと」の検討によって設定されており、程度副詞の体系的把握において必要十分であるか、同類の程度副詞に一律に当てはめることができるか否かなど、検討の余地がある。この体系的把握を精緻化していくには、渡辺(1990)の各類型や指標を基盤としつつ、それぞれの語が個々に持ち合わせるであろう「先入観念」「判断構造」「表現性」の精密な記述が不可欠であると考えられる。本研究は、その意味で「中程度」の程度副詞3語について、その精密な記述を目指すものである。

3.2.田和(2011)(2012)(2017)について

田和(2011)では、渡辺(1990)の程度副詞の体系と仁田(2002)の程度副詞の体系を合わせて、その関係を整理し、表2のようにまとめている。

表2 田和(2011)による程度副詞の分類

		系		
		程度系	量系	比較系
度 合 い	極大	とても類	たくさん類	もっと類
	(大)1	かなり類	かなり類	かなり類
	(大)2	結構類	(結構類)	(結構類)
	小	多少類	多少類	多少類

<語例>

とても類：とても、非常に、すこぶる、極めて

たくさん類：たくさん、いっぱい

もっと類：もっと、ずっと、いっそう

結構類：結構、なかなか、わりに（と）

かなり類：かなり、だいぶ、相当、ずいぶん

また、田和(2017)では、程度副詞における「評価」の捉え方について、「一般常識や先入観といった話し手の内面にある価値尺度の範囲（これを本書では「主観範囲」と呼ぶ）の中で、どこに位置づけられるのかを品定めすること」であると述べている。さらに、「評価的な程度副詞」についての特徴を、意味面と統語面に分け、以下のようにまとめている。

[統語的特徴]

派生的な連体修飾用法・述語用法を持つ。（例…随分な／随分だ、なかなかの／なかなかじゃ）

[意味的特徴]

事態の程度を、話し手の心内にある価値観や基準の範囲内でどのような位置づけにあるかを表し、評価（品定め）する。

田和(2017)が定義する「評価」や「評価的な程度副詞」の[意味的特徴]は、渡辺(1990)の「先入観念」「判断構造」「表現性」の考え方を受け継いだものである。渡辺(1990)の段階では独立していた評価に関わる観点を、「評価的な程度副詞」の[意味的特徴]としてまとめ、程度副詞の「評価」の側面を捉えやすくしている。特に、「評価」の判断が「話者の想定に対する位置づけ」にあるという言及は、重要であると考えられる。

3.3.本研究における〈評価性〉の定義

以上、渡辺(1990)、田和(2011)(2012)(2017)をふまえ、本研究における〈評価性〉を次のように定義する。

- (6) 評価性：話者の想定を基準としたとき、事態の結果（ありよう）がどこに位置づけられ、話者がそれをどのような態度で受け止めているかを表す性質

この定義は、渡辺(1990)の流れを汲んだ田和(2017)の「評価的な程度副詞」の[意味的特徴]を参考にして立てたものである。田和(2017)が「事態の程度を評価（品定め）する」と事態の程度そのものを評価すると述べているのに対し、本研究での「評価性」は事態の結果そのものに対するものであるという点で、やや異なる。

4.本研究の構成

以上を踏まえ、本稿は【第Ⅰ部】、【第Ⅱ部】の二部構成で論述する。

【第Ⅰ部】にあたる第1章から第5章では、被修飾語のタイプ等の比較検討を通して3語の相対的な傾向について確認する。第1章では「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を統語的特徴ごとに分類し、その分布を概観する。第1章での分類を元に、第2章では静態述語を修飾する用例について、第3章では動的述語を修飾する用例について、第4章では名詞を修飾する用例について、各語が取りやすい修飾語を分析する。第5章では各語が述部に表れるときの用例に焦点をあて、話者の評価判断の傾向を探る。

【第Ⅱ部】は、【第Ⅰ部】で残された課題を踏まえ、各語の〈評価性〉について、より具体的に記述していく。第6章では「まずまず」に焦点を当て、程度副詞用法以外の用法との関連性を見る。そして、「まずまず」の〈評価性〉が「妥当性」にあることを明らかにする。第7章では「まあまあ」を取り上げ、「まあまあ、落ち着いて」に見られる促し用法や、単独形式「まあ」との関連性から、〈評価性〉が「妥協」にあることを述べる。第8章では「そこそこ」について、種々の用法との関連性を見ながら、その〈評価性〉が「許容」にあることを示す。第9章では、〈評価性〉が特に近いと考えられる「まずまず」「まあまあ」について、それぞれの用例に見られる接続表現に着目することで、両者の違いについて詳細を論じる。

終章では、本研究の成果をまとめ、今後の課題について述べる。

【第 I 部】 各語の比較検討による評価的側面の傾向

第1章 各語の統語的傾向の概観

1.はじめに

第2章から第5章で3語を具体的に比較検討していくに先立って、本章では3語がどのような文の成分になりやすいのか、その分布を概観する。様々な文脈における現代語の用例を概観するために「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」より、用例を採取した¹。検索の結果、「まずまず」で306件、「まあまあ」で651件、「そこそこ」で920件の用例を得た。【第I部】では、各語が程度副詞として用いられる用例に絞って比較検討を進めるため、検索された用例の中から程度副詞以外の用例を除く処理を行ったところ、「まずまず」で273件、「まあまあ」で420件、「そこそこ」で705件が対象となる用例として選別された。これらの用例について次節で述べる「統語的特徴」ごとの分類における3語の分布を確認し、第2章～第5章での分析の足掛かりとする。

2.統語的特徴による分類

程度副詞の典型的な文法上の機能は、用言を修飾するものだが、「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の用例には、連体修飾格「の」を伴って名詞を修飾したり、自らが述語となったりする用例も見られる。本研究では、3語が修飾語として用いられている用例について、被修飾語の品詞によって「静態述語²修飾用例」(用例(1))、「動的述語修飾用例」(用例(2))、「名詞修飾用例」(用例(3))、「副詞修飾用例」(4)に分類する。また、(5)に挙げるように修飾語を伴わずに述語として機能する用例は「述語用例」に分類する。

(1)フリーのライターになって四年になる。仕事はまずまず順調で、今日明日の食事に困るようなことは、一度もなかった。(PB19_00467)

(2)当時の満州国内の事情は比較的平穏と申しますか、まずまず安定したものでした。(PB39_00738)

¹ 検索システム『中納言』を利用し、ジャンル・期間(年代)ともに、全範囲を対象とした。検索条件は、語彙素読み「マズマズ」「マアマア」「ソコソコ」である。用例の末尾の記号はサンプルIDである。サンプルIDの先頭2字は、メディアのジャンルを示している。PBは出版・書籍、PMは雑誌、PNは新聞、LBは図書館・書籍、OWは白書、OTは教科書、OPは広報誌、OBはベストセラー、OCはYahoo!知恵袋、OYはYahoo!ブログ、OVは韻文、OLは法律、OMは国会会議録を指す。

² いわゆる形容詞(良い、楽しい、明るいなどのイ形容詞の類)と形容動詞(綺麗だ、順調だ、静かだなどのナ形容詞の類)を併せて「静態述語」と呼ぶ。

- (3)小倉恒投手（3番手で登板。3回1／3を4安打2失点） 「3イニングまでは無失点でまずまずの内容だったが、その後がいけなかった。(PN5h_00011)
- (4)国立にその規模で入っているのはいい学校でしょう。受験指導がまずまずしっかりしているか、あるいは生徒が学校を見放して塾にきちんと通っているのかのいずれかです。(OC10_04272)
- (5)極端に狭いが、いちおうマンション風3LDKの三人部屋で陽当たりもまずまず。(LBp9_00018)

なお、「名詞修飾用例」は、典型的な形式として「の+名詞」をもつが、(6)のように「な+名詞」の形で現れるものも散見された。本研究では「な+名詞」の形で現れる用例についても「の+名詞」と同様、「名詞修飾用例」として扱う。

- (6)たまには立ち止まって見てみたら。いい年もあれば、まあまあ年もあるし、悪い年もある。でも二度と同じ年はやってこない。(PB28_00046)

3.統語的特徴から見る3語の分布

2.1.の分類方法によって、3語の用例を役割別に集計したものが表1である。斜体で示した数字は、各語の総用例数に対する割合である。

表1 各語の統語的特徴別の分布

	修飾語となる用例				述語用例	合計
	静態述語	動的述語	名詞	副詞		
まずまず	29 <i>10.6%</i>	14 <i>5.1%</i>	98 <i>35.9%</i>	4 <i>1.5%</i>	128 <i>46.9%</i>	273
まあまあ	95 <i>22.6%</i>	53 <i>12.6%</i>	75 <i>17.9%</i>	4 <i>1.0%</i>	193 <i>46.0%</i>	420
そこそこ	150 <i>21.3%</i>	301 <i>42.7%</i>	166 <i>23.5%</i>	6 <i>0.9%</i>	82 <i>11.6%</i>	705
合計	274 <i>19.6%</i>	368 <i>26.3%</i>	339 <i>24.2%</i>	14 <i>1.0%</i>	403 <i>28.8%</i>	1398

表1より、「まずまず」「まあまあ」の用例においては、「述語」の用例出現率が最も高く、5割近くを占めている。一方、「そこそこ」は述語用例の出現率が1割程度と低い。

- (7) ただし、編集部の評判がまずまずであったことで、一応の面目は保つことができた。
(PB19_00467)
- (8) 近江八幡に行こうとしました。今日はお天気もまずまずで、ツーリング日和です。
(OY14_06133)
- (9) メディカルスクールでのハニーの成績はまあまあだった。が、彼女は夢中になって勉強するようなことは決してなかった。(OB5X_00056)
- (10) 「ヤング・ビー・アサーティブ」。英語で聞くとまあまあだが、日本語が難しい。
(LBf3_00009)
- (11) フロントシートはクッションの厚み感はそこそこだが、体にフィットする形状で、サポート性も満足できた。(PM35_00151)

また、各語が修飾語として用いられる場合、被修飾語に取りやすい品詞に傾向が認められる。「まあまあ」においては、被修飾語が静態述語・動的述語・名詞のいずれの場合でも、一定の割合で用例が見られる。しかし、「まずまず」は動的述語を修飾する用例が約 5%と低く、名詞を修飾する用例が多いことが分かる。一方、「そこそこ」は動的述語を修飾する用例が最も多い。

- (12) 59万9000円と高価格設定ながら、まずまずの販売成果を上げた。《名詞修飾》
(PM55_00250)
- (13) 日本のように経済的にまずまずの国では、お金さえ払えば食べものは簡単に手に入ります。《名詞修飾》(PB14_00018)
- (14) 大きな家ではないが、敷地が百七、八十平方メートルぐらいはあり、都会ではまあまあの広さであろう。《名詞修飾》(PB39_00293)
- (15) あれは日本では評判がよくなかった。客はまあまあ入った黒字公演だったんですが、批評はおもわしくなかった。《動的述語修飾》(LBI5_00051)
- (16) ビルが本郷の名義になる前からそこで店を開き、馴染みの客でそこそこ繁盛していた。《動的述語修飾》(PB59_00519)
- (17) 優勝はねらえないけれども、そこそこ走る馬ですよと村長が保証し、馬を渡してくれた。《動的述語修飾》(LBr4_00005)

以上より、「まずまず」、「まあまあ」、「そこそこ」では、述語となる用例の取りやすさや修飾語として取る品詞の偏りに違いが見られることが明らかとなった。序章で述べた通り、3語は似た文脈で用いられる場合が多いが、用例を統語的特徴から分類すると出現率に偏りがあることから、各語が示し得る意味の範囲や話者の評価判断には違いがあるものと考えられる。その違いを明らかにしていくために、第2章から第5章で、統語的特徴による分類ごとに³、各語の相違点や特徴を明らかにしていく。

³ 副詞を修飾する用例は用例数が少なかったため、補足的に検索結果を記す。副詞を修飾する用例については、3語に共通して現れるものとして「よく」が挙げられる点が特徴的であった（「まずまず」3例、「まあまあ」2例、「そこそこ」1例）。その他の被修飾語として、「まずまず」は「しっかりと」、「まあまあ」は「すんなりと、たくさん」、「そこそこ」は「色々と、きちんと、しっかりと、ほどほどの、プリット」が見られた。副詞を修飾する用例の数自体は3語とも大きく違わないが、修飾先を見ると「まずまず」が「よく」に偏って出現するのに対し、「そこそこ」は語種が豊富であることがわかる。

第2章 静態述語を修飾する用例について

1.はじめに

本章では第1章で分類した用例のうち、静態述語を修飾する用例を扱い、各語が修飾する語の傾向の違いを見る。本研究は、3語の〈評価性〉を明らかにすることを目的としているため、被修飾語においても「評価」に関わる観点から分類を行い、各語の傾向を探る。次節に分類方法を挙げ、第3節でそれぞれの語が修飾しやすい語のタイプについて分析、考察を行う。

2.被修飾語の評価分類

各語の評価的な側面について傾向を探るため、本章では被修飾語を「良い、おいしい、きれいだ」などの「プラスの語」、「普通だ、平均的だ」などの「中間的な語」、「痛い、つらい、危険だ」などの「マイナスの語」、「遠い、近い、大きい、小さい」などの「評価性のない語（ニュートラルな語）」に分類した。しかし、「評価性のない語」を修飾する場合であっても、前後の文脈からその語がプラスの評価として使われているのか、マイナスの評価として使われているのかを判断が可能な例も存在する。

- (1)このマーカムご夫妻は今すぐここに引っ越してきたいというのでもなさそうよ。村にもまあまあ近いし、ちょうどいい大きさの庭があって、パドックもついているわ。
(PB29_00321)《プラス判断》
- (2)一番クラスで小さかったこの子は、自分でも、まあまあ小さい方、といった。でももうすぐ大きくなるんだ、と決意を見せた。(LBs3_00070)《マイナス判断》

例えば、(1)は前後の文脈から「村に近いこと」がプラスの評価であることが明らかである。このような用例は「評価性のない語」の中で「プラスの判断が可能（以下、「プラス判断」と記す）」なものとして分類する。逆に、(2)の用例では、大きくなりたい子どもが「まあまあ小さい方」と発言しており、「小さい」ことをマイナスに捉えていることが読み取れる。このような用例は「マイナスの判断が可能（以下、「マイナス判断」と記す）」なものとして分類する。

一方で、「評価性のない語」を修飾し、文脈からも評価性を読み取れない用例も存在する。

(3) これはプログラムの課題にしてもいいくらい、そこそこ難しいものです。次のようにして、日付とそれに対応する数値を求めてみましょう。(PB3n_00141)《無評価》

(3)では、「そこそこ」が「難しい」を修飾している。しかし、「難しい」ことによって話者にメリットやデメリットがあるわけではなく、この用例の中に話者の評価性を読み取ることは困難である。そこで、(3)のようなタイプの用例は、「評価性のない語」を修飾するものの中でも、「評価性を捉えられない無評価のタイプ（以下、「無評価」）」に分類する。

以上の 6 項目において、用例数と出現率をまとめたところ、下記に示す表 1 の結果を得た。

表 1 被修飾語の評価分類（静態述語）

	プラス	中間的	マイナス	評価のない語			合計
				プラス判断	マイナス判断	無評価	
まずまず	24 82.8%	1 3.4%	0 0.0%	4 13.8%	0 0.0%	0 0.0%	29
まあまあ	78 82.1%	2 2.1%	3 3.2%	9 9.5%	1 1.1%	2 2.1%	95
そこそこ	95 63.3%	2 1.3%	6 4.0%	24 16.0%	2 1.3%	21 14.0%	150
合計	197 71.9%	5 1.8%	9 3.3%	37 13.5%	3 1.1%	23 8.4%	274

表 1 より、3 語ともプラスの語を被修飾語にとる用例が多いものの、出現率には差が認められる。「まずまず」、「まあまあ」は 8 割以上がプラスの語につくのに対し、「そこそこ」においては 6 割強となっている。一方で、マイナスの語を修飾したり、マイナスだと判断される語に修飾したりする用例は、「まずまず」には全く見られないが、「まあまあ」「そこそこ」では複数例確認できる。また、評価性のない語を修飾する割合は、「そこそこ」が最も高く、「まずまず」が最も低い。

この結果に至る要因を分析するため、次節以降で具体的な被修飾語を以下で立てる A～G の項目に分けて列挙し、考察を行う。

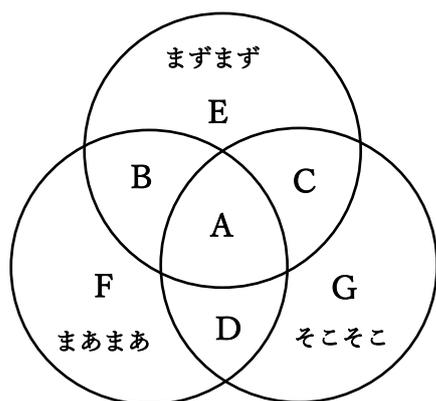


図1 語群分類図

- A…全ての語に表れる被修飾語群
- B…「まずまず」「まあまあ」に表れる被修飾語群
- C…「まずまず」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- D…「まあまあ」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- E…「まずまず」にのみ表れる被修飾語群
- F…「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群
- G…「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

3.被修飾語の分布による分析

本節では、前節の図1で示した分類図に従い、A～Gの項目ごとに具体的な修飾語を挙げ、分析を行う。A～D群に関しては、対象語ごとに用例数を示し、修飾しやすい語の傾向を確認する。

3.1.全ての語に共通して表れる被修飾語群

まず、「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の全ての語に共通して現れる被修飾語群（A群）を挙げる。

表2 A項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	良い	4	25	29	58
	面白い	1	7	4	12
	きれいだ	1	1	8	10
	順調だ	8	1	1	10
	うまい	1	3	3	7
	有名だ	1	2	4	7
中間的な語	φ				
マイナスの語	φ				
プラス判断語	高い	1	1	1	3
	近い	1	1	1	3
マイナス判断語	φ				
無評価	φ				

前節で述べた通り、「まずまず」はマイナスの語を修飾する用例がないため、3語に共通する被修飾語群は「プラスの語」および「プラス判断」ができる語に限られる結果となった。

3語とも、「良い」を修飾する用例が多いのが特徴的である。

- (4) 彼女はまずまず良い娘みたいだったわね。ちょっと変わっていて夢見がちな感じもしたけれど、花の扱いはとっても上手だった。(PB49_00535)
- (5) その子も踊りを習ってて、まあ、飲み込みも悪くなかったし、ニホンジンにはまあまあ感じも良かったし。ほら、ニホンジンって最悪じゃない。みんな群れて行動する。(LBg9_00077)
- (6) そういう疑惑をもたれても、単に夏樹の兄だというよりも話題になる。実際、作品がそこそこいいものだから、泥をかぶるふりして晴れたときの演出効果を狙ったんじゃないかな。(LB19_00258)

また、静態述語を修飾する用例の総数が少ない「まずまず」において、「順調だ」を修飾する用例が8例と多いのも特徴的である。

- (7) 市場金利の上昇局面で一時的に預金離れ現象に手を焼くことがあっても、S & Lの経営はまずまず順調とあってよかった。(OB4X_00136)
- (8) フリーのライターになって四年になる。仕事はまずまず順調で、今日明日の食事に困るようなことは、一度もなかった。(PB19_00467)
- (9) それから、政府の支出は一体どうなっているのだということですが、これはまずまず順調である。(OM11_00009)
- (10) 今年の夏休みはまあまあ順調に宿題が済んだものの、自由課題を3つやることになっていて、(OY14_18296)
- (11) 研究所研究員アンドリュー・ケネディ氏空爆抑制なら長期戦も 実際は、英米軍の攻撃はそこそこ順調だ。(PN3e_00004)

「まあまあ」が使われている(10)も、「そこそこ」が使われている(11)も不自然な印象は受けないが、強いて言うならば、「まずまず」が使われている(7)～(9)は「経営」、「仕事」、「支出」などの状況について用いられていることから、成果が数値的に分かる対象について評価を与えるときには「まずまず」が使いやすいといえる可能性がある。

3.2.「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まずまず」と「まあまあ」に共通して現れる被修飾語群（B群）を挙げる。

表3 B項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	合計
プラスの語	元気だ	3	2	5
中間的な語	φ			
マイナスの語	φ			
プラス判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

B群に分類される語は「元気だ」のみであった。

(12)確かにミスイはほとんど大人の猫のように大きくなり、毛並みもつやつやして、まずまず元気そうだった。(PB27_00185)

(13)ベサニーはドアを開けながら言った。「元気？ ニナ」「まあまあ元気」わたしは答えた。(LBm9_00150)

3.3.「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

続いて、「まずまず」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（C群）を挙げる。

表4 C項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	そこそこ	合計
プラスの語	便利だ	1	1	2
中間的な語	φ			
マイナスの語	φ			
プラス判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

(14) 価格の改定により、まずまず便利な立地の小さなみすぼらしいホテルでも一泊四十元した。(LBp9_00012)

(15) 電子図書館についてどう思いますか？ まあそこそこ便利？ (OY13_02469)

C群に分類される被修飾語は「便利だ」の1語のみである。「まずまず」において静態述語を修飾する用例が少ないからか、B群・C群に該当する語はわずかであった。

3.4.「まあまあ」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（D群）を挙げる。

表5 D項目の被修飾語群

	被修飾語	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	おいしい	10	9	19
	かわいい	2	2	4
	好きだ	1	3	4
	妥当だ	2	2	4
	楽しい	2	2	4
	安全だ	1	1	2
	快適だ	1	1	2
	好調だ	1	1	2
	親しい	1	1	2
	満足だ	1	1	2
中間的な語	φ			
マイナスの語	φ			
プラス判断語	大きい	1	7	8
	安い	2	1	3
	静かだ	1	1	2
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

ここで挙げた多くの語は、「まあまあ」「そこそこ」ともに1～2例の用例数と少ないので、明確な傾向性は見えにくい。が、「おいしい」に関してのみ、「まずまず」に使われないにもかかわらず、「まあまあ」「そこそこ」では多くの用例が確認できた。

(16)ガストのチョコバナナパフェやったかな♪まあまあ美味しかったよ☆やっぱパフェ好きwてか、スイーツが好き♪確実に太るな(笑)(OY14_52247)

(17)ジャガイモをらせん状に切り、串に刺して揚げて、スパイスをかけたものですが、まあまあおいしかったです。ちょっと食べにくかったけど。(OY15_18515)

(18)銀座という場所にもかかわらず格安で使えるうえに料理もそこそこおいしく、理恵子たちはよく利用しているようだ。(PM11_00633)

(19)東北の温泉で源泉100%で、料理もそこそこおいしく、多少古くても掃除が行き届いているこじんまりとした宿をおしえてください。(OC13_03271)

B群での分析(3.2.)で、「まずまず」は評価が数値的に判断できるものにつきやすい可能性があることを指摘した。それを踏まえると、「おいしい」のような感覚による判断には「まずまず」が使いにくいのもかもしれない。ただし、「おいしい」以外にも、話者の感覚に頼った評価語は多数存在するため、この関連性を「各語の特徴」とは断言できない。「感覚による判断」や「話者との共有が可能な評価」を定義づけた上で、さらなる詳細な検討が必要である。

また、語種としてはB群・C群と比較し、D群が豊富に上がるというのは3語の違いを見る上で有意な傾向であると捉えられる。「まずまず」は「まあまあ」「そこそこ」に比べ、修飾できる語が限定的であるといえる。

3.5.「まずまず」にのみ現れる被修飾語群

本項以降は、それぞれの語にのみ現れる被修飾語群を列挙し、特徴的な用例を挙げながら各語の傾向について考察する。該当する被修飾語に対し複数の用例が見られる場合は()内に用例数を示し、評価別に該当する被修飾語の異なり語数を記す。まずは、「まずまず」にのみ現れる被修飾語群(E群)の語を列挙する。

《プラスの語》平穏だ(2)、大らかだ、軽快だ、こぎれいだ(異なり語数4語)

《中間的な語》平均的だ

《マイナスの語》φ

《プラス判断語》中位だ、人並みだ(異なり語数2語)

《マイナス判断語》φ

《無評価》φ

他の2語に比べて用例数自体が少なく、E群に分類される修飾語数も後に述べるF群・G群と比較すると少ないが、「プラス判断」に分類した用例が特徴的であった。本来「中間的な語」と捉えるのが自然であると思われる「人並みだ」や「中位だ」を修飾した用例が、プラスの意味を表していたのである。

(20) ホワイトボードに字がうまく書けません。紙の上ならまずまず人並みの字が書けるのですが、ホワイトボードではひどい字になります。(OC12_03854)

(21) レッチェ [試合前] 勝ち切れない試合多いが、まずまず中位。昇格組の中では健闘している。(OY15_12774)

(20)では、ホワイトボードに字が「うまく書けない」のに対し、紙の上では「まずまず人並み」の字が書けるとしている。「人並み」という、本来はプラスの意味として用いられにくい（通常、中間的な評価を表すのに扱われることが予想される）語が、プラスの評価を表している。

(21)では、「まずまず中位」の後の文に、「昇格組の中では健闘している」とあり、話者にとっては「中位であること自体がプラスに評価できる」ということが読みとれる。客観的に見れば「標準」にあたる成果でも、話者にとってはプラスの評価であることを「まずまず」によって示すことが可能となっている。

「まずまず」が静態述語を修飾する場合は、「プラスの語」を取りやすい傾向にあるが、被修飾語自体がプラスの評価を表さなくとも、「話者にとってプラスに捉えられる」といった評価を付加することが可能であることがわかる。

3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群（F群）の語を挙げる。

《プラスの語》清潔だ(2)、温かい、穏やかだ、カッコいい、上出来だ、紳士的だ、スムーズだ、得意だ、無難だ、もともとだ、優しい、豊かだ、立派だ（異なり語数13語）

《中間的な語》悪くない（異なり語数1語）

《マイナスの語》粗末だ、つらい、やらしい（異なり語数3語）

《プラス判断語》小さい、滑りやすい、都会だ、普通だ（異なり語数4語）

《マイナス判断語》小さい（異なり語数1語）

《無評価》簡単だ(2)（異なり語数1語）

「まあまあ」は、評価性をもつ語に対しても、評価性がなく文脈からの判断により評価性を読み取るタイプの語に対しても、比較的幅広く様々な語をとることがわかる。その中でも、「悪くない」という否定を伴う句を修飾するのは「まあまあ」独特の用法である。

(22)僕はまあまあ悪くないそれなりの成績を取ってましたし、とくにより好みしなければ、どこかの適当な大学には入れるだろうと思っていましたから、受験勉強というほどの勉強はしませんでした。(LBk9_00039)

(23)これもメーカーはいろいろあるが、値段によって、いいやつ、まあまあ悪くないやつ、安物と区別できる。(LBg5_00016)

プラスともマイナスとも言い切れないどちらつかずの「悪くない」といった、評価に幅をもたせる形式との結びつきは本調査の限りでは「まずまず」や「そこそこ」に見られず、「まあまあ」特有のものである可能性が高い。

また、「まあまあ」では「まずまず」に見られないマイナスの語を修飾する用例、文脈からマイナスの語を修飾していると判断できる用例、無評価タイプの用例も数は少ないながらも見られる。

(24)昔はソビエトのモスクワの市民というのは、ダーチャという、まあまあ粗末なものでしたけれども、それぞれちょっと出掛けていく別荘というのをみんな持っていましたね。(OM66_00001)《マイナス語修飾》

(25)一番クラスで小さかったこの子は、自分でも、まあまあ小さい方、といった。でももうすぐ大きくなるんだ、と決意を見せた。((2)再掲)《マイナス判断》

(26)なので毎日手の込んだ料理などを作る機会もないのだろうなと思ったのですが、ここでいう「まあまあ簡単なもの」というのは具体的にどんな料理を想定しますか？(OC08_00938)《無評価》

「まずまず」においては、マイナス評価や無評価の語を修飾する用例が見られないため、「まあまあ」は「まずまず」より使用範囲が広いといえる。しかし、次項で述べる「そこそこ」に比べると、マイナス評価や無評価の用例は、総用例数も取り得る語種も少ない。

3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

本項では、「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群（G 群）の語を挙げる。

《プラスの語》詳しい(2)、上手だ(2)、暖かい、偉い、かわいらしい、高画質だ、幸福だ、小綺麗だ、好みだ、実現可能だ、秀才だ、正気だ、丈夫だ、すごい、盛況だ、評判だ、まともだ、優秀だ、有能だ、理想的だ（異なり語数 20 語）

《中間的な語》十人並だ、中堅だ（異なり語数 2 語）

《マイナスの語》痛い、おかしい、危険だ、グロい、面倒だ、悪い（異なり語数 6 語）

《プラス判断語》強い(3)、広い(3)、甘い、重い、重要だ、世間並だ、苦い、早い、若い（異なり語数 9 語）

《マイナス判断語》遠い、古い（異なり語数 2 語）

《無評価》忙しい(6)、多い(5)、高い(2)、強い(2)、難しい(2)、小さい、デカイ、適当だ、速い（異なり語数 9 語）

「そこそこ」はほとんどの項目で「まずまず」や「まあまあ」に比べて多様な語を修飾する。特に目立つのは、「マイナスの語」と「無評価」に分類される語の豊富さである。まずは、マイナスの語を修飾する用例をいくつか挙げる。

(27)陶芸教室は男性がすごく少ないため、そこそこルックスが悪くとも女性からチャホヤされる。(PB25_00200)

(28)やっぱり古くなってくるとそこそこおかしくなってきますが、こまめにバイク屋へ持って行って点検してもらおうといいですね。(OC06_00622)

(29)シンプルに生身の人間が下に落ちるくらいの演出でいいと思うんだけどな。でもそれもそこそこ危険なのかしらね。(OY15_18174)

(27)～(29)の用例に対しては、筆者の内省では「まあまあ」と置き換え可能だと思われる。しかし、「まずまず」に置き換えると違和感が出てくる。ここから、「まずまず」は、明らかに標準を下回る評価の語には結びつかないのだと考えられる。

次に、「無評価」の用例を分析する。このタイプは「まずまず」の 0 例、「まあまあ」の 2 例に比べて、「そこそこ」は 21 例と、まとまった数が見られる。

- (30)・流石メール：メール数が非常に多い・e ライフナビ. net：クリックがそこそこ多い (OY06_01569)
- (31)たしか養命酒自体のアルコール度数はそこそこに強めだったと思います。10cc くらいをお湯で割って飲んだりしましたけれど… (OC09_11523)
- (32)国道から少し奥まったところにある店で、建物はそこそこ大きいのに店にはカウンターと、ボックスが二つしかない。(PB19_00210)

ここで特徴的なのは、「そこそこ」で表している事態が、数値的に捉えられるものが多いということである。(30)、(31)はその典型である。(30)であれば具体的な「クリック数」を数え上げることができ、(31)であればアルコール度数を具体的に挙げるができる。(32)も、建物の大きさを数値で見ることが可能であることから、これに準ずる。他にも、「高い、広い、重い、安い」など、数量的な基準によってスケールを限定することが可能な語が多いことが語種の一覧からわかる。「まずまず」や「まあまあ」においてもこのような語と結びつかないわけではないが、話者のプラス・マイナスの判断を伴わない「無評価」の用例が多いのは、数値的な基準を連想させる語との結びつきやすさが関連するものと考えられる。

以上のように、「そこそこ」は評価性や曖昧性を伴わない（あるいは評価性・曖昧性が薄い）、「程度量を限定すること」に焦点を当てた用例が多く見られる。評価を伴う語につく用例も多く見られるため、「そこそこ」を「話者の評価が入りにくい語」とは現段階ではいえないが、少なくとも「まあまあ」や「まずまず」では表現しにくい、話者の評価判断を必須としない文脈での使用が「そこそこ」には可能であるといえる。

4. 静態述語修飾用例に見られる各語の特徴についてのまとめ

本章では、3語が静態述語を修飾するとき、どのような評価の被修飾語をとるのか、取り得る被修飾語のタイプに偏りはなにか、という観点を中心に考察を行った。その結果明らかになった各語の特徴を以下にまとめる。

4.1. 「まずまず」について

静態述語修飾用例における用例の8割以上が「プラスの語」を修飾するもので、その他の用例も「平均的だ」を修飾する1例を除いて、全て「プラス判断」が可能な用例であった。

「人並みだ」「中位だ」といった「中間的な評価の語」に対して話者のプラスの評価を付加して示せる点が他の 2 語と比較して特徴的だといえる。マイナスの評価語およびマイナスと判断される語を修飾する語がないことから、「まずまず」は話者にとって望ましくないことを示す場合（マイナスの程度）は使用されないものと考えられる。

4.2.「まあまあ」について

全体的に「プラスの語」を修飾する割合が多いが、その他の評価を表す語を取ることもでき、「評価性のない語」を修飾して「マイナス判断」となる用例や「無評価」の用例も見られた。「まずまず」「そこそこ」では修飾できて、「まあまあ」では修飾できないといった語は少なく、3 語の中で「まあまあ」だけが使いにくい、といった文章は本章の調査範囲内では確認できない。

一方、他の 2 語には用いられず、「まあまあ」のみに見られた特徴として、「悪くない」という否定を伴う表現との共起が挙げられる。「良いとは言えないが、悪いわけでもない」といった、話者のぼんやりとした評価を示す場合は、「まあまあ」が最もなじむものと考えられる。

4.3.「そこそこ」について

全体的に幅広く語を取り、評価別に分類したそれぞれの項目に現れる語種も豊富である。特に、「マイナスの語」「無評価」に分類される被修飾語の用例が多いのが、特徴である。ここから、「そこそこ」は、「まずまず」では表すことのできない、話者にとって望ましくない事態についても示すことが可能であるといえる。また、「無評価」に分類される用例の多さから、話者のプラス・マイナスの評価判断が伴わない場合においても使用ができるという点も「そこそこ」の傾向として注目すべき点である。

「そこそこ」においても、全体としてはプラスの語を修飾する用例が多いため、「まずまず」や「まあまあ」に類する評価的な要素はもつものだと思われる。しかし、「マイナスの語」を修飾する用例を相対的に多くもち、評価判断の伴わない用例も少なくないといった特徴は、「そこそこ」独自の〈評価性〉を探る上で、重要な傾向だと考える。

第3章 動的述語を修飾する用例

1.はじめに

本章では第1章で分類した用例のうち、動的述語を修飾する用例を扱い、各語が修飾する語の傾向の違いを見る。次節に分類方法を挙げ、第3節でそれぞれの語が修飾しやすい語のタイプについて分析、考察を行う。

2.被修飾語の評価分類

3語の評価的側面の傾向を探るため、まずは第2章と同様に、各語の被修飾語を「プラスの語」、「中間的な語」、「マイナスの語」、「評価性のない語」に分類し、「評価性のない語」については、文脈から「プラスと判断できるもの（プラス判断）」、「マイナスと判断できるもの（マイナス判断）」、「無評価」と捉えられるものに分ける。

【評価性のない語の用例】

- (1)優勝はねらえないけれども、そこそこ走る馬ですよと村長が保証し、馬を渡してくれた。(LBr4_00005) ≪プラス判断≫
- (2)私にしかできない仕事ってわけじゃないけど、私がやらなきゃいけない仕事もあって、そこそこ溜まったストレスを、毎晩のように会社の人達と飲みに行行って発散していた。(LBo2_00045) ≪マイナス判断≫
- (3)日本の正月も、七日には七草正月、十五日には小豆正月と、そこそこ続いた。
(PB12_00112) ≪無評価≫

動的述語を修飾する用例においては、静態述語修飾用例に見られるような「中間的と判断される語」は得られなかった。次ページに動的述語修飾用例における被修飾語の分類結果を示す。

表1 被修飾語の評価分類（動的述語）

	プラス	中間的	マイナス	評価のない語			合計
				プラス判断	マイナス判断	無評価	
まずまず	9 64.3%	0 0.0%	0 0.0%	5 35.7%	0 0.0%	0 0.0%	14
まあまあ	26 49.1%	0 0.0%	0 0.0%	21 39.6%	1 1.9%	5 9.4%	53
そこそこ	113 37.5%	0 0.0%	4 1.3%	119 39.5%	17 5.6%	48 15.9%	301
合計	148 54.0%	0 0.0%	4 1.5%	145 52.9%	18 6.6%	53 19.3%	368

表1より、「まずまず」は、プラスの語またはプラスと判断される語のみを修飾しており、その他の評価をもつ語を修飾しないことがわかる。静態述語と比較し、動的述語は評価的な観点を伴う語種が少なく、それが「まずまず」の動的述語修飾用例の出現率の低さにつながっているものと思われる。一方、「そこそこ」は「マイナスの語」あるいは「マイナスと判断される語」を修飾する用例が少なくなく、「無評価」に分類される用例も比較的多く見られる。「そこそこ」は「まずまず」と異なり、話者の（プラスの）評価は強くない傾向にあるように思われる。「まあまあ」は用例数も取り得る語の種類も、「まずまず」よりは多く、「そこそこ」より少ないとわかる。

次節では第2章と同様に、以下で立てるA～Gの項目に被修飾語を分けて列挙し、考察を行う。

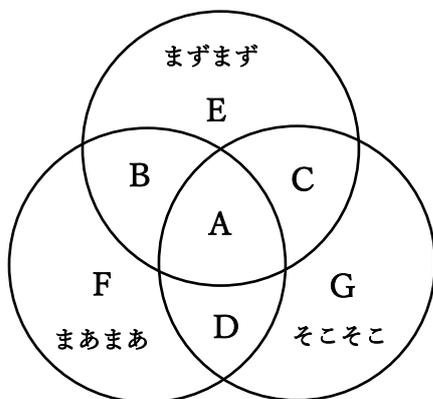


図1 語群分類図

- A…全ての語に表れる被修飾語群
- B…「まずまず」「まあまあ」に表れる被修飾語群
- C…「まずまず」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- D…「まあまあ」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- E…「まずまず」にのみ表れる被修飾語群
- F…「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群
- G…「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

3.各語の被修飾語群による分析

本節では、前節で表した分類図の項目ごとに、各語が修飾する動的述語を分けた結果を示す。なお、A～D群に分類される語については、それぞれの用例数が分かるように表にまとめた。

3.1.全ての語に共通して表れる被修飾語群

まず、「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の全ての語に共通して現れる被修飾語群（A群）を挙げる。

表2 A項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	頑張る	1	1	3	5
	使える	1	2	1	4
マイナスの語	φ				
プラス判断語	ある	1	3	41	45
マイナス判断語	φ				
無評価	φ				

3語に共通して表れる語は「頑張る」「使える」「ある」の3語のみという結果となった。「まずまず」では動的述語修飾用例自体があまり使われない影響から、動的述語修飾用例における3語の共通性を見出すことは難しい。表2において重要だと思われるのは、3語に共通してみられる動詞というより、「そこそこ」が「ある」と非常に結びつきやすいという点だと思われる。「そこそこ」における動的述語修飾用例の用例は、301例と多いが、そのうち「ある」と結びつくのは、ここで挙げた「プラス判断」の41例と、後に挙げる「マイナス判断」に分類した1例、「無評価」に分類した6例と、合わせて48例（出現率約16%）見られ、「そこそこ」を特徴づける重要な偏りだと思われる。以下(4)～(9)に「ある」と結びつく用例を挙げ、分析を行う。

(4)配当が八百円超とまずまずありましたので、最悪の場合を考えて馬連も押さえることとしておきました。(PB37_00173)

(5)放置してたら含みまあまああったのにまさかの同値(〒_〒)ウウウ ユアサも下値叩いて調子に乗って売ったらサクッと反転されたりとかなり難しく感じた日経は7日続伸の半値押し(OY14_38908)

(6)仕事は続けてあるので、能力もそこそこあると思うのですが、私自身、自分の文章は「ただまとまってるだけで味がない」おもしろ味がないと思うのです。

(PB28_00019)

(7)ウエストが、特別に細くて逆三角形をしている—という肉体ではない。身長はそこそこあるのに、ずんぐりして見えるのは、あまりに筋肉の量が多いからであった。

(LBp9_00153)

(8)立地条件もよく、土地もそこそこあり、非常にいい物件に見受けられるのに、周囲の同等の物件より2～3割安いってことは…出るんですかね、あれが？

(OC08_05298)

(9)スーパーサブとしての能力も高いし、キープ力もドリブル突破力もあるし決定力もそこそこある。チームの2トップの相方のエメルソンのおかげで過小評価されているが、彼のポテンシャルはエメルソンなしでも十分A代表でも通用するレベルだと思う。(OC06_01787)

(4)、(5)の用例が見られることから、「まずまず」、「まあまあ」も「ある」を修飾できないわけではないが、「そこそこ」の方がはるかに多く用例が見られるのはなぜだろうか。

(6)～(9)の用例を見ると、前後の文脈から「ある」という程度量が大きければ大きいほどプラスの評価になることがわかる。そのため、「そこそこ」は話者のプラスの評価を伝えるというよりは、評価対象としているものの程度量が「話者による程度量の基準以上に存在している」という事実を伝えることに重きをおいているように捉えられる。(6)～(9)では、「そこそこ」の前後の文脈に、評価性を表す語が述べられている。(6)では、「能力がそこそこ(ある一定程度は)ある」という前提条件に対して後の文脈で、「面白みがない」という評価をくだしている。(7)は、「身長はそこそこ(ある一定以上に)あるのに」の発話の後、「ずんぐりしてみえる」という話者の評価を述べている。(8)については、「そこそこ」の前に、「良い」という評価を表す典型的な言葉が出てきており、(9)についても「能力が高い」という明確な評価表す語句に続く形で、「そこそこある」が表れる。これに対し、「まずまず」の用例(4)では、前後の文章に評価を表す語は見当たらない。これは、「まずまず」が「プラスの評価」を表していることが明確であるからと考えることができる。話者の評価を重視して表すか、程度量の存在を重視するかで、「まずまず」と「そこそこ」の使いどころが変わるとの見方が可能である。「無評価」タイプに分類した動詞の中にも、「そこそこある」の形

が複数見られるのも、「そこそこ」が評価的な面ではなく程度量を表す面が重視されやすいからだと考えられる。

(10)この年代になってくるとこだわりもそこそこあって、自分が惚れる服となかなか出会うことが難しいかんじもします。。(OC09_00838)《無評価》

(11)難易度もそこそこあり、古典的表現をお求めならば、シューベルトの後期ソナタ作品も面白いと思います。(OC01_07883)《無評価》

3.2.「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まずまず」と「まあまあ」に共通して現れる被修飾語群（B群）を挙げる。

表3 B項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	合計
プラスの語	φ			
マイナスの語	φ			
プラス判断語	入る	1	2	3
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

「まずまず」と「まあまあ」に共通して用いられる語は「入る」だけとなった。「プラス判断」に分類した用例は、「まずまず」で5例、「まあまあ」で21例、「そこそこ」で119例と、「そこそこ」が圧倒的多数だったが、「入る」に対しては「そこそこ」が使われない¹という点が興味深い。

(12)私は比較的好調で、軸を意識しながらプレーをしたので打ち込みがまずまず入りました。(OY15_22586)

(13)あれは日本では評判がよくなかった。客はまあまあ入った黒字公演だったんですが、批評はおもわしくなかった。(LB15_00051)

¹ ただし、「そこそこ」においても、「無評価」タイプの「入る」を修飾する用例は見られた。

(a) なかなか根強い人気なのかお客さんはたくさん来ておりました。そこそこお店が入っているようです。2階にお店が集中しておりました。(OY03_05855)

A群で考察した内容を踏まえると、(12)には「比較的好調」、(13)には「黒字公演」というプラスの評価語が入っているため、「まずまず」、「まあまあ」をそれぞれ「そこそこ」に置き換えても、不自然さはないように思われる。用例数や用例を収集した資料による偏りも考えられるので、この結果については現段階では検討の余地を残す。

3.3.「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

続いて、「まずまず」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（C群）を挙げる。

表4 C項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	そこそこ	合計
プラスの語	やれる	2	3	5
	安定する	2	1	3
	弾ける	1	1	2
マイナスの語	φ			
プラス判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

「まずまず」と「そこそこ」に見られる共通の語は、「プラスの語」で3語得られた。C群に分類される語に限られたことではないが、「可能動詞」を修飾する用例が少なくないというのは注目すべき点だと考えられる。

(14) ゆっくり休め、自分の好きなことであつたらまずまずやれて、自分の居場所、仲間がいるようになれば、自然と「働きたい」「いま以上のことをしたい」という気持ちが出てくるものです。(PB24_00081)

(15) 「ホームランは20本くらい。そこそこやれるはず」なんていう評論家は、松井に対して失礼。(PM31_00439)

(16) 発表会に向けて、毎日休まず練習してきたピアノ。取り組んできた3曲がまずまずに弾けて、安堵&安堵。(OY05_01734)

(17) 旅公演に同行した助手のひとりに、そこそこバイオリンを弾ける人間がいたんですよーそれでも、ちゃんとうまくいったものです」(LBn9_00131)

(14)は、統合失調症を患う人が、自分の好きなことが「完璧でないにしろ、本人がある程度満足できる程度に」やれることを示している。「やれる」ということに「プラスの評価」を付加することが文脈上、重要であると考えられる。(14)に対して「そこそこ」を使うこともできるが、話者の評価的な見方は「まずまず」に比べると薄くなるように感じられ、やや淡泊な印象の文章になる。(16)は、話者が努力してきたピアノの演奏について「まずまずに弾けた」と述べている。この文章を「弾けた」とだけ表すと、演奏の出来不出来は関係なく、「ただ単に弾くことができた」ことを示すことになる。そこに「まずまず」を加えることによって、「話者が納得できる程度に弾くことができた」という意味を加えることができる。(16)についても、「そこそこ」と置き換えることはできるが、その場合は「話者の満足感」といった評価的な側面は薄れ、どちらかという「聴衆から見たときに不出来だと思われない程度に」というような、一般的（客観的）な見方に近くなるように感じられる。

以上の(14)、(16)に見られるように、動詞を修飾する用例が少ない「まずまず」であっても、「話者（や動作主）の積極的な評価性」を表現する必要がある文脈では用いられる。ただし、特に話者の満足感といった評価的な側面を強調する必要がない場合は、動的述語修飾用例においては「そこそこ」が優勢であると考えられる。

3.4.「まあまあ」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（D群）を挙げる。

表5 D項目の被修飾語群

	被修飾語	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	できる	4	19	23
	満足する	1	4	5
	見られる	3	1	4
	食べられる	2	1	3
	仲良くする	1	1	2
	ヒットする	1	1	2
マイナスの語	φ			
プラス判断語	する	2	6	8
	なる	1	7	8
	いる	1	2	3
	回る	2	1	3
	食べる	1	1	2
マイナス判断語	φ			
無評価	ある	1	6	7

「まあまあ」に用例が見られない「マイナスの語」と「マイナス判断語」以外の項目では、全ての項目に該当語が見られる。C群と同様、D群でも可能動詞が複数見られ、特に「できる」については、「まあまあ」「そこそこ」ともに複数の用例が見られるのが特徴的である。

- (17)その説明と受け答えで思わぬ長電話となってしまい、途中、三、四回受話器を持ち替えたものでした。まあまあ理解できたところで電話を切ったときには、一時間半が経過していました。(PB34_00399)
- (18)本命の方も、「まあまあできたよ～」と失敗は無かった様子なので、あと少しドキドキしながら待つだけです。(OY08_01268)
- (19)漢文の口語訳ができなくて、もう全滅かも・・・現代文もあまり自信ないかも。家庭科はまあまあできたと思います。(OY14_47953)
- (20)小さな飲み屋をやって生きてきた女性だから、目が不自由になって以後も、そこそこ台所仕事はできるのだった。(LBn9_00042)
- (21)エメレンツィアは学校でのお昼ご飯はたいていの場合、学食かパンである。料理はそこそこできるらしいけれど、なにぶんホテル暮らしであるため自炊する機会はほとんどないらしい。(PB59_00095)
- (22)ちなみに将棋の羽生善治さんは世界で3985位だそうですとりあえず将棋がそこできればチェスを覚えるのに一日もかかりません(OC12_00207)

(17)～(19)に見られるように、「できる」を修飾する「まあまあ」は、いずれも話者自身を自己評価する文脈をとる。これは「そこそこ」には見られない傾向である。「まあまあ」は、何らかの行為に対する話者の実感が表されやすいといえる。その実感とは、「はっきりと断定はできないが、何となく」といったぼんやりとした肯定感だと予想される。(17)では「思わぬ長電話」となったことから、相手の話を理解するのに時間をかけてしまったことをもちだし、1時間半かけてようやく「まあまあ理解できた」、つまり「全て理解できたとは言えないが、なんとなく分かった」状況に至ったということを述べている。(18)、(19)においては、必ず良い結果が出ると保証があるわけではないが、「なんとなく手ごたえはある」ことを示すために、「まあまあできた」が使われているものだと考えられる。

「そこそこ」は話者自身の実感を示す以外に、(20)～(22)のように、話者以外の第三者に対して、「どの程度できるのか」について言及する場合にも用いることができる。「まあまあ」

と比較し、「そこそこ」は「話者自身の実感」が伴いにくい（必ずしも必要としない）と考えられる。

3.5.「まずまず」にのみ表れる被修飾語群

本項以降は、それぞれの語にのみ現れる被修飾語群を列挙し、特徴的な用例を挙げながら各語の傾向について考察する。該当する被修飾語に対し複数の用例が見られる場合は（ ）内に用例数を示し、評価別に該当する被修飾語の異なり語数を記す。まずは、「まずまず」にのみ現れる被修飾語群（E群）の語を列挙する。

《プラスの語》気に入る、目を引く（異なり語数2語）

《マイナスの語》φ

《プラス判断語》達する(2)、知られる（異なり語数2語）

《マイナス判断語》φ

《無評価》φ

「まずまず」は動的述語修飾用例が14例のみということもあり、E群に分類される修飾語は少数となった。評価を帯びる語が少ない動的述語に対しては、「まずまず」はあまりなじまないものと考えられる。ただし、話者の積極的な評価を表す場合には、動的述語を修飾する場合にも「まずまず」は使用できる。

(23)本当に気に入った美術品を見ているときには、一番上のボタンを指で触ります。まずまず気に入った場合には二番目のを、そして並の物の場合には三番目で、さらにどんどん下がって行くわけです。(LBk0_00004)

(24)開業の動機、目的の達成状況をみると、「十分達せられた」とするものは9%、「まずまず達せられた」とするものは70%となっている。動機、目的別にみると、「自己の創造的能力が発揮できるから」とするものは、「十分達せられた」と「まずまず達せられた」を併せると87%と達成された割合が最も高い。(OW1X_00043)

(23)は「並の物」より上位に位置づけられる評価として「まずまず気に入った場合」と表現されている。(24)はアンケート項目の一部であるが、最も評価の高い「十分達せられた」

に次ぐ評価の表現として「まずまず達せられた」が設けられている。『『十分達せられた』と『まずまず達せられた』を併せると』という表現があることから、「まずまず」が積極的な評価を示していることは明らかである。動的述語の性質上、静態述語と比較すると評価を伴いにくいために「まずまず」には現れにくい。話者の「プラスだと捉えられる」という評価を示す場合には使用が認められる。

3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群（F群）の語を挙げる。

《プラスの語》行ける(2)、回復する、香る、ためになる、眠れる、マッチする、見込める、役に立つ、やる、許せる（異なり語数10語）

《マイナスの語》φ

《プラス判断語》合う、いく、隠れる、空く、持つ、持てる（異なり語数6語）

《マイナス判断語》食べる（異なり語数1語）

《無評価》準ずる、当てはまる、落ち着く、準ずる、並ぶ、振る（異なり語数5語）

F群に分類される語は「プラスの語」が最も多いが、「無評価」に分類される語が一定数見られるという点で「まずまず」と異なる傾向を示している。「無評価」の用例には「厳密には言えないが何となく」という話者の意図が読みとれそうなものが複数見られた。

(25)おフロにはどのくらいの頻度で入りますか。 →ぼくは毎日入りたい。上のムスメも、まあまあぼくに準ずる。妻はフロ嫌いなので二、三日にいっぺん。(LBg5_00016)

(26)おか泉へマラソン終了後なので人がわんさかわんさか！まあまあ並びましたね～でも、まあ回転は速いのですんなり座れました。(OY14_43036)

(25)は、上のムスメに対して、自分と同じではないものの、「大体同じ程度である」ことを示すのに「まあまあ準ずる」と表現している。「訳、およそ」といった意味合いに近い表現だといえる。(26)は「並ぶ」ことにプラス・マイナスの判断があるというよりは「厳密に説明することはしないが、それなりに」といった示し方が「まあまあ」から感じられる。

3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

本項では、「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群（G 群）の語を挙げる。

《プラスの語》売れる²(7)、楽しめる(6)、維持する(3)、充実する(3)、遊べる(2)、うまくいく(2)、こなせる(2)、成功する(2)、慣れる(2)、味わう、イケてる、いける、いただく、(芸が)受ける、動ける、踊れる、稼ぐ、稼げる、片付く、勝つ、勝てる、活躍する、感心する、効く、期待する、期待できる、(頭が)切れる、貢献できる、栄える、熟成する、知られる、(気心が)知れる、信頼できる、滑れる、楽しむ、貯まる、作れる、適合する、整う、とれる、入手できる、飲める、話せる、はやる、晴れる、繁盛する、開ける、拓ける、普及する、ブレイクする、恵まれる、儲かる、儲ける、もらえる、盛り上がる、優遇する、よくなる（異なり語数 57 語）

《マイナスの語》殺到する、悩む、(値が)張る、負ける（異なり語数 4 語）

《プラス判断語》売れる³(6)、出る(6)、やる(6)、動く(3)、知る(3)、走る(3)、当たる(2)、揃う(2)、持つ(2)、上がる、挙げる、集まる、色づく、打つ、得る、覚える、貸す、変わる、暮らす、来る、経営する、経過する、経験する、答える、咲く、支給する、上昇する、育つ、食べさせる、保つ、使う、つく、つむ、呈する（異なり語数 34 語）

《マイナス判断語》かかる(5)、混む(2)、する(2)、ある、いる、売れる、気になる、溜まる、増える、回る（異なり語数 10 語）

² 「プラスの語」に分類している「売れる」は全て「売れている」あるいは「売れてくる」といった形で表れるもので、商品などの「売れ行き」を高く評価するときの表現であると判断し、ここに分類した。

(b)大阪では、レギュラー番組いっぱい持ってます。そこそこ売れてるのかな？東京の番組では、伊東家の食卓に出ています。(OC01_09641)

(c)事実、そこそこ小説が売れてきて、預金通帳の数字が七桁になり、八桁になってきても、せっせと預金をした。(LBr9_00130)

³ 「プラス判断」に分類している「売れる」は、「プラスの語」で分類した形式以外の形で表れ、「売れる」こと自体に評価性が付加されていないと考えられる用例である。

(d)世のなかと距離を置いたままでも、アルバムはそこそこ売れたはずだ。言うまでもなく、もう稼ぐ必要もない。(PB27_00041)

(e)そうした場合、一般的に十日間ぐらい、あるいは半月ぐらいは商品がそこそこ売れるというふうに私の調べではなっております。(OM11_00005)

《無評価》いる(4)、やる(4)、する(2)、出回る(2)、入る(2)、勉強する(2)、分かる(2)、行く、得る、演奏する、学修する、カバーする、聴く、気にする、下げる、させる、達する、食べる、使う、使われる、つつく、続く、出る、溶ける、残る、走る、離す、冷やす、見かける、読む、練習する（異なり語数 31 語）

G 群に分類された語は上記のように非常に多い。特に、「プラスの語」においては異なり語数で 57 語を数えた。C・D 項目でも少し触れたが、可能動詞との結びつきが強いことが、「そこそこ」において動的述語修飾用例が多くとられる要因の 1 つであると考えられる。G 群の「プラスの語」のうち、可能動詞として捉えられるものは「売れる、楽しめる、遊べる、こなせる、取れる、動ける、踊れる、稼げる、勝てる、期待できる、貢献できる、信頼できる、滑れる、作れる、とれる、入手できる、飲める、話せる」の 18 語を数える。

(27)これが予想以上に売れて、印税ががばっと入ってきました。次に出した本もそこそこ売れたんで、「こんなに儲かるなら、銀行員よりよっぽどいいや」と銀行を辞めて、(PB55_00127)

(28)特別展望台を楽しんだ後は、一般展望台をのんびり一周。あいにくの曇りですが、そこそこ景色を楽しめました。(OY14_26767)

(29)クルマでお越しになられた方が非常に便利です。こどもの国はそこそこ遊べますよ！！(OC13_01686)

(30)確かに俺はそれほど大きな仕事の不満はない。たいていの仕事や人間関係はそこそここなせる世渡りの術は苦労しなくても身につけているような気がする。(LBj3_00099)

(31)頑張って動きましたよ。ボディジャム 新曲 2 回目。そこそこは動けてたと思うけどなあ。1 回目と比べたらかなりよかったはず。(OY15_22429)

また、「～する」という形式をとる動詞の数も多い。プラスの語に分類されたものだけでも、「維持する、充実する、成功する、活躍する、感心する、期待する、熟成する、適合する、繁盛する、普及する、ブレイクする、優遇する」の 12 語が挙げられている。プラスの語以外の語群を見ても、「マイナスの語」に「殺到する」、「無評価」の語群に「勉強する、演奏する、学修する、カバーする、気にする、練習する」が見られ、全て含めると 19 語が数

えられる。

- (32) そんな懐かしい記憶も蘇り、今年はそこそこ充実した運動会だったんじゃないかな？って思いました☆ (OY14_21364)
- (33) もし、日本がユニークであるとすれば、西欧文明圏に属さず、しかもその文化・伝統をそこそこ維持しながら近代化を成し遂げた唯一の国であるという点であろう。(LBk3_00110)
- (34) だからオレ、この世界で成功したけど、もしかしたらこの世界じゃなくても、そこそこ成功してたんちゃうかなーってチラッとと思うね。(OB5X_00290)
- (35) そんな中井さんに視聴者からクレームの手紙がそこそこ殺到したのです (OY04_03915)
- (36) 大学にはいった途端、自分の目の前に敷かれたレールが見えはじめた。そこそこに勉強をして進級さえしていけば、卒業するのはたやすい。(LBo9_00058)

以上、「可能動詞」と「スル動詞」との結びつきの強さを見てきたが、被修飾語のタイプに注目すると、「まずまず」と「まあまあ」では1例も見られなかった「マイナスの語」と「マイナス判断」で複数の用例が得られるのも大きな特徴である。

- (37) いつもなら高田馬場で運動するのですが、あいにく本日は定休日で利用できません。そこそこ悩んだ結果笹塚駅にありますジムを利用することにしまして、まずは移動しました。(OY03_04549) 《マイナスの語》
- (38) 上原はメジャーで通用すると思いますか？そこそこ勝って、そこそこ負けての繰り返しで引退までメジャーで投げ続けられると思います。(OY03_08350) 《マイナスの語》
- (39) 私にしかできない仕事ってわけじゃないけど、私がやらなきゃいけない仕事もあって、そこそこ溜まったストレスを、毎晩のように会社の人達と飲みに行って発散していた。(LBo2_00045) 《マイナス判断》
- (40) 下道の国道は信号があるからそこそこ時間が掛かるが、どうにか開店時間の9時30分には間に合った。(OY15_18637) 《マイナス判断》

(37)、(38)は、「悩んだ」ことや「負ける」ことに対して、話者が「そこそこ」によって、マイナスの評価を付け加えているわけではない。「悩む」「負ける」という語自体にマイナスの意味合いがあるのみで、「そこそこ」はその度合い・程度量を限定しているにすぎないのである(そういった意味では、(37)(38)も「無評価」に近い用例であるとの見方も可能である)。(37)であれば、悩んでいた時間を、(38)であれば負け試合の回数を、「そこそこ」で「ある一定程度の」といった限定をしているとみるのが妥当だろう。

「マイナス判断語」に分類した(39)、(40)も同様に、文脈上「ストレスが溜まったこと」や「時間が掛かること」はマイナスであると判断できるが、「そこそこ」がマイナスの評価を付加しているわけではない。(39)ではストレス量を、(40)では時間の長さを限定しているのである。

以上のように考えると、被修飾語がマイナス(と判断できるもの)であったとしても、それは「そこそこ」の語自体にネガティブな要素があるということにはつながらない。

では、「プラスの語」や「プラス判断」に分類した用例についても同じ考察が可能だろうか。以下に用例を示す。

(41)ビルが本郷の名義になる前からそこで店を開き、馴染みの客でそこそこ繁盛していた。(PB59_00519)

(42)日本人では谷口徹がそこそこ活躍すると思います。(PM21_00412)

(43)ウチの場合は両親とも勉強も運動も苦手なのに、子供がそこそこ頑張っているので、参考になるかどうかは分からないけどどんなふうだったか少しお伝えしたいと思います。(OY08_01521)

(44)互いの性格も力量もそこそこ知った仲だから、「ミーさんがワッパ掛けた犯人なら心中してやるよ」という粕川の軽口も額面通り受け取っておくことにした。(LBt9_00032)

(45)いろいろ角度を変えて、その状態でテレビの映りを確認してください。そこそこ映ればお風呂場でも映る可能性は高いです。(OC02_03640)

(46)年金暮らしですが、退職金もそこそこ出ましたし、子どもたちも片付いていて夫婦二人暮らし、特に不自由も感じないできました。(LBt3_00006)

(41)～(43)が「プラスの語」に分類した用例、(44)～(46)が「プラス判断語」に分類した用例である。(41)、(42)を見ると、「繁盛している」、「活躍する」という被修飾語は、それ自体にプラスの評価があり、「そこそこ」はむしろ、その評価を抑えているように見える。これは、「そこそこ」が「ある一定程度に」という限定を行っているからと考えて問題ないだろう。繁盛の度合いや活躍の度合いを「最上級ではないが、一定の基準はクリアできる程度に」という意味を加えているものと考えられる。(44)、(45)においても「そこそこ」を取り除いても「プラス判断」が可能であることから、「そこそこ」自体に積極的な肯定な見方を示す機能があるとは考えにくい。(44)では互いの性格や力量の理解度を、(45)ではテレビの映り具合を、それぞれ「ある一定程度に」と限定しているのである。ここまでは、「マイナスの語」、「マイナス判断」で考察してきたことと矛盾しない。

しかし、(43)、(46)のような用例は、これまでの説明の妥当性が微妙になる。例えば、(43)の「そこそこ」は単純に「頑張っている」度合いを限定していると読むべきなのかどうかは判断が分かれそうである。「頑張りの度合いの限定」として読んでも、解釈上の問題はないが、両親が苦手なことに対して自分の子供が「頑張っている」ことに、プラスの評価を加えるために「そこそこ」を用いていると考えるのが自然なようにも感じられる。(46)についても、単に退職金が「ある程度出た」と捉えても問題はないが、そこに「生活に困らないくらい十分だと評価できるほどに」といった話者のプラスの見方を見出すことも可能である。

以上より、「そこそこ」は他の2語に比較し、話者の判断を伴わない程度的な側面に重きが置かれることを述べたが、(43)(46)に見られるような「プラスの評価の付加」があるように思われる用例も存在する。これらの用例に「そこそこ」が用いられる要因については、第8章で触れたい。

4.動的述語修飾用例に見られる各語の特徴

本章では、3語が動的述語を修飾するとき、どのような評価の被修飾語をとるのか、取り得る被修飾語のタイプに偏りはなにか、という観点を中心に考察を行った。その結果明らかになった各語の特徴を以下にまとめる

4.1.「まずまず」について

「まずまず」は動的述語修飾用例をとる用例が非常に少ない。これは、静態述語に比べて動的述語は評価やスケールをもつ語が少ないからであると考えられる。ただし、動的述語修

飾用例が少なかった「まずまず」であっても、「話者（や動作主）の積極的な評価」を表現する必要のある文脈であれば、用いられる。C群で「やれる」、「弾ける」について触れたが、ただ単に「やることができる」、「弾くことができる」を伝える文脈でなく、「満足できるほどにやれる」、「満足できるほどに弾ける」といった話者のプラスの見方を付加したい場合は「まずまず」が使用される。

4.2.「まあまあ」について

「まあまあ」は、「まずまず」や「そこそこ」に比較すると際立った特徴が見出しにくい。D群で述べた「できる」を修飾する用例に「そこそこ」との差異を感じさせる特徴があった。「対象語+できる」の形をとる用例について、「そこそこ」の場合は「第三者」についての力量を推し量るような文脈で使用されるのに対し、「まあまあ」は話者自身の自己評価を表しやすいということが明らかとなった。ここから、何らかの行為に対する「話者の実感」と表されるような心情が「まあまあ」に込められているのではないかと考えられる。

4.3.「そこそこ」について

「そこそこ」は動的述語修飾用例を取りやすく、修飾する語種も豊富である。その中でも「ある」を修飾する用例が48例と非常に多く見られたのが特徴的であった。「そこそこ」は他の2語に比べ、「話者の評価」の介入が弱く、量の大小・多寡を限定するのみでの使用も可能であり、それが「ある」を修飾する用例の取りやすさにつながっていると考えられる。

「マイナスの語」や「マイナス判断語」を修飾する用例が少ないのも、「話者の評価」の側面ではなく「程度の限定」の側面が比較的強く表れるからだと推測できる。しかし、「マイナスの語」「マイナス判断語」に分類される用例が一定数見られるとはいえ、「プラスの語」「プラス判断」に分類される用例の方がかなり多いのも事実であり、話者によるプラスの見方を付加していると捉えられる用例も見られる。そのため、「そこそこ」にも、評価的な側面は存在するものと思われる。この点については【第Ⅱ部】で詳しく扱いたい。

第4章 名詞を修飾する用例

1.はじめに

本章では第1章で分類した用例のうち、名詞を修飾する用例を扱い、各語が修飾する語の傾向の違いを見る。次節に分類方法を挙げ、第3節でそれぞれの語が修飾しやすい語のタイプについて分析、考察を行う。

2.被修飾語の評価分類

3語の評価性の傾向を探るため、まずは第2章・第3章と同様に、各語の被修飾語を「プラスの語」、「中間的な語」、「マイナスの語」、「評価性のない語」に分類する。「評価性のない語」の分類については、第2章・第3章で述べた「プラス判断語」と「マイナス判断語」と「無評価」の3つのタイプ以外に、「中間的な判断を示す語」と捉えられる用例が散見された。そのため、本章の分類においては、「評価性のない語」については「プラス判断」、「中間的判断」、「マイナス判断」、「無評価」の4分類を行うものとする。

【評価性のない語を修飾する用例】

- (1) だから、アメリカが「弱い味方」である日本に望む「セカンドベスト」の選択は「国論がなかなか統一しないが、合意に至る民主的手続きは確保されており、そこそこの軍事力はあるが、職業軍人が政治権力に近づけないように構成された政体」である。(PB33_00625) ≪プラス判断≫
- (2) 忙しすぎたら見過ごす景色もあるでしょ。たまには立ち止まって見てみたら。いい年もあれば、まあまあな年もあるし、悪い年もある。でも二度と同じ年はやってこない。(PB28_00046) ≪中間的判断≫
- (3) 「いや出世なんかしなくてもいいですよ。そこそこの生活ができればいい」という人間がいたっておかしくない。(LBp2_00050) ≪中間的判断≫
- (4) こういった点から、持てるのは容姿がよい、もしくは、そこそこの容姿で気立てがよいという女性は、モテます。(OC09_14907) ≪中間的判断≫
- (5) お金に困っている人や、困ってはいなくてもそこそこの収入しかない人は、たいていの場合お金に動かされるままになっている。(OB5X_00197) ≪マイナス判断≫
- (6) 大手ボーイング社などの守備範囲外のジャンルでしたから、そこそこの需要に対応しました。(LBs3_00172) ≪無評価≫

名詞修飾用例に見られた「評価性のない語」のうち「中間的判断」とみなせる用例を(2)～(4)に挙げた。(2)は、プラスの語(「いい年」)とマイナスの語(「悪い年」)の中間に位置していることから「中間的な判断」がなされていると捉えられる。(3)・(4)は、評価がプラスでもマイナスでもなく、その中間的な程度であると判断できる。

また、名詞修飾用例の中には、「評価性のない語」について、用例を通してみると何かしらの話者の評価はあると考えられるものの、その評価がプラスなのかマイナスなのかを判断しにくいと思われる例がいくつか存在した。その用例については、「不明¹⁾」と分類した。

以上の分類に沿って、用例数と出現率をまとめると、以下の表1の結果を得た。

表1 被修飾語の評価分類(名詞)

	プラス	中間的	マイナス	評価のない語					合計
				プラス判断	中間的判断	マイナス判断	無評価	不明	
まずまず	14 14.3%	1 1.0%	0 0.0%	77 78.6%	0 0.0%	1 1.0%	0 0.0%	5 5.1%	98
まあまあ	5 6.7%	0 0.0%	0 0.0%	57 76.0%	7 9.3%	1 1.3%	1 1.3%	4 5.3%	75
そこそこ	24 14.5%	1 0.6%	1 0.6%	88 53.0%	11 6.6%	6 3.6%	35 21.1%	0 0.0%	166
合計	43 12.7%	2 0.6%	1 0.3%	222 65.5%	18 5.3%	8 2.4%	36 10.6%	9 2.7%	339

表1から、名詞修飾用例については、静態述語修飾用例や動詞述語修飾用例に比べて、評価をもつ語を修飾する用例は少なく、3語ともに8割から9割にかけての用例が「評価のない語」を修飾していることが分かる。しかし、「評価のない語」の下位分類を見ると、用例の出現率はそれぞれ違った様相を見せている。「プラス判断」に分類された用例の出現率は「まずまず>まあまあ>そこそこ」の順に下がっており、代わりに「まあまあ」では「中間的判断」の用例が、「そこそこ」では「無評価」の用例の出現率が高まっている。

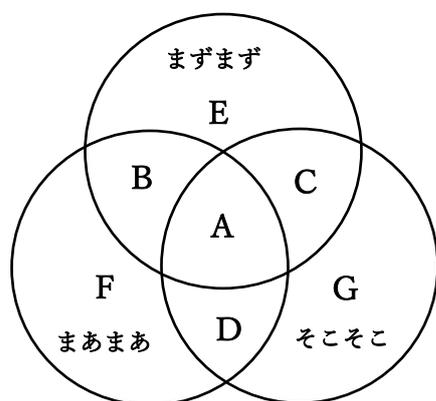
この結果について詳細な分析を加えるため、次節では第2章・第3章と同様に、本章でも

¹⁾ 例えば、以下のような用例は、評価性のプラス・マイナスの判断が困難だと判断し、「不明」としている。

(a) コーヒーの値段は五〇〇ウォンから八〇〇ウォン(約九〇円～一四〇円)の幅である。どこで飲んでも、まずまずの味[□]がした。(LBf2_00021)

(a)は、本章までの考察を踏まえて考えると、プラスの評価を表していると読み解くことができそうだが、前後の文脈からそれを裏付けられないため、本章では「不明」として扱った。

以下で立てる A～F の項目に被修飾語を分けて列挙し、考察を行う。



- A…全ての語に表れる被修飾語群
- B…「まずまず」「まあまあ」に表れる被修飾語群
- C…「まずまず」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- D…「まあまあ」「そこそこ」に表れる被修飾語群
- E…「まずまず」にのみ表れる被修飾語群
- F…「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群
- G…「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

図1 語群分類図

3.各語の被修飾語群による分析

本節では、前節で表した分類図の項目ごとに、各語が修飾する名詞を分けた結果を示す。なお、A～D 群に分類される語については、それぞれの用例数が分かるように表にまとめた。

3.1.全ての語に共通して表れる被修飾語群

まず、3 語全てに共通して現れる被修飾語群（A群）を挙げる。

表2 A 項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	成功	6	1	3	10
	成果	3	1	1	5
中間的な語	φ				
マイナスの語	φ				
プラス判断語	出来	7	4	1	12
	成績	3	3	5	11
	味	5	3	2	10
	結果	6	1	1	8
	水準	1	1	4	6
	能力	1	1	1	3
	広さ	1	1	1	3
中間的判断語	φ				
マイナス判断語	φ				
無評価	φ				

表2より、3語に共通して現れる被修飾語として「成功、成果、出来、成績、味、結果、水準、能力、広さ」がある。特に、「成績」は「そこそこ」で5例、「まずまず」と「まあまあ」で3例ずつと、いずれの語においてもよく用いられることがわかる。

- (7) 現代サッカー界において史上最強の名を欲しいままにするスター軍団、R・マドリッド。その最強軍団はシーズン序盤を終えたここまで、まずまずの成績を残している。(PM31_00990)
- (8) 予備校に通っている浪人生です。英語には自信もあり国語もまずまずの成績なのですが、暗記するだけの日本史に悪戦苦闘しています。(OC12_04603)
- (9) こんなふうに新日報社がまあまあの成績をあげて来たことについては、とにかく他の大新聞の轍を踏まないのがよかつたといふ、某評論家の冗談半分の説がある。(OB4X_00083)
- (10) 二十七日開票の都議会議員選挙で、自民党はまあまあの成績。ただ、発足したばかりの日本新党が二〇名当選と、不気味な存在感を示した。(LBt3_00141)
- (11) 実際、世界のいろいろな野球を見れましたし、あんなプレッシャーのなかでそこそこの成績を収められて、精神的にも強くなれたと思うし、得たものは大きかったですね。(PM11_00335)
- (12) 残留が決まってからも、しばらくは「あくまでも清原は一選手」という立場をとっていたのに、次第に言動が甘くなっていき、清原がオープン戦でそこそこの成績を残すと、ついに開幕4番で使ってしまいました。(OC06_02618)

「成績」は、何らかの結果を程度限定し、かつ話者の評価を表現する文章で使われやすい語であることから、3語に共通して表れるのだろう。また「出来」についても「成績」と同様のことがいえそうである。

- (13) あのところと同じレベルで踊るのは無理としても、まずまずの出来だった。いいえ、それ以上。すごくいい出来だった。(LBo9_00237)
- (14) 昼の歓迎会での職員紹介、まあまあの出来ではあったが、思ったほどの笑いが起こらず「ホー」とか「上手いねえ」など感心されてしまうのにはがっかり。(OY05_06825)

(15)兄と姉の陰に隠れて、世間の人のは何一つ知ろうとせずに、勉強だけはそこそこの出来だったものだから、誰にも評価もされず気にもされずに、目立たぬ存在で大きくなったのだというのです。(PB33_00442)

(13)~(15)はいずれも、「最上級とは言えないまでも、ある程度納得できる出来」であることを示していることがわかる。A群に分類された「成功」「成果」「結果」「水準」「能力」などについても同様の説明ができそうである。やや異色に感じるのは、「味」を修飾する用例が3語ともに複数見られるという点である。

(16)まず並んだのは、弁当風懐石料理。ビールで乾杯し、まずまずの味と豪華さを味わいながら話がはずみ、さて最後にうどんタイムとなった。(LBo6_00019)

(17)スペインでいろんなパエジャを食べてきたけど、ダンナの作るパエジャもまあまあの味。ま、後片付けはあるけど、待っているとテーブルにご飯が出てくるのは幸せ♪(OY03_10257)

(18)中国料理は日本で食べてもそこそこの味がするから、たいしたものである。(OB3X_00224)

「成績」や「成功」、「出来」などに比べると「味」は使用場面が限られ、汎用性が低いように感じられる。評価対象が味覚に関するものとなるだけで、「成績」「出来」などと同様に、評価対象のありようを程度限定し、かつ話者の評価を表現することが可能ということからよく使用されるのだろうか。しかし、「味」との共起率の高さは、第2章で述べた「おいしい」との共起に対する説明と矛盾する点が見られる。第2章で扱った静態述語修飾用例においては、味覚に関わる「おいしい」という語に対して、「まあまあ」「そこそこ」ではまとまった用例数が得られるのに対して「まずまず」では1例も用例が得られなかったことに言及した。その際に、数値で測ることが困難な「話者の感覚による評価」に対して、「まずまず」は使われにくい可能性を示した。しかし、同じ「味覚による感覚的な事柄」である「味」については、3語が共通して見られ、しかも「まずまず」に最も多く用例が表れた。したがって、「感覚的な事柄に「まずまず」は使いにくい」という説明は成り立たなくなる。このことを説明するには、「(まずまず/まあまあ/そこそこ)おいしい」や「(まずまず/まあまあ/そこそこ)の味」についての違いを追うだけでなく、「まずまず(おいしい/の味)」、

「まあまあ (おいしい／の味)」、「そこそこ (おいしい／の味)」についての用例の取りやすさ、意味の違いを見ていく必要があるだろう。「何をどのように評価しているのか」という視点での調査が必要であると思われる。感覚的な情報を評価する場合に、「まずまず」「まあまあ」と「そこそこ」で違いはあるのかどうかを、さらに検討の余地が残る。

3.2.「まずまず」「まあまあ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まずまず」と「まあまあ」に共通して現れる被修飾語群（B 群）を挙げる。

表 3 B 項目の被修飾語彙群

	被修飾語	まずまず	まあまあ	合計
プラスの語	φ			
マイナスの語	φ			
中間的な語	φ			
プラス判断語	天気	3	2	5
	音	1	1	2
	滑り出し	1	1	2
	部屋	1	1	2
中間的判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

B 群に分類された名詞は「天気」「音」「滑り出し」「部屋」の 4 語であった。興味深いのは、「天気」という名詞に対して、「まずまず」、「まあまあ」では複数の用例が見られるのに対し、全体の用例数が多い「そこそこ」では 1 例も見られないという点である。

(19) まずまずの 天気 がつづいて、町の雪はほとんど消えかけていた。(PB19_00124)

(20) 天気予報では、このところの冷え込みもさほどではなく、まずまずの 天気 ということである。(PB16_00029)

(21) 風があったが まあまあの 天気 だった。十勝川温泉の裏山の展望台に寄り道した。(LBi9_00164)

(22) またいつものようにシャワーが通り過ぎた日もありましたが全体としてはおだやかな まあまあの お天気 でした。(OY11_06988)

天気は「良い」と「悪い」の判断は容易であるものの、その間の評価となると、個人の感覚や、その場の状況（気温や風の強弱ほどの程度が望ましいのかなど）で大きな幅が出てくる。そのため、他の2語と比較し「話者の判断」の介入が弱い「そこそこ」は使われにくいということが推測できる。本研究の調査の範囲では際立った用例としては「天気」しか挙げられなかったが、他にも「評価を判断する基準が個人や状況によって大きく変わるもの」であれば、「そこそこ」が使いにくく、「まずまず」や「まあまあ」が中心になって修飾する名詞も存在する可能性がある。

3.3.「まずまず」「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

続いて、「まずまず」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（C群）を挙げる。

表4 C項目の被修飾語群

	被修飾語	まずまず	そこそこ	合計
プラスの語	φ			
マイナスの語	φ			
中間的な語	φ			
プラス判断語	金額	1	3	4
	暮らし	1	2	3
	レベル	1	2	3
	評価	1	1	2
中間的判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

C群に分類された語は「金額」「暮らし」「レベル」「評価」の4語であった。「レベル」「評価」については、A群（3語に共通する語群）中に多くの用例を得た「成績、出来」と類似する語であると考えられる。

(23) 現在、五カ所湾で育てた真鯛を使った冷薫の注文も多く、まずまずの評価を得ている」と話す。(OY14_04164)

(24) 私は小分け派なのですがオクの香水小分けでそこそこの評価を持ってる方にはずれはまずないですよ (OC09_08026)

C群に分類された語を「まあまあ」が修飾できないとは考えにくく、表4の結果だけでは「まあまあ」とは異なる「まずまず」「そこそこ」の両者に共通する特徴は見出しづらい。

3.4.「まあまあ」、「そこそこ」に共通して表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」と「そこそこ」に共通して現れる被修飾語群（D群）を挙げる。

表5 D項目の被修飾語群

	被修飾語	まあまあ	そこそこ	合計
プラスの語	ヒット	1	1	2
マイナスの語	φ			
中間的な語	φ			
プラス判断語	収入	1	4	5
	画質	2	2	4
	もの	1	3	4
	点数	1	1	2
	とき	1	1	2
中間的判断語	φ			
マイナス判断語	φ			
無評価	φ			

D群に分類された語は「ヒット、収入、画質、もの、点数、とき」の6語であった。「収入」「画質」「点数」など、数値的な基準値を連想させる語が多いのが特徴である。

(25)あせってあせって仕事を探しましたが、なかなか見つからず、バイトも無く、仕方なくバイトの人材派遣に登録し、アルバイトを始めて仕事探しをしたら、すぐにやっとまあまあな収入が得られる仕事が見つかりました。(OC04_01338)

(26)これらを、町の市場にもっていけば、そこそこの収入が得られるのですが、それでも、それらの仕事に集中して、焼き畑をやめてまで米を買う人はいません。(OC05_03199)

(27)見れないほどではないですが、まあまあの画質で撮れる機種は大きくて重いです。写真を撮るのでしたらデジタルスチルカメラ。動画を撮るならデジタルビデオカメラです。(OC02_08347)

(28)他人に見てもらおうことを前提とした映像なので、設定が簡単でそこそこの画質の良い中クラス程度のカメラが適しています。(PB35_00114)

数値的な基準を想起しやすいという特徴は、第2章・第3章で述べてきた「そこそこ」の「話者の評価判断の介入が弱く、無評価に程度を限定する用例をとりやすい」という特徴と合致する。D群は「そこそこ」だけでなく「まあまあ」にも当てはまる語であるが、表5より、「そこそこ」がより多くの用例をとることがわかるので、「話者の評価判断の介入が弱く、程度の限定に重きが置かれやすい」という傾向がこのような形で表れていると考えられそうである。

3.5.「まずまず」にのみ表れる被修飾語群

本項以降は、それぞれの語にのみ現れる被修飾語群を列挙し、特徴的な用例を挙げながら各語の傾向について考察する。該当する被修飾語に対し複数の用例が見られる場合は()内に用例数を示し、評価別に該当する被修飾語の異なり語数を記す。まずは、「まずまず」にのみ現れる被修飾語群(E群)の語を列挙する。

《プラスの語》上柄、活躍、健闘、好評、チャンス、登山日和(異なり語数6語)

《中間的な語》φ

《マイナスの語》φ

《プラス判断語》内容(5)、動き、売れ行き、確率、関心、感想、ギタリスト、業績、国、形状、サイズ、仕上がり、住居、状態、状況、ショット、数字、スコア、生活、戦果、増加、食べ物、使い勝手、出足、出だし、図書館、配当、ビジネスプラン、ピッチング、品質、フランス語、プレー、ホステス、認められ方、未来、夜、リード(異なり語数37語)

《中間的判断語》スピード感(異なり語数1語)

《マイナス判断語》運氣(異なり語数1語)

《無評価》φ

静態述語や動的述語と比較し、名詞は語数が多いため、同じ語を修飾する用例が複数見られる場合は少ないが、「まずまず」の場合「内容」を修飾する用例が5例見られた。

(29)小倉恒投手(3番手で登板。3回1/3を4安打2失点) 「3イニングまでは無失点でまずまずの**内容**だったが、その後がいけなかった。(PN5h_00011)

(30)かなり筋肉痛がひどいけどパンプを目的にやったのでまずまずの内容！久しぶりに腕のUPです。少し太くなりました！（^◇^）(OY14_00233)

(31)ゴール前で息切れしたがまずまずの内容。次走はダート戦を予定しているとのこと、陣営にとってはデビュー戦の敗戦は織り込み済みか。(OY15_07603)

この他にも、A群の「出来、成績、味、結果」など、「まずまず」では特定の語で多くの用例を得る傾向にある。本研究の調査で、「まずまず」が修飾する名詞の中で、複数の用例を得たのは「成果、成功、出来、成績、味、天気、結果、内容」の8語であった。これらは、「味」と「天気」を除けばどれも、様々な具体的な事柄やものの総合的な評価や状態を指すことのできる語であると言える。第2章・第3章で示したように「まずまず」が話者の積極的な評価を示すのだとすれば、これらの「事柄・ものに対する全体的な状況説明・評価の表明」を示しうる名詞は「まずまず」との相性が良いと考えられる。

ここで、1例ずつしか見られなかった「中間的判断」と「マイナス判断」の用例も確認しておく。

(32)さすがに空気が動力源ですから、最高時速は約40マイル（約64km）と、まずまずのスピード感ですけど、約130マイル（約209km）の連続走行も可能になっているとのこと。 (OY15_11785) 《中間的判断》

(33)健康を重視した生活をしないと、大事なときに持っている力を発揮することができません。今月はまずまずの運気ですから、忙しいからと無理をせず、健康第一で連休の疲れも早めに解消しましょう。(PB5n_00014) 《マイナス判断》

(32)は、文の後半で、長距離の「連続走行も可能になっている」というプラスの評価に比べて、最高時速は取り立てて評価できるほどには至っていない、というような意味合いで「まずまず」が使われている。「まずまず」はほとんどの場合は積極的な評価を示すと考えられるが、「それほど大したことはない」といった評価を行う用例もわずかながら見られる。

(33)は前章までには見られなかった「マイナス」だと判断できる用例である。前後の文脈から、運気が（極端に悪いわけではないが）低まっていることを示しているように捉えられる。「まずまず」の修飾語をとる用例全体のうち、「マイナス」と判断される用例は(33)の1例のみであり、例外的な使用例だと考えられる。

3.6.「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群

次に、「まあまあ」にのみ表れる被修飾語群（F群）の語を挙げる。

《プラスの語》おいしさ、陽気（異なり語数2語）

《中間的な語》φ

《マイナスの語》φ

《プラス判断語》経営(2)、当たり、勢い、色、回収率、カット、金、完成度、記録、具、子、仕事、写真、収穫、授業、席、台、体重、タイム、高さ、釣果、ところ、年、乗り心地、日、秘書、部分、目覚め、物、よう、レース（異なり語数31語）

《中間的判断語》会社(2)、環境、子ども、ところ、年、レベル（異なり語数6語）

《マイナス判断語》レベル（異なり語数1語）

《無評価》人手（異なり語数1語）

「まあまあ」は名詞を修飾する用例が3語の中で最も少なく、F群にも際立った傾向は見出しにくい。しかし、「レベル」を修飾する用例において、「中間的判断」と「マイナス判断」が1例ずつ見られた点は注目すべきと考える。

(34) 実力はまあまあの $\boxed{\text{レベル}}$ なのに組み分けで得するチームがあったり、成績は抜群なのに予選リーグのグループが決勝トーナメント並みの戦いを強いられることになったり…。(PB27_00122) 《中間的判断》

(35) 一度気になると長い時間思い悩んでしまうタイプ。なにげなく言われた言葉なのに、それがずーっと心にひっかかってしまったり。そして、せっかく忘れていたのにふとしたことで思い出して再びムカツ。そのくり返しが習慣になってる？ いじわる度はまあまあ $\boxed{\text{レベル}}$ 。(PB31_00127) 《マイナス判断》

同じ被修飾語をもつにもかかわらず、文脈によって評価が変わって感じられるのでは、意思疎通に問題が出てきそうである。しかし、(34)(35)を見ると、他の評価基準を伴う語が共起しているため、「まあまあ」に続く「レベル」をどのように捉えるべきかは判断可能である。例えば(34)であれば、後に出てくる「成績は抜群」のチームに比べて、「まあまあ

ベル」、つまり「高い実力とはいえない普通くらいの実力のチーム」を指していることがわかる。(35)は占いの結果で様々なタイプ、様々な「意地悪度のレベル」を持った人の中で、「まあまあレベル」という段階が存在しているのだと読みとることができる²。「まあまあ」は程度の限定の度合い、また、話者の評価判断について前後の文脈を手掛かりにしなければ読みとりづらく、ある明確な評価を示しているとは捉えにくい。

また、「まあまあ」の名詞修飾用例には、「中間的判断」に分類できる用例も見られた。以下に「中間的判断」に分類した用例を示す。

(36)たまには立ち止まって見てみたら。いい年もあれば、まあまあな^年もあるし、悪い年もある。でも二度と同じ年はやってこない。(2)再掲)

(37)土壌動物を Aグループ5：良い環境にいるもの(5点) Bグループ3：まあまあの^{環境}(3点) Cグループ1：悪化しても生息できる(1点)の3つのグループに分け点数をつけます。(OY11_07560)

(38)おれはそのままいけば、中流の生活をつづけ、ほどほどの嫁さんをもらい、まあまあの^{子供たち}を育て、適当に生き、適当に死ぬだろうという予感があった。
(LBe9_00034)

(36)は、「いい年」と「悪い年」の間の評価として「まあまあな年」が位置づけられており、(37)は3段階の評価が行われている中、中間の評価として「まあまあ環境」が用いられていることがわかる。また、(38)は「中流」、「ほどほど」、「適当」などの言葉と並列させて「まあまあ」を使っていることから、中間的な評価であることが容易に読みとれる。これらの用例からも、「まあまあ」は前後の評価語から推測させる形で話者の評価判断を示す用いられ方をしやすいということがいえる。

² (35)の「まあまあ」から「レベル」の程度を読み取ることは難しいが、「いじわる度」をはかっていることから、プラス評価で使用しているとは考えられないために「マイナス評価判断」として分類した。

3.7.「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群

本項では、「そこそこ」にのみ表れる被修飾語群（G群）の語を挙げる。

《プラスの語》ブレイク(2)、愛情、いい女、いい子、栄華、学歴保持者、活躍馬、教養、差益、幸せ、昇進、進学校、定期昇給、特別利益、人気、人気者、美形、美人（異なり語数 18 語）

《中間的な語》中産階級（異なり語数 1 語）

《マイナスの語》損（異なり語数 1 語）

《プラス判断語》腕(2)、給料(2)、性能(2)、戦い(2)、厚いとかんかつ、大きさ、重さ、会社、企業、技術、規模、キャッチコピー、距離、空気圧、クオリティ、軍事力、高校、財産、時間、視聴率、実績、実力、品揃え、自分、勝負、資料、席、線、選手、速度、大学、対話、町人、貯金、作り、投手、夏、ニーズ、肉、人数、年齢、ノートパソコン、伸び、パワー、引き出物、フィリピンパブ、面積、役、やつ、容量、安さ（異なり語数 51 語）

《中間的判断語》人(2)、アルテッツォ、女、学力、歌唱力、技術者、結果、生活、鮮度、容姿（異なり語数 10 語）

《マイナス判断語》値段(2)、医療、収入、強さ、点数（異なり語数 5 語）

《無評価》年齢(4)、値段(2)、味、遠慮、重さ、顔見知り、価格、客席、空間、経費、経験、口径、勾配、撮影者、宿題、需要、乗車率、上昇、譲渡所得、台風、ところ、努力、長湯、荷物、値動き、幅、人、比率、古株、分析、珍しさ（異なり語数 31 語）

G群に分類される語の一覧から、「そこそこ」は取り得る修飾語のタイプが幅広く、タイプごとに属する語の種類も豊富であることがわかる。まずは、「そこそこ」に1例ずつ見られた「中間的な語」を修飾する用例と「マイナスの語」を修飾する用例を見ていく。

(39)いわゆる「そこそこの中産階級」に対して「見せかけの強者」の錯覚を自他ともに与えることでどこかでほくそ笑んでいる（得している）「本当の強者」がいたりして。(OY14_39388)《中間的》

(40)最初はみなマイナスになります。そのまま全てを失う人もいれば、途中でやめる人、
わずかですが、損を挽回し儲けてるひといます。大半は、大損して撤退するか、そ
こそこの損で撤退するかです。(OC03_01868)《マイナスの語》

(39)(40)は、それぞれ「中産階級」、「損」を修飾しているため、「中間的な語」、「マイ
ナスの語」に分類される。しかし、(39)であれば、「中産階級」自体に何かしらの評価を加え
ているというより、「ある一定程度の階級である」という程度的な側面を表すために「そ
こ」が用いられているものと考えられる。(40)についても、「大損とまでは言わないが、
ある一定量の損」を「そこそこ」で示そうとしていることがわかる。「中産階級」や「損」
自体に評価性を加えているのではなく、「中産階級」や「損」の「程度量を限定」するのが
「そこそこ」の役割の中心だと捉えられる。これは、第3章で述べた「そこそこ」の特徴と
も重なる。

また、名詞修飾用例の中にも「無評価」に分類されるものが35例見られることから、
「そこそこ」の「程度量を限定する」側面の強さがうかがえる。以下に、名詞修飾用例にお
ける「無評価」タイプの用例を列挙する。

(41)大き目の看板塔を最初から鉄骨の軀体に直接溶接して取り付けることにした。こう
すればそこそこの台風にも耐えられるはずだし、募集広告が風に吹っ飛んだので
はとんだ茶番になる。(PB12_00100)

(42)しかし、指定業者がはっきりしている場合には、相見たがい、そこそこの遠慮とい
うものがある。(LBk9_00015)

(43)両親ともAOタイプのA型ということになりますから、父：AO 母：AO から
生まれるのはAA、AO、OA、OO と考えてO型はOOだけなので1/4の確
立が二人連続なので1/4 × 1/4で1/16・・・?ビックリするほど低い確立
ではないのでそこそこの珍しさ? (OC10_02043)

(41)～(43)を見ると、それぞれ「台風」、「遠慮」、「珍しさ」を修飾していることがわかる
が、文脈上これら3語の名詞に「良い」や「悪い」といったプラス・マイナスの判断をして
いるとは考えられない。どれも、「ある程度の強さの台風」、「ある程度の遠慮」、「ある程度
の珍しさ」を示そうとしているのである。

しかし、第2節で示した表1やF群の被修飾語群を見ると、「評価性のない語」を修飾する用例であっても、「プラス判断」、「中間的判断」、「マイナス判断」といった評価をうかがわせる用例も多く見られる。すると、「そこそこ」には、「評価を中心に表す用法」と「程度量を限定する用法」を併せ持ち、話者はそれぞれの用法を使い分けているということになるのだろうか。ここで、「プラス判断」、「中間的判断」、「マイナス判断」の用例をそれぞれ挙げて考察していく。

- (44)だから、アメリカが「弱い味方」である日本に望む「セカンドベスト」の選択は「国論がなかなか統一しないが、合意に至る民主的手続きは確保されており、そこそこの軍事力はあるが、職業軍人が政治権力に近づけないように構成された政体」である。(1)再掲) ≪プラス判断≫
- (45)おはなし会ですが、今月はおいでがなくて…残念。それでも、適齢期？の、そこそこの年齢の子たちが3人も来てくれて、たいへんにありがたいのです。(OY03_10234) ≪プラス判断≫
- (46)「いや出世なんかしなくてもいいですよ。そこそこの生活ができればいい」という人間がいたっておかしくない。(3)再掲) ≪中間的判断≫
- (47)補欠合格で入ることだけだったら、パパかママのお金とそこそこの学力があれば可能ですよ！補欠合格は学力より・・・ってことです。(OC10_03973) ≪中間的判断≫
- (48)お金に困っている人や、困ってはいなくてもそこそこの収入しかない人は、たいていの場合お金に動かされるままになっている。(5)再掲) ≪マイナス判断≫
- (49)この場合はデスクトップでタワー型のパソコンでないと拡張できませんし、拡張ボードもそこそこの値段がします。ノートや薄型のパソコンではできません。(OC01_08071) ≪マイナス判断≫

(44)～(49)はいずれも「そこそこ+評価性のない名詞」が出てくる用例であるが、前後の文章によって、(44)は「軍事力が評価できるほど高いこと」を、(45)は「自分が想定した通りの適した年齢」を、(46)は「裕福とは言えずとも悪くはない生活」を、(47)は「特別高くはない一般的な学力」を、(48)は「困窮するほどではないが不十分な収入」を、(49)は「購入するのがためられるほど高い値段」を「そこそこ+名詞」で示しているのがわかる。

しかし、それらのプラス・マイナス判断はどれも、前後の文脈から切り離すと正確に判断できなくなる。例えば、(48)であれば、「そこそこの収入しかない」という表現から、「そこそこの収入」が「マイナス」であると判断できるが、同じ「収入」を修飾する用例でも次のようにプラスの評価を表すこともできる。

(50) これらを、町の市場にもっていけば、そこそこの収入が得られるのですが、それでも、それらの仕事に集中して、焼き畑をやめてまで米を買う人はいません。

((26)再掲)

(51) そのうち、つかまるか、ヤフーが訴えられるんじゃないかぶう？といっても、そこそこの収入があった後取引件数が増えたらデータベースを無効にできるから、ヤフーの思うつぼだぶう。(OC14_00082)

したがって、「そこそこ+評価性のない名詞」だけでは、話者がどのような評価をくんでいるのか判断できない。そのため、話者の見方(肯定的なのか否定的なのか)を明確に示したい場合は、前後の文脈による補足的な説明が必要であり、「そこそこ」自体が明らかに積極的な(あるいは消極的な)評価を与えているとは考えにくい。この点は、3.6.で述べた「まあまあ+レベル」の関係と類似する。「まあまあ+レベル」も、用例によって話者の評価が異なる用例が存在することを述べた。「まあまあ」には、前後の文脈から話者の評価を推測させるような用例が見られると指摘したが、「そこそこ」もこれに通ずる部分があると考えられる。

ただし、そのように考えた場合、「まあまあ」や「そこそこ」が前後の文脈から様々な評価を取り得ることは説明できても、依然として「プラス(判断)」に分類される用例の出現率が高くなる理由は説明できない。この点については、【第II部】で詳細を述べたい。

4.名詞修飾用法に見られる各語の特徴

本章では、3語が名詞を修飾するとき、どのような評価の被修飾語をとるのか、取り得る被修飾語のタイプに偏りはなく、という観点を中心に考察を行った。その結果明らかになった各語の特徴を以下にまとめる

4.1.「まずまず」について

「まずまず」は3語の中で、名詞修飾用例の出現率が最も高い。さらに、評価性の分類では「プラスの語」と「プラス判断」の項目にほとんどの用例が当てはまり、特定の語で多くの用例を得る傾向がある。特に、F項目に挙げた通り「成果、成功、成績、出来、内容」など「事柄やものに対する全体的な状況説明・評価の表明」をする名詞との結びつきが強い。ここから、「まずまず」には他の2語に比べ「話者の積極的な評価」を汲みとりやすいといえる。

4.2.「まあまあ」について

「まあまあ」は3語の中で、最も名詞修飾用例が少なく、出現率も低い。名詞は静態述語や動的述語に比べて「評価性のない語」が多いことが一因だと考えられる。特徴的なのは「天気」に関わる名詞を修飾する用例が複数見られた点である。「天気」は「良い⇔悪い」の判断は容易であるものの、その間の評価となると、個人の感覚や、その場の状況（気温や風の強弱の望ましさなど）で大きな幅が出てくる。そのような話者の感覚的な評価を表す場合には「まあまあ」が用いられやすいと考えられる。「中間的判断」に分類された用例が比較的多く見られたのも、話者の「良いとも言い切れず、悪いとも言い切れず、大まかにその間くらい」といった微妙な判断、ぼんやりとした評価の表れであるといえる。

4.3.「そこそこ」について

「そこそこ」は、名詞修飾用例の出現率自体は高くないものの、修飾し得る名詞の評価性が多岐にわたり、語種も多い。取り得る名詞が豊富なのは、「そこそこ」がさまざまな「評価」を示すからではなく、「そこそこ」が「程度限定」の役割を中心に担う場合が多いからである。中間的な語や低評価語を修飾する場合でも、その名詞に「そこそこ」が評価を加味しているわけではなく、「一定量程度の」といった程度性を示しているのだということを確認した。「評価性のない語」を修飾する場合の「そこそこ」が、文脈によって「プラス判断」にも「中間的判断」にも「マイナス判断」にもなり得るのも、「そこそこ」の語自体に話者の評価判断の介入が小さいからだと説明できる。

ただし、第3章の動的述語修飾用例でも同じ傾向が見えたが、「そこそこ」においてもやはり「プラスの語」や「プラス判断」に分類される用例出現率が高い。ここから、「まずま

ず」や「まあまあ」に比べ弱いにしても、「そこそこ」にも評価的な側面は存在すると考えられる。その評価的な側面の具体的な内容については、【第Ⅱ部】で明らかにしていく。

第5章 述語となる用例

1.はじめに

本章では第1章で分類した用例のうち、述語用例を扱い、各語の評価的な側面の表れ方について、その傾向を確認する。次節に分類方法を挙げ、第3節～第5節で各分類の用例について詳細な分析を行う。

2.述語用例の下位分類

述語に現れる用例を「評価」の観点から分析するために、「①質問への応答として用いられるもの（応答表現）」、「②比較基準¹を伴い相対的に評価を表すもの（相対的評価表現）」、「③比較基準を伴わないもの（絶対的評価表現）」の3種類に大別した。

「①応答表現」に分類されるのは、質問に対する応答（返答）として対象語が使用されている用例である（用例(1)(2)）。ここに用いられる対象語は、質問に対する話者の見方（是非の判断など）が含まれると考えられるため、各語が持つ評価の特性または傾向を考察する上で重要になってくると考えられる。応答表現については第4節で詳しく扱う。

(1) マットは情報を取りこんでからうなずくと、訊いてきた。「よかったのか?」「まあまあかな」彼はにやっと笑った。(LBo9_00180)

(2) 「“はぐれ”? どういうことだ、天馬。何か知ってるのか?」「そこそこってとこやな…よっ、と！」(LBo9_00064)

「②相対的評価表現」に分類されるのは、対象語と比較可能な評価表現が共起する用例である（用例(3)(4)）。例えば、(3)は「長寿」「大夭（早死）」という評価表現の中間的な評価として「まずまず」が使用されていることがわかる。ここに分類される用例には対象語以外の評価表現が表れ、それと比較することで対象語が「より上位の評価をしているのか」「より下位の評価をしているのか」「中位の評価をしているのか」を読み取ることができる。これによって、対象語がどのレベルの評価を表しやすいのかについての考察が可能となる。相対的評価表現については第5節で詳しく扱う。

¹ 本章では、比較基準と捉えられる語句に囲いを施している。

- (3)甘谷の戸数は三十余家にすぎないが、百二、三十歳を「長寿」と呼び、百歳あまりというのがまずまずで、七、八十歳で死ぬと「大夭」(早死)だといわれた。(LBf9_00197)
- (4)あなたと子どもの関わり度は？次の項目が「うまくできていたら」2点、まあまあだったら1点、「うまくいかなかった」場合は0点です。(OP51_00003)

「③絶対的評価表現」に分類されるのは、応答表現でない用例のうち、比較基準となる評価表現の共起が見られない用例である(用例(5)(6))。3語とも、最も多く出現する用例であり、対象語の評価的な側面をより明確にするための観察が必要な群である。絶対的評価表現については第6節で詳述する。

- (5)電池の積載量や短期間であったと思われる点からいえば、性能はまずまずであろう。(LBf5_00013)
- (6)母ちゃん、お湯にさとうをいれて、レモンをうかべてくれた。あじはまあまあ、見かけは父ちゃんのおんなじ。(LBen_00018)

以上の3通りに用例を分類したところ、表1の結果を得た。

表1 述語用法／パターン別用例数・出現率

	応答表現	相対評価	絶対評価	合計
まずまず	2	12	114	128
	1.6%	9.4%	89.1%	100.0%
まあまあ	29	26	137	192
	15.1%	13.5%	71.4%	100.0%
そこそこ	7	14	61	82
	8.5%	17.1%	74.4%	100.0%

表1より、3語とも絶対的評価表現が最も出現率が高いことがわかる。「まずまず」においてはその傾向がより顕著である。「まあまあ」においても絶対評価表現の割合は7割と高いものの、他の2語に比べて「応答表現」の出現率が高い点が特徴的である。「そこそこ」も絶対的評価表現をとる用例が7割を超えるが、相対的評価表現も比較的多く見られる。次節からそれぞれの表現分類による用例を、より詳細に分析し、各語の評価的な特徴を探る。

3. 応答表現の詳細分析

応答表現の中には、「肯定の応答詞と共起する用例（用例(7)）」「話者の肯定的な評価が明確に読み取れる用例(用例(8))」、「話者の是非の評価が不明瞭な用例（用例(9)）」の3通りがみられた。応答表現の用例を、これら3通りに分類した結果を表2に示す。

- (7)「クリスマスは楽しかった？」チョウが聞いた。「うん、まあまあ」ハリーが答えた。(OB6X_00114)
- (8)咲子は、最後にこんな質問をする。「二人の成績ってどうだったの?」「まあまあでしたよ。二人ともだいたいおんなじくらい。けっこう上位だったし。苦手な教科も似通ってたなあ。(PB29_00370)
- (9)あんまり綺麗な人だからびっくりしちゃった。私が一度訊いたとき『まあまあかな』なんて浩さん言ってたくせにさ」(LBr9_00215)

表2 応答表現の下位分類

	肯定共起	明確肯定	曖昧応答	合計
まずまず	1 50.0%	0 0.0%	1 50.0%	2 100.0%
まあまあ	5 17.2%	4 13.8%	20 69.0%	29 100.0%
そこそこ	1 14.3%	0 0.0%	6 85.7%	7 100.0%

表2より、いずれの分類項目においても「まあまあ」の用例数が最も多い。質問に対する応答において、なぜ「まあまあ」が用いられやすいと考えられるのか、それぞれの分類における用例を取り上げ、以下で分析を行う。まずは肯定の応答詞と共起するタイプの用例をみる(用例(10)(11))。

- (10)「クリスマスは楽しかった？」チョウが聞いた。「うん、まあまあ」ハリーが答えた。((7)再掲)
- (11)連絡があったのは、祥子が昌也と結婚してからはじめてだ。「ええ、まあまあよ」答える私の声には、かつてのような卑屈さはない。(LBr9_00045)

「ええ」や「うん」は、それ単独で用いたとしても、質問者に肯定の意志を伝えるのに十分である。そのため、「まあまあ」は肯定の意志表示というよりも、肯定の度合い、または肯定の立場にある話者の態度を示すために用いられていると考えられる。例えば(10)であれば、「クリスマスは楽しかった？」という問いに対して、「うん」と返答することで、とりあえず「肯定」の意志を伝え、「まあまあ」を加えることで、「取り立てていうほどではないが」というような肯定の度合いを抑える意味を付加している。また、(11)の場合も、現在の生活の様子を問われた話者が、「ええ」で肯定的な返答をしつつも、それが完全な状態ではないといった肯定の度合いをやや下げる評価を「まあまあ」によって表している。

ここから、肯定の応答詞と共起する「まあまあ」は、質問に対して表明した肯定の度合いを話者が「やや抑える」場合に用いられるといえる²。

また、「まあまあ」には、「はい」や「ええ」などの肯定の応答詞を伴わずに、質問に対して明確な肯定を表現する用例が見られる（用例(12)(13)）。

(12)咲子は、最後にこんな質問をする。「二人の成績ってどうだったの？」「まあまあでしたよ。二人ともだいたいおんなじくらい。けっこう上位だったし。苦手な教科も似通ってたなあ。(8)再掲

(13)マツトは情報を取りこんでからうなずくと、訊いてきた。「よかったのか？」「まあまあかな」彼はにやっと笑った。(LBo9_00180)

(12)、(13)はそれぞれ物事の良し悪しに関する質問に対して「まあまあ」で回答している。肯定表現が共起するタイプの用例では、肯定を表す表現に程度性を付加する形で「まあまあ」が用いられていたが、肯定表現を伴わずとも「まあまあ」のみで回答が行われる例が見られることが、これらの用例からわかる。しかし、例えば(12)、(13)の波線部を、否定的な意味と捉えさせるような文脈（「大したことなかったし」「彼は不満げに眉をしかめた」など）に

² なお、このタイプの用例は「まずまず」「そこそこ」にも1例ずつ見られた。しかし、(a)(b)ともに応答詞のあとに、語を挟んだ上で「まずまず/そこそこ」が出ており、「まあまあ」の肯定表現共起の用例とはやや性質を異にする（肯定の度合いを抑えるというよりも、「調子」や「詳しさ」の程度レベルの限定として対象語が用いられている印象を受ける）。

(a) ティウリ、調子は？」「ああ、だいじょうぶ。少なくとも、まずまずだ。」(PB59_00547)

(b) 「菊江さん、インターネットにくわしいの？」「ええ。まあ、そこそこに。」(PB19_00337)

しても、それほど不自然にはならない。今回採取した用例の中には否定的な文脈の中での応答表現は見られなかったものの、「まあまあ」で応答される場合、その語自体に肯定の意味が含まれるとは限らない（むしろ、強くは肯定しない場合に「まあまあ」が用いられる）。このことは、以下に挙げる「曖昧応答」からも読み取れる（用例(14)(15)）。

(14)あんまり綺麗な人だからびっくりしちゃった。私が一度訊いたとき『まあまあかな』
なんて浩さん言ってたくせにさ」((9)再掲)

(15)「セールスの成績のほうは、どうだったんでしょうか？」『まあまあというところ
じゃなかったでしょうか。可もなく不可もなくと言うか…』(LBf9_00020)

(14)は、人の容姿を尋ねる質問に対して「まあまあ」という返答を受けた後、実際に目にした人物が『「まあまあ」という評価に似つかわしくなく綺麗な人だった」という感想を述べている。このようなやり取りは、話者と受け手の人物に対する評価が異なったために起こったものである。ここから、「まあまあ」は「肯定的な評価」として受け止められにくい場合もあるとわかる。(15)は、後の文章の「可もなく不可もなくと言うか…」からもわかるように、質問に対して肯定することも否定することも憚られ、「どちらとも言えない」という明確でない評価判断を示している。

この「曖昧応答」の用例は「そこそこ」においても、散発的に見られるが、6例中4例は同一の人物によるブログの文章であることが伺え（(16)参照）、出現数は「まあまあ」と比較し低い。また、「まずまず」において、ここに分類された用例は(17)のみである。

(16a)「ウェブカメラ持ってる？」 ん…??「運転の仕方知ってる？」そこそこ←「携帯何？」 あーうーの携帯ですが…?? (OY14_46102)

(16b)性格悪い??うん!!!←シャイ??そこそこ ^^よくしゃべる? そこそこ←
疲れた?? (OY14_46102)

(17)しょうばいはどうだと、甲斐が訊いた。まずまずというところです。幾らか好転したのか。もう少し待ってみないとわかりません。(LBr9_00176)

以上より、「①応答表現」は全体を通して「まあまあ」に現れやすく、肯定の応答詞と共起する場合は、「肯定の度合いをやや下げる機能」を持つことを確認した。肯定の応答詞と

共起しない場合、前後の文脈から明らかな肯定であると認められるものも数例あるが、多くは良いのか悪いのか明確でない曖昧な応答となる。肯定か否定かで問われれば肯定に偏るが、その肯定の度合いが高くなく、明確な肯定を抑える機能が「まあまあ」にあると考えられる。

4.相対的評価表現の詳細分析

本節では、各語が他の評価表現(相対的な基準)を伴う相対的評価表現の詳細分析を行う。相対的評価表現は、「数値を伴って比較される用例(用例(18))」と、「話者が設定する任意の基準と比較される用例(用例(19)~(21))」の2種類に大別された。さらに、後者の場合は、各語が基準となる語句と比較し「上位の評価を表す場合(用例(19))」、「中位の評価を表す場合(用例(20))」、「下位の評価を表す場合(用例(21))」の3種に分けた。これら4通りに用例を分類した結果が、次ページに示す表3である。

(18)河村と大津が二十一勝を挙げて好調でした。西村も十九勝と頑張りました。三十五歳の私も十七勝していますから、まずまずですよ。ところが、終盤は、この四人がそろってヨレヨレに疲れてしまっ
てね。《比較基準が数値》(PB57_00070)

(19)「まだまだけど、ずっとよくなかった中ではましかな」と話したものの、表情はさ
えなかった。1回目はまずまずだが2回目に失敗した。《基準比上位》
(PN5e_00020)

(20)窓口の対応について、どう感じられましたか。 親切 53% まあまあ 42%
感じ悪い 5% 《基準比中位》(OP47_00003)

(21)久しぶりにステーキを食べた しかも居酒屋という和洋折衷混ざりあう場所
で味はすこぶる 値段はそこそこ 肉もそこそこ 技で底上げをしているものを相
変わらずはいよと差し出してくれるとは思えない出来《基準比下位》
(OY03_05893)

表3 相対的評価用例の下位分類

	具体的な 数値基準	任意の基準			合計
		上位	中位	下位	
まずまず	5	5	2	0	12
	41.7%	41.7%	16.7%	0.0%	100.0%
まあまあ	2	7	11	6	26
	7.7%	26.9%	42.3%	23.1%	100.0%
そこそこ	0	7	1	6	14
	0.0%	50.0%	7.1%	42.9%	100.0%

表3より、各語が取りやすい相対的評価表現の種類には違いが見られることがわかる。「まあまあ」は用法が多岐にわたって一定数見られ、その中でも「任意の基準と比較し中位の評価表す」用例が多いのに対し、「まずまず」は、具体的な数値基準と比較する用例、あるいは基準に対して上位の評価を示す用例を多くとる。「そこそこ」は具体的な数値と比較したうえで評価をくだすタイプの用例が一例も見られず、任意の基準と比較する場合は、「下位」を表す用例出現率が高いという点が特徴的である。

以下、それぞれの用例の詳細を見る。まず、「具体的な数値による比較が可能」な用例について述べる。

- (22) 甘谷の戸数は三十余家にすぎないが、百二、三十歳を長寿と呼び、百歳あまりというのがまずまずで、七、八十歳で死ぬと「大夭」(早死)だといわれた。((3)再掲)
- (23) 河村と大津が二十一勝を挙げて好調でした。西村も十九勝と頑張りました。三十五歳の私も十七勝していますから、まずまずですよ。ところが、終盤は、この四人がそろってヨレヨレに疲れてしまっただね。((18)再掲)
- (24) 負けることが次の取引の条件になるいよいよ勝ち負けの判別はつけにくい。予定の六割か七割が実現してまあまあ、八割近くもできれば慶賀すべきではなかろうか。(PB44_00330)

ここに分類される用例は、話題とされている事柄の程度レベルが数値(用例波線部)によって既に規定されている。つまり、「まずまず」または「まあまあ」は事柄の程度を表す役割を担っているとは考えづらく、「既に程度が規定されている事態に対する話者の見方(評

価)」を示す機能を担っていると考えるのが自然である。(25)～(27)はいずれも「長寿」、「好調」「慶賀すべき」などという「望ましい評価」が示され、その1段階下の評価として「まずまず」または「まあまあ」が用いられている。ここから、「まずまず」「まあまあ」は、数値基準を伴って話者の見方(評価)を示す場合の多くが、「望ましい評価と比較して1段階下の評価」を表すと考えられる。

また、これらの用例の多くは、基準となる数値は示されているものの、その数値は厳密なものではない。例えば、(22)であれば、「100歳あまり」の記述からも分かるように、基準となる数値は具体的な一点を指しているわけではなく、幅をもつ。(23)も基準となる数値が「六割か七割」とあり、幅をもたせる形で設定されている。(24)は一見すると「十七勝」という具体的な数値が出ているように見えるが、十六勝であれば「まずまず」といえなくなるのか、十八勝であれば「まずまず」とは別の評価が期待できたのかなどは定かでない。「十七勝」自体は具体的な数値であるが、その数値は話者が設定したおよその目安に過ぎない。

以上より、具体的な数値を基準として伴う用例は、「厳密ではない目安となる基準値」が設定された上で、「望ましい評価の1段階下の評価」を示す場合の用例であると考えられる。ここに「そこそこ」が用いられていない点から、数値としての規定がなされている状態で話者の評価(望ましい評価の1段階下の評価)を示す場合は「そこそこ」では表しにくいと考えられる。

次に、任意の基準と比較するタイプの用例について詳細分析を行う。以下、(25)～(27)はいずれも「任意の基準より上位の評価になる」用例である。

(25) ほかの試験も受け、「TOEICはだめだったけど、こっちはまずまず」というように、やる気を維持しました。(LBs8_00005)

(26) 私は、かつて、大きめLサイズの薄めの生地のジーンズを購入したのですが、大きすぎて、ウエストはまあまあでしたが、ウエストから下の腰周りがブカブカで、箆笥のこやしになっています。(OC09_00558)

(27) 殴られるわ、残されるわ。練習嫌いなんすよ(笑)。試合じゃそこそこなんですけど、練習で頑張れとか言われるともうやる気なくなって。(PB47_00154)

(25)～(27)の用例では、いずれも「だめ」、「ブカブカ」「やる気なくなって」といった評価と比較して、話題となる事柄が相対的に上位の評価であることを示している。このタイプ

の用例は 3 語に共通して一定数見られる³。一方、複数の基準と比較し「中位の評価」を表す用例については、出現率に差が見られる。以下、用例を挙げながら考察する。

- (28) ★★★ ほしみつつです (★完食できず ★★んー、いまいち ★★★まあまあ ★★★★★うまい ★★★★★★極旨!) ひとくち目は、海系の香りと味と新鮮なインパクトさに「おっ!」と思ったのですが、食べていくうちに食べ飽きてしまうというか… (OY03_05246)
- (29) 窓口の対応について、どう感じられましたか。 親切 53% まあまあ 42% 感じ悪い 5% ((20)再掲)
- (30) これに見るかぎり、白とブルーがもっとも好ましく、グレイや茶色はまずまずだが、あとは避けたほうがよいということだろうか。(LBs9_00136)
- (31) 稼ぎへっぽこ帰宅は定時稼ぎそこそこ帰宅バラバラ稼ぎたっぷり帰宅するかもわからない※帰宅が遅いのは決して仕事では有りません。プライベートです。どの彼がいいですか? (OC09_14622)

(28)は星の数で 5 段階評価をしているうちの 3 番目の評価として「まあまあ」を使用している。この用例が Yahoo! ブログの中に 5 例見られた⁴。(29)は「親切」と「感じ悪い」の間の評価、(30)は「もっとも好ましく」と「避けたほうがよい」の間の評価、(31)は給料について「へっぽこ」と「たっぷり」の間と、3 段階評価のうちの間にあたる評価をくだしていることがわかる。しかし、「まずまず」と「そこそこ」においては、わずかな用例しか見られず、あまり頻繁には使われないようである。「良くも悪くもなく、ちょうどその間」

³ 対象語と比較が可能な基準を持つ用例(相対評価表現の用例)を抽出するにあたり、「同一の観点から話題となる事柄を評価している語が使用されているかどうか」を分類の基準とした。例えば、(28)は「試験の成績の評価」という観点から、(29)は「衣服の大きさの評価」という観点から、(30)は「(スポーツに対する)やる気の度合い」についての観点から、対象語と基準となる評価表現が比較されていることがわかる。以下に挙げる(c)の用例は、一見「悪い」という評価表現と比較される形で「まあまあ」が使用されているように見えるが、「まあまあ」が「技術」に関する評価を示しているのに対し、「悪い」は「紙質」に関する評価を示すものであるため、相対的評価表現とみなさない。

(c)当時の写真製版の技術はまあまあだが、なんと言っても紙質が悪い。(LBf9_00184)

⁴ 文体から、おそらく同一の書き手によるものと思われる。ただし、その 5 例を除いた場合を考えても「まあまあ」には「相対的に中位を表す」用例が 6 例認められることから、他の 2 語より使用されやすいことがわかる。

であることを示す、中位を表す用法は3語の内、「まあまあ」が中心に担っているといえる。

続いて、話者の任意の比較基準に対して下位の評価を表す用例を挙げる。

(32)あの方は大器晩成型などと言いますが、その場合はどちらかといえば、あまりほめたようには使わないことが多いようです。つまり、いまはまあまあだけれども、そのうちになんとか一人前になるだろう、といった調子です。(OY15_12241)

(33)妻が乳を飲ませた子をも、まるで自分の子のようにして、女の児はまあまあだが、男の児は、べったり付き添って世話を焼き、すこしでもその子のお言いつけに背く者をば、迫害したり、讒言したり、始末に負えないが、(LBo9_00066)

(34)日本酒はまあ、そこそこだったけど、食べ物が美味しいからOK♪(OY11_04585)

(35)「ああ、ごく普通です。死亡一時間前に軽い食事。胃の中に大量のウイスキー、血液中にもそこそこ。ぐっすり眠れるくらいの量」「酔いつぶれるほどじゃ？」(PB59_00290)

(32)～(35)は、それぞれ「一人前」や「べったり付き添って世話を焼き」「美味しい」「大量」と比べ、そのような評価より下位の段階であることを示すのに「まあまあ」あるいは「そこそこ」を用いている。ただし、(32)、(34)に見られる基準となる評価(「一人前」「美味しい」)が明らかに話者のプラスの評価なのに対し、(33)、(35)に見られる基準となる評価(「べったり付き添って世話を焼き」「大量」)は「プラスの評価」であるかどうか疑問が残る。単に「程度量が大きい」ことを示す表現であるとみなすほうが自然である。「まあまあ」「そこそこ」は基準と比較して下位の評価を表しうるが、それらの用例は必ずしも「望ましい評価に対して望ましくない評価」を表しているとは限らず、話者のプラス・マイナスの評価判断の介入度が弱い、「程度量が比較的小さい」場合にも用いられるものと捉えられる。これらの用例は「まずまず」には見られない。「まずまず」は比較基準をもちだし、それより下位の評価を表す場合には用いられにくいと考えられる⁵。

以上より、相対的評価表現の用例の中では、数値を基準としてもつ用例が「まずまず」に

⁵ ただし、具体的な数値基準を伴う用例(25)(26)の場合は「まずまず」に対して、さらに上を表す評価語が出ていることから、「まずまず」が「まあまあ」「そこそこ」と比較し、特別に高い評価を表すというわけではないと考えられる。ここで示されるのは、「まずまず」は、任意の比較基準を伴い、「あえてそれより低める評価」をするという場合が少ないという点である。

多く見られること、任意の基準と比較する場合の用例は、比較的上位の評価を「まずまず」が中心に担い、中位の評価は「まあまあ」が中心に担当することを確認した。また、基準と比較して下位の評価を表す用例は「まあまあ」と「そこそこ」のみに見られるが、それらの用例の中には、明らかにプラスの評価と比較してそれより下位の評価を示す用例と、(話者の評価判断が明確でなく) 程度量のレベルが比較的低いことを示す用例とが存することを示した。

5. 絶対的評価表現の詳細分析

本節では、対象語が比較基準を伴わない絶対的評価表現の詳細分析を行う。絶対的評価表現の用例では、前後の文脈などから「プラス」を示すと判断されるもの、「マイナス」を示すと判断されるもの、その中間に位置する「中間的な評価」を示すと判断されるものの3種類が見られた。例えば(36)は、後続文脈の「一応の面目は保つことができた」から「まずまず」という評判はプラスであると判断できる。(37)は、先行文脈に「普通に会社勤めをし」とあり、それに並列させる形で「家庭もそこそこ」とあることから、「そこそこ」は高くも低くもない中間的な評価であると読みとれる。(38)は先行文脈に「あまり練習できなかったので」というマイナス要素の理由を伴っていることから、「まあまあ」は低いレベル(マイナス)に留まるとみることができる。

(36) 俳句結社のごく限られた仲間以外、その名前を知らない俳人のことなど、興味を持つ人間はいない。ただし、編集部の評判がまずまずであったことで、一応の面目は保つことができた。(PB19_00467)《プラス》

(37) 普通に会社勤めをし、家庭もそこそこ、俺にはそんな生き方が性に合っている。(LBj3_00099)《中間的評価》

(38) 今日のレッスンは、大阪に行っててあまり練習できなかったのでまあまあ。まずスケール、クリア。移調も問題なし。メゾ・スタッカート部分はスラーがかかっているので音が短くなりすぎないように気をつけるべし、と。(OY04_01527)《マイナス》

ただし、絶対的評価表現は比較基準が見られないため、用例の情報だけでは明確な評価の判断が困難なものもみられた。これらは、評価が不明瞭なものとして「評価不明瞭」と分類

した。「評価不明瞭」の用例の中には、(39)のように話題となる事物（ここでは「燃費」）の程度が数値などによって示されるものと、(40)のように話題となる事物（ここでは「値段」）の程度が受け手に示されないものがある。

(39) とにもかくにも、ちょっと寒くなりましたが、まだまだ楽しめそうな感じであります！！ちなみに燃費は リッター 十六、四五三キロ！まずまず！？
(OY15_13402) <<評価不明瞭・数値あり>>

(40) 本格イタリア料理店に行って来ました。美味しかったです。値段はそこそこ。。。シーザーサラダしか撮っていませんが。。。 (OY14_32691) <<評価不明瞭・数値なし>>

以上の、下位分類を施した結果を、表4に示す。

表4 絶対的評価用例の下位分類

	明確な評価			不明瞭		合計
	プラス	中間的	マイナス	数値あり	数値なし	
まずまず	65 57.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 11.4%	36 31.6%	114 100.0%
まあまあ	59 43.1%	15 10.9%	2 1.5%	11 8.0%	50 36.5%	137 100.0%
そこそこ	27 44.3%	8 13.1%	4 6.6%	1 1.6%	21 34.4%	61 100.0%

表4より、どの語においても、最も出現率が高いのは「プラス」と判断できる用例であり、次いで「不明瞭」の数値を伴わない用例となっている。特徴的なのは、「まずまず」が「中間的評価」「マイナス」で全く見られないという点と、数値によって事物の程度を示す文脈で用いられる「そこそこ」の用例が非常に少ない点である。

以下、それぞれの分類項目についての詳細を述べる。

(41) 俳句結社のごく限られた仲間以外、その名前を知らない俳人のことなど、興味を持つ人間はいない。ただし、編集部の評判がまずまずであったことで、一応の面目は保つことができた。(36)再掲)

(42) 義姉さんは優しいし、須美ちゃんの料理だってまあまあです。(LBm9_00076)

(43) 冷やし天ぷらおろしうどん？とミニハンバーグ丼を食べる。まあ値段も安いし(忘れちゃったけど)味もそこそこ。でももうちょっと量があればいいんだけどな…。

(OY03_03263)

(41)～(43)は「プラス」と判断できる用例である。3語の出現率の差はそれほど大きくなり、3語に共通する用例とみられる。述部に現れる「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」は割合でみる限り、話者にとって「プラス」の場合に出やすいといえる。次にみる(44)～(46)は「中間的評価」と判断される用例である。

(44) 自然にそうなってきただけだ。面白いこともあれば面白くないこともある。まあまあだよ。でもそれなりに自分のスタイルはあるんだよ。(LBf9_00069)

(45) ポジティブ思考で養生を守り、それなりに、まあまあで暮らすことです。青春よ
元気と愛と 優美さと魅力にあふれている青春よ！！(PB34_00269)

(46) 普通に会社勤めをし、家庭もそこそこ、俺にはそんな生き方が性に合っている。

((37)再掲)

(44)は、「面白い」という良いときもあり、「面白くない」という悪いときもあり、総合すると「まあまあ」になる、という話者の評価が表れている。(45)は、「それなりに」という評価を抑える語と共起しながら、「取り立てて高くもなく低くもない」という評価をくだしている。(46)は、「普通に」と並列する形で「そこそこ」が用いられており、評価が高くも低くもなく「一般的に想定される程度」を指そうとしていることが読みとれる。相対的評価表現では、他の評価語と比べる形(例えば、「親切」、「感じ悪い」)の間の評価としての「まあまあ」などで対象語が用いられていたが、絶対的評価表現では、「それなりに」「普通に」など、他の中間的評価をくだす語によって意味を補うことで、中間的評価の意味合いを補強しているように見える。ここに分類される用例は、「プラス」の用例と比較すると少なくなるものの「まあまあ」「そこそこ」で一定数見られる。「マイナス」と判断できる用例については、さらに出現率が下がるが、こちらも「まずまず」に1例も見られないのに対し、「まあまあ」「そこそこ」では複数例見られる。

- (47) 今日のレッスンは、大阪に行ってあまり練習できなかったのでまあまあ。まずスケール、クリア。移調も問題なし。メゾ・スタッカート部分はスラーがかかっているので音が短くなりすぎないように気をつけるべし、と。(38)再掲)
- (48) この姿勢は一五世紀の半ばにはやや緩和されたが、女性ができるだけすぼめた肩と、できるだけ長く細い首に座った頭を前に突き出すものである。そのために、胸は引っ込み、乳房の出っ張りもまあまあということになる。(PB23_00781)
- (49) クエ進行したいキャラ達が、あんまり習得が進んでなかったり装備もそこそこだったりしたのもあって、ある意味ちょうどいい緊張感と強さでしたねぇ。
(OY15_15403)
- (50) 欠点があり、苦手なことがあり、できないこともあり、能力はそこそこで、心も弱い。親にはあまり愛されなかったし、人から褒められたこともない。(LB13_00098)

(47)～(50)は波線部の表現から「まあまあ」あるいは「そこそこ」がマイナスを表すものであると捉えられる。ただし、いずれの用例も「著しいマイナス評価」を表しているわけではない。例えば、(47)は後続文脈に「クリア」「問題なし」などの表現があることから、著しく質の低い練習であったとは考えにくい。(49)に関しては、ゲームのクエストを進めていく中での記述であるが、装備の質が劣悪であれば、緊張感を持つ前にゲームの進行が不可能になってしまう。「そこそこ」は「それほど強くはない」といった程度の「やや低めの評価」と考えられる。

ここで、相対評価表現の中の「下位」に分類される用例を再度挙げる。

- (51) よく世間では、あの人は大器晩成型などと言いますが、その場合はどちらかといえば、あまりほめたようには使わないことが多いようです。つまり、いまはまあまあだけれども、そのうちになんとか一人前になるだろう、といった調子です。(32)再掲)
- (52) 日本酒はまあ、そこそこだったけど、食べ物が美味しいからOK♪ ((34)再掲)

上記の相対的に下位の評価を表す用例にも、先に述べたことと同様のことがいえる。(51)は人として「一人前」であることと比較して、今は「その段階に到達していない」ことを示すのに「まあまあ」が用いられている。しかし、「一人前」からかけ離れた低い状態に留ま

っているとは考えにくい。(52)は、食べ物が「美味しい」のに対し、日本酒は「そこそこ」と評価を低めているが、もし、日本酒の味が明らかに「不味い」のであれば、最終的に「OK ♪」という感想は生まれまいだろう。日本酒も、食べ物と比べると低い程度になるもののある程度のレベルにあると認められる評価であると考えられる。

以上より、「マイナス」の用例は、「まあまあ」「そこそこ」に一定数認められるが、甚だしく悪い評価を与えようとしているわけではなく、「どちらかといえば低い」といった程度の評価を指すことを確認した。

次に、評価の判断が不明瞭となる用例の中で、数値を伴うものを挙げる。

(53) とにもかくにも、ちょっと寒くなりましたが、まだまだ楽しめそうな感じであります！！ちなみに燃費は リッター 十六、四五三キロ！ まずまず！？≪受け手判断・数値あり≫ (39再掲)

(54) 青島ビールは1本6元やったから、まあまあかな。(OY11_05552)

(55) ネジを増し締めしたし、グリスアップもしたし、ワックスもかけたし、残すはタイヤ交換のみ。でも、ソコソコだろうな～、価値にして5～6万円てどこ？店売りだったらどうだろうか……。 (OY15_05613)

ここに分類される用例は「まずまず」「まあまあ」で10例を超えているが、「そこそこ」は(55)に見られる1例のみである。相対的評価表現で見た「具体的な数値の基準を伴う用例」と同じく、話題となる事物の程度が数値によって既定されている場合は、「そこそこ」はあまり使用されない。「まずまず」「まあまあ」は既に数値によって程度が規定された物事に関しての話者の見方(評価)を示す場合にも用いられるのに対し、「そこそこ」は話者の評価的な判断のみを伝達することは稀であると考えられる。

続いて、評価の判断が不明瞭、かつ数値を伴わないものについて見る。ここに分類される用例は、3語ともに「明確なプラスの評価」の用例に次いで頻出する用例である。

(56) 淑子とピアノとバイオリン合わせる。まずまず。母の足も洗う。母の癌の傷跡に、ステロイド入りの軟膏を塗ったら少し良くなった。(PB15_00332)

(57) 母ちゃん、お湯にさとうをいれて、レモンをうかべてくれた。あじはまあまあ、見かけは父ちゃんのおんなじ。(LBen_00018)

(58) 本格イタリア料理店に行ってきました。美味しかったです。値段はそこそこ。。。
シーザーサラダしか撮っていませんが。。。あとは食べちゃったので。。。((40)再掲)

(56)～(58)の用例は、いずれも前後の文脈から対象語の評価の良し悪しを読み取ることは難しい。(56)は、対象語の意味を推測させる前後文脈が見られず、「まずは」のみを用いて話者の評価的な判断を示そうとしている。(57)は、母ちゃんが作ってくれた飲み物に対して、「見かけは父ちゃんとおんなじ」と言っていることから、味については「おんなじ」とは別の評価をしようと「まあまあ」を用いていると考えられるが、それがプラスなのかマイナスなのかは明確でない。(58)は料理の味が「美味しかった」ことを述べた後に、「値段は」と続けていることから、味の評価より値段の評価が低くなることが予想されるが、その値段を不満に思っているのか妥当だと判断したのかは不明である。このタイプの用例が見られる理由は2点考えられる。1点目は、そもそも話者の評価が具体的に定まっておらず、曖昧に表現されているからという理由である。第3節の応答表現による分析に記述したとおり、「まあまあ」には「肯定の度合いを抑える」評価的な機能がみられる。応答表現に限らず、良いとも悪いともいいきれない、不明瞭な評価的な判断が絶対的評価表現の用例にもみられると考えることができる。2点目は、文脈に依らずとも、語に対する話者の評価が一定である、言い換えれば、前後文脈で明確に評価を示さずとも、どのレベルの評価であるかが受け手に伝わるからという理由である。「まずは」の場合、「マイナス」あるいは「比較基準を伴って下位を示す」用例がみられず、絶対的評価表現においては「中間的評価」の用例も見られない。話者が示す評価は「ある一定水準以上の高いもの(ただし理想的な状態ではない)」に限定されると考えられる。そのため、前後の文脈に評価判断に至る説明的な要素を入れる必要がないのである。このように、不明瞭に分類される用例の出現理由は、「まずは」に関しては「原則、一定水準以上の評価を示す」機能によるものであり、「まあまあ」の場合は「肯定(プラス)の度合いをやや抑える」機能によるものであるとの見方が可能である。

6.まとめ

本節では、各語が述部に現れるときの用例を、「応答表現」、「相対的評価表現」、「絶対的評価表現」に大別し、それぞれの用法について共起条件や評価の肯定によって下位分類を施し、分析を行った。項目ごとの用例数と出現率を次ページの表5にまとめる。

表5 項目別の用例数・出現率

		応答表現			相対的評価表現			絶対的評価表現					合計	
		肯定共起	肯定応答	曖昧応答	数値基準	任意の基準			明確な評価			不明瞭		
						上位	中位	下位	プラス	中間的	マイナス	数値あり		数値なし
用例数	まずまず	1	0	1	5	5	2	0	65	0	0	13	36	128
	まあまあ	5	4	20	2	7	11	6	59	15	2	11	50	192
	そこそこ	1	0	6	0	7	1	6	27	8	4	1	21	82
出現率	まずまず	0.8%	0.0%	0.8%	3.9%	3.9%	1.6%	0.0%	50.8%	0.0%	0.0%	10.2%	28.1%	100%
	まあまあ	2.6%	2.1%	10.4%	1.0%	3.6%	5.7%	3.1%	30.7%	7.8%	1.0%	5.7%	26.0%	100%
	そこそこ	1.2%	0.0%	7.3%	0.0%	8.5%	1.2%	7.3%	32.9%	9.8%	4.9%	1.2%	25.6%	100%

「まずまず」は3語の中で、出現しやすい環境と出現しにくい環境が最も明確である。「下位」、「マイナス」の用例は見られず、「中位」「中間的評価」に分類される用例も1.6%とわずかである。一方で、「プラス」の用例は5割を超え、数値を伴う用例出現率も合計14.1%と他の2語より高い。「プラス」を表す傾向が特に強いことから、「まずまず」は「ある一定水準以上の高い評価」を示す機能を持ち、表し得る評価の範囲が3語の中で最も限定的であると考えられる。また、数値を伴う用例の出現率が高いことから、「まずまず」の「程度を限定する」役割は必須ではなく、話者の評価を示す機能が強いといえる。

「まあまあ」は、他の2語と同様「プラス」の用例の出現率が最も高いが、その他の用法も広く見られる。中でも「曖昧な応答」、「中位」、「中間的評価」を表す用例の多さが特徴的である。これらの用例が多くみられるのは、「まあまあ」に「肯定（プラス）の度合いを抑える」評価的機能があるからだと考えられる。応答表現の用例では、肯定の応答詞と共起したり、肯定的な返答として用いられたりし、絶対的評価表現の用例では「プラス」の出現率が高いことから、「まあまあ」も基本的には、話者の（どちらかと言えば）プラスの評価判断を表す際に用いられるものと考えられる。しかし、「まあまあ」にはそのプラスの評価を抑える機能がある。そして、「肯定（プラス）の度合い」が抑えられた結果、「曖昧な応答」や「中間的評価」、ときとして「マイナス」にもなり得るのだと考えられる。

「そこそこ」は、数値を伴う用例が1例のみと非常に少ない点の特徴である。数値が規定される用例とは、話題となる事柄の程度が明らかな例ともいえるので、数値を伴う事柄に対する言及として対象語が用いられた場合、その主な働きは「評価面」の表明であると考えられる。すると、数値を伴う場合に「そこそこ」が用いられにくいということは、「そこそこ」

が「まずまず」「まあまあ」と比較すると、話者の評価や態度を中心に伝達するのに不向きであることを示す。つまり、「そこそこ」は他の2語と比較し「評価面」を伝達する機能がやや弱いと考えられる。これは、「そこそこ」がそもそも述部に現れにくい⁶ことにも関連すると思われる。ただし、「そこそこ」においても絶対的評価表現の「プラス」に用例が見られやすいことなどから、評価的な意味が含まれないというわけではない。

7.【第Ⅰ部】のまとめと【第Ⅱ部】への展開

以上より、【第Ⅰ部】では、中程度を表す「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の3語を比較検討することで、各語がもつ意味傾向についての把握を試みた。各語を統語的特徴ごとに分類し、用例を観察した結果、3語の相違点として、「示しうる程度の範囲」と「話者の評価判断の介入度」があると分かった。以下、この2つの観点から【第Ⅰ部】で明らかとなった3語の特徴をまとめる。

7.1.示しうる程度の範囲

示しうる程度の範囲が最も狭いのは「まずまず」である。第2章から第4章までに述べた被修飾語の分布からわかるように、「まずまず」の用例には、被修飾語がマイナスの語またはマイナスに判断される語であると分類されるものが見られない。述語用例においても、ほとんどが「プラスの評価」「上位」を表す用例である。「まずまず」はほとんど一様に「(話者が想定する)標準よりやや上」の程度を指し、示しうる程度の範囲は限定的だといえる。

一方、「そこそこ」は、被修飾語にマイナスの語やマイナスに判断される語を比較的多くとる。述語用例においても、任意の基準と比較して下位を示すと判断される用例や、明らかにマイナスの評価を下している用例が複数例見られる(本章第5節参照)。全体としては他の2語と同様にプラスの(プラスと判断される)やや高めの程度に偏るが、「どの範囲をカバーするか」という観点で考えると、「そこそこ」は低い程度から高い程度まで幅広く表し得る。ただし、マイナスの語を修飾する場合もプラスの語を修飾する場合も、「極端な」程度を表す用例は存在せず、プラスにしてもマイナスにしても「中ほどの程度」を示すという点は変わらない。

⁶ 程度を表す用法のうち述部に対象語が表れる用例は「まずまず」「まあまあ」で半数近いのに対し、「そこそこ」では1割強に留まる。第1章3節に示した表1の結果を参照されたい。

「まあまあ」の示しうる程度の範囲は、「まずまず」と「そこそこ」の間の広さといえそうである。マイナスの語やマイナスと判断される語を修飾する用例はわずかであるが、「中評価」あるいは「中評価と判断される語」を修飾する用例は一定数見られ、述語用法においては「任意の基準」と比較して「中位」を示す（つまり5段階中の3に値するところを示す）用例が少なくない。ここから、「まあまあ」は「まずまず」が示しうる範囲をややマイナス評価側に拡大した範囲を示すことができると考えられる。また、「まあまあ」は述語をなす用例となりやすく、特に「曖昧な応答」の用例、「評価不明瞭」な用例が他の2語より多く出現することが確認できた（第1章・第5章参照）。ここから、「まあまあ」は程度の限定の度合いが、他の2語と比較し緩やかであると考えられる。「そこそこ」は取り得る程度の範囲としては「まあまあ」より広いが、「どのレベルに程度を限定しているのか」が判断できない用例は「まあまあ」と比較して少ない。「まあまあ」は明らかに低い程度を表す用例は稀である点から、「そこそこ」より示しうる程度の範囲が狭いと判断できるものの、程度が不明瞭な用例が多く出現するため、程度の限定度合いは緩やかである。

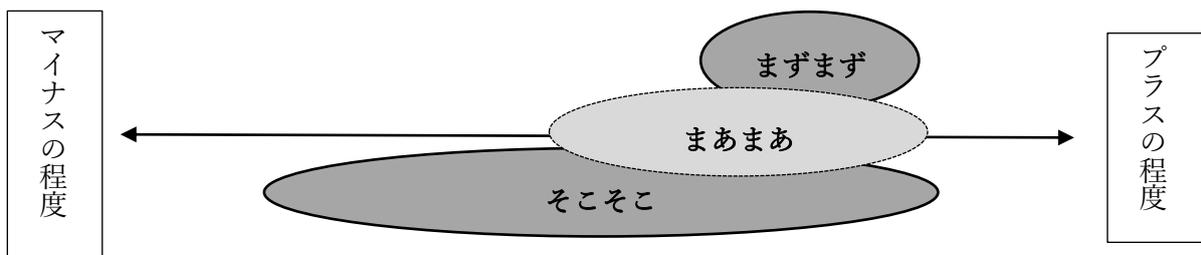


図1 3語が示しうる程度の範囲と程度の限定度合いのイメージ

7.2.話者の評価判断の介入度

「まずまず」は修飾語をとる用例において「無評価」に分類されたものが0例であった。また、「評価性のない語」を修飾する場合は、被修飾語に「プラスの評価」を付加するものが多く存在することを確認した（「プラス判断」に分類した用例がこれにあたる）。プラスにもマイナスにもなり得る語を修飾したときに、マイナスの評価を表すことがなく、プラスへの解釈を可能とする用例が非常に多いことから、「まずまず」は、話者による「積極的評価」を示す場合に用いられるものであることがわかる。つまり、「まずまず」は話者の「(完璧ではないものの) 良し」とする評価が強く表れているといえる。

一方、「そこそこ」は、被修飾語にプラスの語からマイナスの語まで幅広くとり、「無評価」に分類される用例も他の2語と比較して多い。ここから、「まずまず」とは違い、話者の「積極的評価」が内在しているとは考えにくい。スケールを想起しにくい動的述語を修飾する用例が多く、話者の評価的な観点を表しやすい述語の用例が少ないことから、「そこそこ」は「積極的に良しとする」といった評価的観点の介入度は弱いといえる。

「まあまあ」は、「マイナスの語」や「マイナスと判断される語」を修飾する用例はわずかであるが、「中間的」つまり「良いとも悪いとも言い切れない評価」を表す修飾語は比較的多くとる⁷。また、述語の用例では「曖昧に応答する」ものが多く見られる点が特徴的である。ここから、「まずまず」にあるような「積極的評価」と呼べるだけの肯定的な見方はしにくい。一方で、述語用例の出現率が高く、プラス・マイナスの観点を伴いにくい動的述語を修飾する用例の出現率が低いという特徴は「そこそこ」とは対称的である（「まずまず」とは類似の傾向である）。被修飾語を伴う場合と比較し、述語となる場合は事柄に対する単純な程度の限定ではなく、話者自身の評価的な見方が示される傾向が強い。「まあまあ」の用例に、述語用例が頻出するということは、何らかの話者の評価判断が介入しているということである。これは「曖昧に応答する」用例が多いという事実と矛盾するように思われるが、話者の「(良しとすべきかそうでないのか) 曖昧な判断の表明」が介入する評価の中身であると考えれば説明ができる。「まあまあ」は「積極的評価」といえるだけの明確な評価判断を内在しているとはいえないものの、いわば「良いとはいきれないが」といった微妙な評価判断、あるいは判断保留の意思を表しうると考えられる。

7.3.【第Ⅱ部】への展開

以上より、「示しうる程度の範囲」については、「まずまず」がもっとも限定的であること、「まずまず」をややマイナス評価側に拡大した範囲を「まあまあ」が示しうること、「そこそこ」はマイナスと判断される程度についても幅広く表すことを確認した。また、範囲の限定の度合いについて、「まあまあ」は「まずまず」「そこそこ」と比較し緩やかである（明確に限定しない）と考えられる。

「話者の評価判断の介入度」については、3語の中では「そこそこ」が最も小さいと考えられること、「まずまず」には「積極的な評価」が表され、「まあまあ」には良し悪しが明確

⁷ 名詞を修飾する用例においては、「中間的な判断語」を修飾する用例が7例見られる（第4章参照）。

でない「微妙な判断」の意思表示がされうることを確認した。

ただし、これらは 3 語を比較検討した傾向から捉えられる相対的な特徴であり、各語の独自性を具体的に記述するには至っていない。ここまでの考察を踏まえ、以下 2 点の課題について、より詳しく検討を加える必要がある。

1 点目は、「中程度を表す」という共通した意味を持ちながら、修飾する語種の傾向が異なり、表しうる程度の範囲に広狭差が生じる要因についてである。「まずまず」はマイナスの語を修飾する用例が皆無であるのに対し、「そこそこ」ではマイナスの語を修飾する用例が見られる。なぜこのような違いが生じるのか、各語のもつ意味的特徴を掘り下げて検討する必要がある。

2 点目は、各語を用いる際の話者の評価の具体的な内容についてである。現時点では、「まずまず」は「積極的な評価」、「まあまあ」は「微妙な判断」としているが、何をもって「積極的」と判断していると考えられるのか、「微妙な判断」とは何と何のせめぎ合いから生じるものかなど、詳細については明らかにできていない。また、「そこそこ」は他の 2 語と比較したときに話者の評価判断の介入度が弱いと述べたが、少ないながらも述語となる用例をもち、用例全体的を見るとやはりプラス方向の程度を表す用例が多いことから、事柄に対する話者の受け止め方の表明(=評価性)は存在すると考えられる。3 語の比較からでは見出しきれていない「そこそこ」のもつ〈評価性〉を明らかにしていく必要がある。

そこで、【第Ⅱ部】では、各語の独自性を具体的に記述するために、各章で 1 語ずつ取り上げ、単独形式や程度副詞用法以外の用法にも着目しながら、具体的な意味機能の記述を試みる。表しうる程度の範囲の異なりはいかにして生じるのか、話者の評価判断はどのような仕組みで示されるのかについて検討を進めつつ、3 語の〈評価性〉がそれぞれのようであるのか、具体的に記述していく。

【第Ⅱ部】各語の〈評価性〉

第6章 中程度を表す「まずまず」の〈評価性〉

1.はじめに

本章では、「まずまず」の〈評価性〉を明らかにするために、程度副詞以外の用法の用例も考察の対象としながら分析を進める。程度副詞用法以外の用法として、「まずまず」は、(1)(2)のように文全体に係り、後件の内容の確実性が高いことを示す用法をもつ。また、【第I部】で確認した通り、自らが述語となったり（用例(3)）、修飾語となったりすることで（用例(4)(5)）、話者が提起している事柄の程度を限定する用法（程度副詞用法）が見られる。

- (1)天引き生活はいよいよ楽につづけられることになってきた。これでまずまず私も一家も一ト安心というわけである。(LBt1_00042)
- (2)三角縁神獣鏡の出土する古墳は、まずまず、四世紀の古墳とみてよい。(LB12_00081)
- (3)今日はお天気もまずまずで、ツーリング日和です。(OY14_06133)
- (4)守備に関しては、誰もがまずまずのプレーを見せていた。(OB6X_00115)
- (5)まずまず便利な立地の小さなみすぼらしいホテルでも一泊四〇元した。(LBp9_00012)

このように複数の用法をもち、文の構成要素としても様々な役割を取り得る「まずまず」だが、その用法間の関わりや、文法的機能、意味特徴などを記述している研究はほとんど見られない¹。そこで、本章では現代語「まずまず」のそれぞれの用法を取り上げ、その機能について説明を試みる。

「まずまず」の機能を説明するにあたって、まず次節では「まずまず」の種々の用法の分布について概観する。次に第3節では、文全体に係る用法について、意味解釈の面から「まずまず」がもつ基盤的な意義について示唆を与える。第4節では程度副詞用法について、修飾語の種類による分類から詳細な考察を試みる。第5節では各用法間の連続性について、時

¹ 『現代副詞用法辞典』における「まずまず」の項目では、程度を表す用法について「不完全ながら評価できる様子を表す。ややプラスイメージの語」であり、「積極的な賞賛や評価をはばかりというニュアンスで、許容の暗示が強い」と説明されている。しかし、「後件の内容の確実性が高いことを示す用法」との関連は記述されておらず、文法的な機能の多様性についても言及がない。また、川端(2012)は、「程度評価用語・尺度感覚を表す語彙群」の一語として「まずまず」を数えているが、「自己基準や常識的基準自体を示すタイプ」であるとの見方を述べるのみで、語自体の特質については言及していない。

代ごとの用例数の推移から分析を加える。そして、第6節において現代語「まずまず」がもつ基盤的な意味が「妥当性」にあることを記述する。

2.現代語「まずまず」の種々の用法

本節では、現代語「まずまず」の使用実態を明らかにするため、現代日本語書き言葉均衡コーパスにおける「まずまず」の全用例について、用法ごとに分類した結果を示す。本章では、以下のように、統語的な観点から4分類を施す。また、複数の解釈を可能とする用例については、別に分類する。

- A：文全体に係る用法…用例(1)・(2)
- B：述語として機能する用法…用例(3)
- C：連体修飾格「の」を伴い、名詞を修飾する用法…用例(4)
- D：述部を修飾する用法…用例(5)
- E：複数の解釈が可能な用例

表1 「まずまず」の用法分類

	A	B	C	D	E	不明	合計
用例数	18	114	95	51	12	2	292
割合	6.2%	39.0%	32.5%	17.5%	4.1%	0.7%	100.0%

表1より、現代語「まずまず」の用例について、文全体に係る用法は全体の6%余りに過ぎず、大半が述語として機能したり、特定の語を修飾したりする用法で用いられていることがわかる。ただし、複数の解釈が可能な用例も12例ある。これらは各用法間に共通する「まずまず」の機能を探るヒントとなる可能性が高い。以下に、Eに分類した用例を示す。

- (6)会津は自分たちから手出しはすまいと誓ってくれたので、まずまず役目は果たしたが、薩摩の出兵拒否をひっこめさせることについては、もうどうなるものでもなかった。

(LBpn_00005)

(7)それに加えて、当時の満州国内の事情は比較的平穏と申しますか、まずは安定したものでした。(PB39_00738)

(8)尤もいずれも速成であるが、まずは文部省の規定の教授法等は一般へ習わせる事が出来たのである。(LBq9_00217)

(9)去年は個人消費が経済の足を引っ張りましたが、ことしはまずは政府の計画どおり個人所得も伸びるのではないか、(OM26_00002)

(6)～(9)はそれぞれ後件の文全体に係り、話者の認識判断として、述語の事柄・内容に対する確実性を示す役割をしている(A用法)と解釈することもできれば、「果たした」、「安定した」、「出来た」、「伸びる」といった述語自体を修飾して、その程度を限定する役割をしている(D用法)と解釈することもできる。特に動詞を伴う述部に係る場合は、上記で記した統語的な分類について複数の解釈が可能となるものが比較的多く出てくる。

それでは、なぜ上記で挙げた用例のような解釈があいまいになる用例が存在するのだろうか。次節以降で、A～D分類のそれぞれの用例について詳しく見ていく。

3.文全体にかかる用法

本節では、文全体に係る用法(以下、「A用法」と示す)の用例について検討していく。現代語のA用法における用例を意味の面から検討すると、次の2種類に大別できる。

《A-1》他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されるという話者の認識判断を示すもの

《A-2》後続節で述べる事柄が確実(非常に高い確率)であるという話者の認識判断を示すもの

以下に、それぞれの用例を挙げる。まず、《A-1》である。

(10)天引き生活はいよいよ楽につづけられることになってきた。これでまずは私も一家も一ト安心というわけである。((1)再掲)《A-1》

(11)「お屋敷さま、これはご懐妊のしるしでござりますぞ。まずは…おめでたい」すでに欲するいのちは胎内に芽生えていた。(LBb9_00100)《A-1》

(12)山ひとつ越えた北側の、阿仁の出身である。「まずまず、あがってください。くたびれたんすべ。あ、今足を洗う桶を持ってきますから」(PB39_00695)《A-1》

(10)、(11)は、先行文脈の事態を受けて、様々な言いたいことや思いはあるものの、その中で最も優先的に考えられることを「まずまず」を用いて示していると考えられる。(12)については、相手に対して様々なもてなしをする予定でいるが、その中でも優先的に考えられる事柄(「あがってください」)を挙げている。

次に《A-2》を見てみよう。

(13)三角縁神獣鏡の出土する古墳は、まずまず、四世紀の古墳とみてよい。(2)再掲
《A-2》

(14)それゆえ町の模様などはまずまず西洋むきと相見え申し候。ずいぶん見物いたし候ところもこれあり、(LBi2_00017)《A-2》

(15)お金を預かって高収益を確実にやりますというのは極めて困難でまずまずできない。こんなことができますというのは詐欺に等しいと私は言ったわけですが、(OM31_00002)《A-2》

(13)~(15)はいずれも「まずまず」に後接する「四半世紀の古墳とみてよい」、「西洋むきと相見え申し候」、「できない」という判断について、それが確実性の高いものであることを示している。

また、以下の(16)~(18)に見られるような、想定される数ある事柄の中で優先的にそれが考えられることを示すもの《A-1》とも、後件の内容について確実性が高いことを示す用法《A-2》とも取れる用例もある。

(16)そのほかの特徴をあげてみると一。 にんじんの面相は、まずまず、人にいい感じをもたせるようにできていない。(LBj9_00065)

(17)テスリンリバーは、支流でありますのでまずまず日本の川くらいのイメージで考えていただいてよろしいのですが、(PB29_00250)

(18)経済見通しで申しあげましたように、5%ないし6%の成長はまずまず実現できるであろう、こういうふうに見ておるわけであります。(OM11_00009)

このような、現代語のA用法における用例全 18 例のうち《A-1》・《A-2》の分類があいまいなものは、7 例に及ぶ²。その理由としては、《A-1》と《A-2》は両者とも、「まずまず」が基盤としてもつ意義を引き継いでいるからだと考える。《A-1》の「他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されることを示す」という解釈は、序列が想定される複数の事柄のうち、筆頭の項目として話すにふさわしいという話者の見方から成り立つ。これは、複数の事柄から序列の筆頭を選択する場合の「妥当性」を示すものである。一方の《A-2》の「後続節で述べる事柄が確実（非常に高い確率である）ことを示す」という解釈は、後続節で述べる事柄が話者にとって、最も適切であるという認識により成り立つ。換言すれば、話者による後続節の事柄に対する判断の「妥当性」が《A-2》の解釈を支えている。話者が聞き手に伝えようとする事柄が複数想定されるか唯一的かの違いで《A-1》、《A-2》の意味解釈は大別できるが、「まずまず」は共通して、話者の「（「まずまず」の後続節で示す内容が、相手に伝えるべき事柄として）妥当である」という「妥当性」を示す意味的な特質をもっているといえる。(16)～(18)のように、分類があいまいな用例が見られるのは、「話者が聞き手に伝えようとしている事柄が複数想定されるかどうか」が先行文脈から明確には判断できないからであるわけだが、「まずまず」を、後続節の内容に対する話者の「妥当だとする事柄」として捉えれば、解釈上、大きなズレは生じない。

4. 程度副詞用法

本節では、程度副詞用法の用例について検討していく。程度副詞用法の中には、述語として働く用法（以下、「B用法」）、連体修飾格「の」を伴って名詞を修飾する用法（以下、「C用法」）、述部に係る用法（以下、「D用法」）の3つに分けられるが、これらはいずれも文中の要素の程度を示す点で共通であるため、程度副詞用法として一括りにして述べていく。

4.1. B用法の特徴

現代語の「まずまず」の用例の中で、最も用例数が多いのが、「まずまず」自らが述語として機能するB用法である。以下に用例を挙げる。

² 《A-1》の確例は5例、《A-2》の確例は6例であった。

- (19)今日はお天気もまずまずで、ツーリング日和です。(3)再掲)
- (20)体調のほうはちょっと倦怠感はあるもののまずまずです。(OY14_53442)
- (21)電池の積載量や短期間であったと思われる点からいえば、性能はまずまずであろう。
この突然の発表は、トヨタの度肝を抜いたようである。(LBf5_00013)
- (22)ロチャを失ったことを別にすれば、状況はまずまずだった。弾薬さえあまり消費していない (LBg9_00006)

(19)は「天気」、(20)は「体調」、(21)は「性能」、(22)は「状況」について、それぞれその良し悪しを「まずまず」で表している。いずれも、前後の文脈からどちらかというとき肯定的に捉えられる程度を示しているといえる。しかし、(20)では「倦怠感はあるものの」というネガティブな評価が、(21)・(22)では「電池の積載量や短期間であったと思われる点からいえば」、「ロチャを失ったことを別にすれば」といった条件が示されている。ここから、「まずまず」は話者が示す事柄の程度が「非常に良い」場合は用いられず、何かしらの条件がある中で、「とりあえずは良い」といった判断がされる場合に、述語として用いられるものと考えられる³。これはA用法で確認した「妥当性」との関連が深いと考えられる(後の第5節を参照されたい)。

4.2.C用法の特徴

連体修飾格を伴って名詞を修飾するタイプのC用法は、現代語の「まずまず」の用例のうち、2番目に用例数が多い。以下に用例を挙げる。

- (23)守備に関しては、誰もがまずまずのプレーを見せていた。(4)再掲)
- (24)そういった方々に対する基礎年金、年金の額としてはまずまずの金額ではなかろうかというふうに思うわけでございます。(OM21_00002)
- (25)三人の老兵相手の交渉は、まずまずの成功だったと、我ながらにデュマは思う。(PM42_00051)

³ ネガティブな評価や条件が示されていない(19)における「まずまず」も、筆者の内省では「文句の付けどころのない最高評価」とは受け取りにくいと感じる。明らかなマイナス評価や条件がなくとも、述語として働く「まずまず」は「良いと判断できるが最高ではない」程度を表すものと考えられる。

(26)気温も低く少し寂しい雰囲気ですが、空には青空が広がり始め、まずまずの登山日和です。(OY11_04268)

(23)は「プレー」、(24)は「年金の金額」、(25)は「交渉の成功具合」、(26)は「登山日の天気」について、それぞれの良し悪しを「まずまず」で表している。B用法の「まずまず」が述語として働いていたのに対し、C用法の「まずまず」は修飾語として働いているという統語的な機能の差はあるものの、意味の面では両者はほぼ同じ働きをしている。それは、(24)で「そういった方々に対する基礎年金、年金の額としては」という条件が示されていたり、(26)で「気温も低く少し寂しい雰囲気ですが」というネガティブな評価が前件でなされていたりすることからも読みとれる。

意味の面でB用法との差を認めるとするならば、C用法においては(25)の「成功」、(26)の「登山日和」など、「まずまず」がなくとも「良い評価」を表す語への修飾が見られるという点である。「まずまず」が良い評価を表す意味をもつとするならば、元から評価が高いことを示す語を修飾する場合、意味が二重になり不自然に感じられてしまうはずである。しかし、(25)、(26)のように、評価が高いことが認められる語を修飾する用例も少なくない⁴。

4.3.D用法の特徴

述部を修飾するタイプのD用法も、B用法やC用法ほどではないが、現代語「まずまず」の用例として多く見られるものである。以下に用例を挙げる。

(27)価格の改定により、まずまず便利な立地の小さなみすぼらしいホテルでも一泊四〇元した。(5)再掲)

(28)音が静かで印刷結果もまずまずきれいである。(OY11_04268)

(29)一時的に預金離れ現象に手を焼くことがあっても、S & Lの経営はまずまず順調とあってよかった。(OB4X_00136)

(30)まあ、絶賛するほどでもないが、まずまず面白かった。(OY15_04316)

⁴ C用法に見られる、程度(評価)の高さをうかがわす被修飾語としては、「成功」「登山日和」の他に「上柄」、「活躍」、「成果」、「健闘」、「好評」、「チャンス」の全8例が確認された(第5章参照)。

(27)は「立地の便利さ」、(28)は「印刷結果」、(29)は「経営状況」、(30)は「映像作品」について、それぞれ被修飾語の程度を限定する形で「まずまず」が使用されている。話者が話題としている事柄について、その程度を示すために「まずまず」が使用されているという点では、B用法やC用法と役割が似通っているともいえるが、「まずまず」自体がもつ働きを見ると、B用法やC用法と異なって見える点もある。

(27)～(30)は、いずれも元から評価が高い語を修飾しており、「まずまず」はその被修飾語の評価をやや抑えているように感じられるのである。例えば、(28)であれば「印刷結果もきれいである」という表現と比較して考えると、「印刷結果もまずまずきれいである」は、その「きれいさ」が完全なものではないことを感じさせる。(30)では、「絶賛するほどでもないが」という前置きがあることからわかるように、「面白かった」とするのに対し、「まずまず面白かった」とすることで、その面白さのレベルをやや下げているように見える。D用法の用例は、いずれの場合も被修飾語の程度をやや抑える役割として「まずまず」が用いられているのだといえる。

すると、「まずまず」は、自らが述部となるB用法の場合は、自らが「プラス評価」を表す指標となり、述語を修飾するD用法の場合は、被修飾語のプラスの度合いを低める指標となるという、二面性を持つ語であるようにも見える。しかし、筆者はB用法・C用法・D用法いずれにおいても、「まずまず」は共通した意味機能をもつものとする。

4.4.程度を高(大)と評価する用法「まずまず」の持つ意味機能

本項では4.1.から4.3.を踏まえて、程度副詞用法における「まずまず」の意味機能を考察する。B用法・C用法の「まずまず」は、話者が話題としている事柄に対して、どちらかといえば肯定的な評価を示し、D用法の「まずまず」は被修飾語の評価をやや抑えるような働きをすることを確認した。同じ「まずまず」を用いる場合であっても、B用法・C用法とD用法で、意味的な機能に違いがあるように見える（「まずまず」がプラスの評価の明示に使われる場合と、程度を低める修飾語として使われる場合がある）のはなぜだろうか。筆者はその理由を、第3節で取り上げた「妥当性」が「まずまず」の意味的な基盤をなすためだと考える。

「まずまず」が文全体に係るA用法について述べた第3節では、話者の「（「まずまず」の後続節で示す内容が、相手に伝えるべき事柄として）妥当である」という判断を示す標識として「まずまず」があると述べた。その標識がB～D用法においても当てはめられると考え

る。B～D用法の場合は、A用法の「話者が妥当だとする判断」が「話者が妥当だと考えるレベル」になると考えるとわかりやすい。4.1.から 4.3.で取り上げた用例を再度見てみよう。

- (31)体調のほうはちょっと倦怠感はあるもののまずまずです。((20)再掲)《B用法》
- (32)ロチャを失ったことを別にすれば、状況はまずまずだった。弾薬さえあまり消費していない。((22)再掲)《B用法》
- (33)そういった方々に対する基礎年金、年金の額としてはまずまずの金額ではなかろうかというふうに思うわけでございます。((24)再掲)《C用法》
- (34)三人の老兵相手の交渉は、まずまずの成功だったと、我ながらにデュマは思う。((25)再掲)《C用法》
- (35)一時的に預金離れ現象に手を焼くことがあっても、S & Lの経営はまずまず順調と行ってよかった。((29)再掲)《D用法》
- (36)まあ、絶賛するほどでもないが、まずまず面白かった。((30)再掲)《D用法》

B用法の(31)の場合は、完全な健康体でないにせよ、「話者が納得できるレベルの体調」であることを「まずまず」で示している。同じく(32)は、「ロチャを失った」という憂慮すべき事柄があるにせよ、「全体としては想定していた納得のできる程度」であることを「まずまず」で表している。この「納得感」は、「話者が妥当だと考えるレベル」に通じるだろう。

C用法の(33)についても、「全員が手放して喜べるほどではないが、納得できる程度にはある」という意味合いで「まずまずの金額」が提示されており、(34)の場合も、自らの交渉について、完璧な成功とまでは言えずとも、話者の中で「想定した程度の成果が得られた」ことを「まずまずの成功」としているのだとわかる。

一見、被修飾語の評価を低める働きをしているように見えるD用法においても、(35)は、話者の「そのような評価を下しても妥当と思えるほどに順調である」という判断を示す指標として見ることができる。また(36)は、期待を大きく上回る絶賛ではないものの、「話者が期待する一定の水準に該当するレベルには達している」として捉えられる。よって、D用法においても、B用法・C用法に同じく「話者にとって妥当であるかどうか」が「まずまず」で示されていると考えることができる。係り先がプラスの評価を伴う場合、「まずまず」はその度合いを低める働きをしているのではなく、「話者が期待する一定の範囲において最も

妥当である」ことを示していると捉えられるのである。

以上より、程度副詞用法の「まずまず」は、統語的な役割や係り先の被修飾語の種類に関わらず、「話者が（一定の条件下で最も）妥当だと考える程度」を示す機能があると考えられる。

5.用法間の関わり

前節までに、各用法における用例を共時態で確認することで、「まずまず」のもつ意義を探ってきた。しかし、近世以前にB～D用法が見られないこと、現代語においても用例の出現率に偏りがあること（第2節参照）など、「まずまず」について記述する上で説明すべき課題は多く残っている。そこで、本節では、近代以前の用例を取り上げ、時代ごとの用例数の推移を見ることによって、「まずまず」の現代語における用法間の関係を考察する。

5.1.用例数の推移

本項では、「まずまず」の用例を時代ごとに、A～D用法に分類した結果を示す（A用法については、《A-1》、《A-2》、その他の3項目の分類も施す）。近世以前の用例は「Japan Knowledge Lib」を用い『新編古典文学全集』を対象としたものを、近代の用例は「日本語歴史コーパス（CHJ）」を用い検索対象を「明治・大正」としたものと、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」から検索したものを、現代語の用例は「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」から得られたものをそれぞれ採集した。結果は以下の表2の通りである。

表2 用例数の推移（網掛けは用例が1例も見られないもの）

	〈A-1〉	〈A-2〉	A あいまい	B用法	C用法	D用法	E	不明	合計
古典文学 全集	29	0	0	0	0	0	1	0	30
	96.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	100.0%
近代語 コーパス	19	13	3	0	1	0	6	1	43
	44.2%	30.2%	7.0%	0.0%	2.3%	0.0%	14.0%	2.3%	100.0%
新潮の 百冊	10	10	2	4	5	3	0	1	34
	29.4%	29.4%	5.9%	11.8%	14.7%	8.8%	0.0%	2.9%	100.0%
現代 日本語	5	6	7	114	95	51	12	2	292
	1.7%	2.1%	2.4%	39.0%	32.5%	17.5%	4.1%	0.7%	100.0%

表2より、近世以前の用例はほとんどが《A-1》の用法であり、程度を高（大）と評価する用法はほぼ見られないことがわかる。しかし、近代コーパスの結果を見ると、A用法の中でも「後続節で述べる事柄が確実（非常に高い確率である）ことを示す」意味解釈が可能な《A-2》の用法が増え、連体修飾格「の」を介して名詞を修飾するC用法も出現する。B用法とD用法の確例はまだ見られないが、解釈によっては程度副詞用法ともとれるE（分類があいまいなもの）に数えられる用例も増えてくる。昭和期の作品も収めた「新潮の100冊」になると、全ての用法が見られるようになる。しかし、用例数の出現率としては依然としてA用法が高く、程度副詞用法が広く使われるようになったのは現代になってからであることが読みとれる。次節から、時代ごとに用例を詳しく見ていく。

5.2.近世以前の用例

近世以前の様相を概観するために、新編日本古典文学全集（小学館）のデータを「Japan Knowledge Lib」で検索したところ、「まづまづ」の用例は全30例であり、そのほとんどがA用法の《A-1》に分類される用例であった。しかし、そのうち21例が『謡曲集』からの用例であり、資料による偏りが大きい。また、下記で見るように、『謡曲集』以外の資料であっても、「まづまづ」が使われているのは会話文中であることから、書き言葉としては使用頻度が低かったことがうかがえる。

- (37)呼びおろして臥したるに、「まづまづ」と呼ばるれば、冬の夜など引きさがし引きさがしのぼりぬるがいとわびしきなり。（『枕草子』）《A-1》
- (38)中納言の、涼「御伝へはしも、げに必ずさるべきことならむ。これはわざとならずともあへなむ。まづまづ、顔いと醜し。心劣りしたまひなむ」（『宇津保物語』）《A-1》
- (39)これなる御内が熊野の御入り候ふ所にてありげに候。まづまづ案内を申さばやと思ひ候。（『謡曲集』）《A-1》
- (40)五郎「それがしが事は御機嫌いかが計りがたく候ふ間、まづまづ参り候ふまじ。シテ「ただそれがしに御任せあつて急いで御参り候へ。（『謡曲集』）《A-1》
- (41)わが国は天地開闢よりこの方、まづ以て神国たり。されば仏法今に盛んなり。まづまづ間近き比叡山、あれこそ日本の天台山候ふよ。（『謡曲集』）

(37)は相手に対してすぐに行動を起こすように促すような呼びかけとして用いられており、(38)では相手に伝えるべき様々な事柄のうちの筆頭として述べる内容に対して「まづまづ」が付されている。(39)、(40)は後件の内容について、数ある事柄の中で優先的に後続の事態（「案内を申す」や「参り候ふまじ」）を行うことを示していると考えられる。

ここから、近世以前においては、「まづまづ」は主に話し言葉として、「想定される数ある事柄のうち、最も優先されるべき事柄を挙げる場合」に用いられたといえるだろう。ただし、(41)においては、係り先が「間近き」ともとれるため、「D：述部にかかる用法」としての解釈も可能ではある。A用法とその他の用法の中間的な用例として考えられる用例である。

5.3.明治・大正期の用例

「日本語歴史コーパス (CHJ)」より、明治・大正期に時代を絞り「マズマズ」で用例を検索すると、全 43 例の結果を得た⁵。近世以前の用例に比べると、様々な用法が見られる。

- (42)友達が其處で癒つたと云ふので、大變信用して居るので、病は氣のもの、先づ先づ當人の意志に任せることにした。(60M 太陽 1917_01036)《A-1》
- (43)手に餘る程の勢力をば、堂々と振り廻し來る日に於ては、之れを穩かに抱き込む事は、先づ先づ難義の事と謂はざる可からず、(60M 国民 1888_20001)《A-2》
- (44)それから、夜具蒲團類は晴天の日は必ず、日光にさらすのです、如斯すれば咲づ咲づ咲づ充分であります (60M 太陽 1901_04032)《A-2》
- (45)迎心とは彼の事は如何なるべき此の事は如何にすべきと先々の事を徒らに苦にする事也 (60M 太陽 1901_14023)《C用法》
- (46)重傷ながらも案外経過が良く、二週間も立つと、ズツト快く成つて、先づ先づ一同安神をしたが、何にしる司令官が重傷と來ては一時は大騒動であつた。(60M 太陽 1901_08027)《E用法》
- (47)でもまあ父様の御機嫌が殊の外だからこれでまづまづ天下泰平、それに母様がみらしつて以來、精神上的の苦勞は別として私の日課が半分以上減つたの (60M 女世 1909_08028)《E用法》

⁵ 検索結果は全 52 例であったが、「先々代」や「先々月」など「マズマズ」の用例として不適なものは除いた。

(42)は、考えられる方法が複数ある中で、「意志に任せる」ことが妥当だとすることを、(43)(44)はそれぞれ「難儀の事と謂はざる可からず」、「充分であります」が話者の妥当性が高い判断として読みとることができる。第3節で見た現代語における《A-1》、《A-2》の用例と同じように解釈が可能である。

用例数は少ないながらも(45)にあるC用法も見られた。後文脈に「徒らに苦にする事也」とあるため、4.3.で見たような明確なプラスの評価は読みとりづらいが、「話者が妥当だと思うレベルの（難しさを伴う）事」と読みとれば、現代語に見られる「まずまず」のC用法と同じように考えることが可能である。

また、(46)、(47)のようなA用法ともD用法ともとれる用例も複数見られる。(46)は「一同安神(本文ママ「安心」か)をした」という話者の妥当だと考える判断を示しているとも、「安神(安心)」のレベルが「話者の納得できる程度である」というプラスに考えられる程度を示しているとも読みとれる。(47)も同様に、「天下泰平(である)」ということが、話者の妥当とする判断(A用法)にもとれば、「天下泰平」の程度が「話者が納得できるほど高い」という解釈もできる。A用法とD用法は文中における「まずまず」の出現位置が重なるため、複数の意味解釈ができる用例が出てくるのだろう。

5.4.「新潮の100冊」による用例

「新潮の100冊」を対象に、近現代の文学作品を検索した結果、「まずまず」で32例、「まづまづ」で2例の用例を得た。「新潮の100冊」においてもA用法の用例が依然として多いが、前節で見たC用法に加え、B用法とD用法の確例も複数出てくる。

(48)勘九郎、その流説、根も葉もない。いずれゆるりと言いきかせるによって、まずまずこの場は堪忍せい。(『国盗り物語』)《A-1》

(49)つねにたがいに臨戦状態にある舅と婿とが、一ツやねの下で対面するなどは、まずまず考えられぬことだった。(『国盗り物語』)《A-2》

(50)潜水眼鏡式の紫外線よけの眼鏡は、まずまずだった。ときおりすき間から粉雪が入りこむ以外には、大した支障はなかった。(『孤高の人』)《B用法》

(51)観客席にはまだ空席もあったが、それでも八分くらいは埋まっていた。タイトルマッチでもない興行としてはまずまずの入りの方だった。(『一瞬の夏』)《C用法》

(52)あの相撲を嫌って逃げまわっていた大飯食らいの怪童は、その麓で育った蔵王山の名を名乗って以来まずまず順調に番づけ面をあがっていたのである。(『楡家の人びと』)《D用法》

程度副詞用法としてまとめられる(50)～(52)を見ると、いずれも「紫外線除けの眼鏡」や「客の入り」、「相撲の番づけ(の上がり方)」について、「まずまず」によって「話者が妥当だと思える高いレベル」であることが示されている。用例数の出現率に差はあるものの、B・C・D用法がいずれも近代期に出現していることが確認できる。

5.5.「まずまず」の用法獲得過程

5.1.から5.4.より、近世以前の「まずまず」は「他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されることを示すもの《A-1》」としてのみ用いられていたが、近代(明治・大正期)に入ると「後続節で述べる事柄が確実(非常に高い確率である)ことを示すもの《A-2》」としての意味も担えるようになり、さらに文中の名詞(C用法)や述語(D用法)に係っていると解釈が可能な用例が見られるなど統語的な機能も拡大したことが読みとれる。この変化の内実は、大きく《A-1》から《A-2》への意味的な解釈の拡大と、「程度を高(大)と評価する用法(B～D用法)」の獲得という2点に整理できる。本節ではこの2点に注目し、考察を加える。

A用法における「まずまず」は、副詞「まず」を強調した表現であると考えられる。副詞「まず」には、「物事の初め」という「序列性」の標識として使われることから⁶、A用法として用いられる「まずまず」にも、この「序列性」が存在していると思われる。例えば、5.2.で挙げた(37)の呼びかけの「まづまづ」などは、相手に行動を促す表現であるが、これは「まず初めに行動せよ」といった物事の優先順位の最上位を示す表現だといえる。(38)においても、言いたいことが複数あるうちの「最初の項目」として「まづまづ」を使いながら発話していると考えられる。このように「序列性」としての機能を持つ「まずまず」が、様々な文脈で用いられるうちに、明確な順位付けが希薄になり、「他の事柄よりも優先して」といった意味合いに加えて「様々な考えられる事柄のうち、最も妥当であると判断できる事柄を選択

⁶ 『日本国語大辞典』の「まず」の項目に「(1)他のもの、他の事態より先んずるさまを表す語。最初に。まっさきに。いちはやく。」とある。

して示す」といった《A-2》に見られる「話者の判断を示す意味機能」ももつようになったのではないかと考えられる。つまり、A用法における「まずまず」は初め、「序列性」を基盤として使用されていたが、多様な文脈で用いられるにつれ、そこに内包される「妥当性」が基盤となって、後続節の内容の確実さを示す表現《A-2》用法が可能になったといえる。

程度副詞用法は、本稿の概観の限り、明治・大正期において、まずC用法が表れる。しかし、調査対象を拡大したより精緻な調査の余地も大きく、また、5.3.で見たように、述語にかかる用法（D用法）とも解釈が可能な、分類があいまいな用例が複数見られることから、C用法とD用法の出現時期の前後関係は確定的ではない。A用法とD用法は「まずまず」がいずれも文頭もしくは述語の前に現れる。文中位置が重なるため、統語的な連続性が強いといえる。A用法（話者の判断の妥当性）として使われていた「まずまず」が、「(後続節で述べる事柄について) 話者が妥当と判断するレベル」としても容認可能となり、D用法につながったのではないかという推測も可能である。一方、「まずまず」が、文中の名詞の前に現れた場合、その「妥当性」が、後続する名詞のレベルのプラスの評価と解釈されれば、C用法の派生にもつながりうる。程度副詞用法の中でも、B用法は昭和以降にしか現れないが、これはA・C・D用法の「まずまず」が修飾語として何らかの要素に係っていくのに対し、B用法においてのみ、「まずまず」が自ら述語としての意味を持つという統語的な差から説明が可能であるし、用法の獲得が最も遅かったことも肯きやすい。

副詞「まず」との関連性も含め、歴史的な観点からの説明には、分析・考察の余地が残されるが、「まずまず」の用法獲得過程について、下記の流れがあったと仮定できる。

- ① 「序列性」を基盤とした《A-1》用法として使用される（近代以前）。
- ② ①に内包される「妥当性」が基盤となって《A-2》用法を獲得する。
- ③ 事柄の程度について修飾するC、D用法が見られるようになる。
- ④ C、D用法が使用される中で、「まずまず」の語自体に程度性および評価性が生まれ、自らが述語となるB用法を獲得する。

6.まとめ —現代語の「まずまず」が基盤としてもつ意味—

第2節では、現代語「まずまず」の用例を用法ごとに分類し、その分布を概観した。そして、第3節・第4節では、一つ一つの用法を取り上げ、意味的な特徴や被修飾語との関連も加味しながら「まずまず」が独自にもつ特質を探求していき、第5節で補足的に用法間の関

わりと時代による使用例の変遷について触れた。

その結果、A用法においては、「まず」の原義である「序列性」から、これに内包される「様々考えられる事柄のうち、最も妥当であると判断できる事柄を選択して示す」といった「妥当性」に基盤が移り、後件の出来事を優先して取り上げたり、後件の内容の确实性の高さを示したりする表現が可能になったという見方を示した。さらに、「話者の判断の妥当性」から「話者の判断による物事の程度の妥当性」が示せるようになり、B～Dの用法が表れ始めたことについて示唆した。いずれの用法も、「妥当性」が「まずまず」の機能に大きく関わりをもっており、程度副詞用法においても、単純に程度の高低を限定しているのではなく、「話者が妥当とするレベルや期待値に即していること」を表していることを示した。そのため、話者の期待を大きく上回るような事態や、逆に話者が想定した水準に達しない事態に対しては「まずまず」は用いられにくいように思われる。

(53)??子どものころから夢見た大きな目標をまずまず叶えた。(作例)

(54)??新商品を売り出したが、まずまずの儲けにしかならなかった。(作例)

また、第5節でA用法の意味的な用法の拡大を説明する際に「序列性」から「妥当性」へと解釈が広がる流れについて述べたが、程度副詞用法に対しても同じことがいえると考えられる。以下の用例を参考にされたい。

(55)時間の都合上、この日はここで退散。まずまずの滑り出しか・・・？(OY15_06526)

(56)苦悩のシーズンが続いたが、さすがはオリンピックイヤー、今季はまずまずの滑り出し。(PM21_00102)

(57)演出などが自ずと目に入るわけですけど、今回はまずまずの出だしといってもいいんじゃないでしょうか。(OY15_10536)

(58)全国的に激しい渋滞はみられず、各社とも「まずまずの出足」と評価した。(毎日新聞)(OY14_50460)

(55)～(58)を見ると、主にC用法において物事の「初め」を表す語を修飾する用例が複数見られることがわかる。一方で、例えば「まずまずの折り返し」や「まずまずのラストスパート」など、物事の中盤から終盤を想起させる語と共起する用例は見られない。このことか

ら、程度副詞用法についても、「まずまず」の単独形式「まず」がもつ「物事の初め」という「序列性」が生きていると考えられる⁷。物事がある程度進み、熟考を重ねた結果の評価ではなく、話者が「とりあえずこの程度であろう」と想定した範囲にあるかどうかを「その他諸々考えられることは別として、現段階で最も妥当な判断」として示すのが「まずまず」が基盤としてもつ意味として考えられる。

⁷ この「序列性」から「妥当性」への連続性をより詳しく説明していくために、単独形式「まず」との関連を含めた考察を今後の課題としたい。

第7章 中程度を表す「まあまあ」の〈評価性〉

1.はじめに

序章で述べた通り、特に程度極大を示す程度副詞には、他品詞から派生する形で程度副詞的な用法を獲得したものが多い。程度副詞として用いられる場合も元の語彙の評価的な意味が反映されやすい。本章で扱う「まあまあ」も、程度副詞以外の用法をもち、それらは、程度副詞としての用法に先行する形で使用されている（詳しくは第4節で述べる）。ここから、程度副詞としての用法は、他の用法と強く関連をもつと考えられる。

本章では、「まあまあ」の程度副詞用法としての用例および程度副詞用法と関連の深い用法における用例を取り上げ分析し、程度副詞として用いられる「まあまあ」における「評価性」を明らかにする。また、補足的に単独形式「まあ」に触れる。

2.先行研究・辞書記述

「まあまあ」の「評価性」について具体的な分析に入る前に、先行研究における「まあまあ」の意味記述を確認する。

程度を表す「まあまあ」を取り上げ、論じた研究に苗田(2003)がある。苗田(2003)は、辞書に記載されている「まあまあ」の用例を取り上げ、統語的特徴ごとに分類を施し、程度性の記述を試みている。そして、「話し手によって差はあるが、満足・許容できる程度を表しているといえる (p.84)」と結論づけている。この論に従えば、程度を表す「まあまあ」の「評価性」は「満足・許容」と捉えられる。しかし、「まあまあ」の使用がない(1)と「まあまあ」を使用した場合の(2)の用例を比較すると、(2)は被修飾語である「元気」のレベルをやや低めているように捉えられる。

(1) 久しぶりに会った祖父は元気そうだった。(作例)

(2) 久しぶりに会った祖父はまあまあ元気そうだった。(作例)

「まあまあ」を用いることで、修飾先の語のスケールを低めているように見られる用例がある中、「まあまあ」の評価性を「満足・許容」と捉えることには疑問が残る。

また、芳賀ほか(1996)『あいまい語辞典』における「まあまあ」の項には、以下のように記述されている。

(前略)「まあまあ」とは、十分とは言えないが、自らの限度を見極めれば、ある程度満足するべきところまでは来ている、といった感じである。(中略)「まあまあ」には、「まっ、いいか」や「まあ、こんなもんか」と通じる、ほどほどの「達成感・自足感」と、「まだまだ」という「不満足感」が同居している。つまり、「まあまあ」は、ある程度の「満足感」とある程度の「不満足感」を同時に含む両義性をもっており、あいまいなのも無理はない。

「まあまあ」は、満足感だけではなく不満足感も含む語であるという記述は、修飾先の用言の程度を低めているように見える「まあまあ」の用例に対しても、一定の説明を可能とする。しかし、「あいまいなのも無理はない」とのまとめ方からもわかるように、「まあまあ」で表される評価性が十分に具体的に示されているとはいえない。

程度を表す「まあまあ」のもつ「満足感」および「不満足感」の内実の正体は何か、なぜその「両義性」を「まあまあ」一語で表すことが可能なのかということを含め、程度を表す「まあまあ」の評価性について次節以降で具体的に検討を加える。

3.「まあまあ」の種々の用法についての概観

第1節で述べた通り、「まあまあ」には程度副詞用法以外にも様々な用法がある。現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、「BCCWJ」と示す)を用い、語彙素読み「マアマア」で用例を採取した結果、大きく分けて以下の4つの用法が確認された。

- ①感動詞驚嘆用法：喜びや呆れなどの話者の大きな感情の動きを表す用法(用例(3))
- ②感動詞促し用法：相手の言動を促す用法(用例(4)(5))
- ③副詞的用法：後続の内容全体に係る用法(用例(6))
- ④程度副詞用法：スケールのある語を修飾したり、述語になったりして、物事の程度を限定する用法(用例(7)(8))

(3)ゼルダ伯母さんはにっこり笑った。「まあまあ、最後に会ってからずいぶん大きくなって。あの時はまだ赤ん坊だったものね。(PB59_00601)

(4)「わしをその男の両親欄に書き込んだのかい？それとも友人扱いかね？」まあまあ爺さん、冗談はお互い、これくらいにしよう。力になってくれるかい？」

(LBn9_00174)

(5)「ちがう。わしがお茶を出した丸盆の下に置かれていたんだ」「まあまあ」と勲はなだめるように手をふった。(LBo9_00118)

(6)だったら自由作付けでいこう、という話が出てくる。それを三回ぐらいの周期でやれば、まあまあ、落ち着くところに落ち着くのではないか。(LBi6_00004)

(7)大きな家ではないが、敷地が百七、八十平方メートルぐらいはあり、都会ではまあまあの広さであろう。(PB39_00293)

(8)このお店の評価は人によってかなり分かります。私もお邪魔したことがあります、お料理はまあまあだけど接客部分でチョット苦手な対応がありました。

(OY14_18219)

「①感動詞驚嘆用法」は、予想外の出来事に対する話者の「驚き」を示す用法である。文頭に表れる「まあまあ」は独立語として用いられ、対人場面に出現するが、相手に対する働きかけは弱く、独話的である。例えば、(3)は対面した親戚の子に向けた発話だが、「まあまあ」は話者自身の感情表現に過ぎない。

一方、同じ感動詞としての用法であっても「②感動詞促し用法」は、相手に向けた働きかけが強い。ここに分類される用例は、「①感動詞驚嘆用法」と同じく対人場面で文頭に表れ、独立語として用いられるものであるが、後続に相手の言動に対する要求を伴う点で異なる。例えば、(4)の場合「冗談はお互い、これくらいにしよう」が相手に対する要求にあたる。なお、「要求」は(4)のように明示される場合もあれば、(5)のように直接的には表現されない場合もある。しかし、(5)の場合であっても後続の「なだめるように手をふった」から、相手に対する要求は明らかであることから「②感動詞促し用法」として捉えられる。

「④程度副詞用法」は、「中程度を表すまあまあ」の用例である。文の成分となり、話題の程度を限定する機能を有する。例えば、(7)は「広さ」の修飾語となり、家の広さの程度を限定している。(8)では「まあまあ」が述語となり「お料理」の程度を限定している。

「③副詞的用法」は、「まあまあ」が後続の内容全体に係る用例である。「④程度副詞用法」の「まあまあ」が修飾語となる場合、特定の一語を係り先にもつが、「③副詞的用法」の場合、係り先が後続の内容全体となる点で異なる。例えば、(6)の「まあまあ」は「落ち着くところに落ち着くのではないか」に係っている。

また、以下(9)～(11)のように、「③副詞的用法」と「④程度副詞用法」の区別が明確にで

きない、複数の解釈が可能な用例も見られる。

- (9) 何十年、いや年数に関係なく、連れ添ってきた妻のこれまでのお金の使い方が、まあ常識の範囲であったのなら、妻に従ったほうがよいと私は思う。

(LBI3_00121)

- (10) 同期の成功している人から見れば大したものではないだろうが、私の弁護士経験年数や年齢から考えると、まあ標準レベルなのではないかと思う。(LBr3_00025)

- (11) こういうような考え方でございまして、畑作全体としてみますと現在の姿がまあそう悪い状態ではない、むしろ体系としてはバランスがとれていることから考えましても、(OM21_00010)

(9)～(11)はそれぞれ「範囲」「レベル」「状態」を程度限定しているようにも考えられる。しかし、「範囲」「レベル」「状態」の語は、「常識の」「標準」「そう悪い～ではない」といった別の程度を表す表現で修飾されていることから、「まあまあ」が担う程度限定機能は薄いようにも感じられる。そのため、スケールのある語の程度を限定しているのではなく、「常識の範囲内であったのなら」「標準レベルなのではないか」「そう悪い状態ではない」といった、後続のまとまった内容に対する修飾にも捉えられる。このように、現代語における「まあまあ」の用例の中には「③副詞的用法」と「④程度副詞用法」の中間的なものもあり、用法間に連続性が強いことがうかがえる。5節では、「③副詞的用法」の「まあまあ」の意味機能と「④程度副詞用法」の「まあまあ」に内在する「評価性」の関係について詳しく見る。

4.各用法の時代ごとの分布

第3節では、現代語の「まあまあ」に大きく分けて4つの用法が見られることを確認し、特に「③副詞的用法」と「④程度副詞用法」の関連が深いと見られることを指摘した。本節では、その他の用法との連続性を確認するために、採取する用例の検索範囲を広げ、時代ごとの用例の分布の差を確認する。

通時的に用例を観察するにあたり、日本語歴史コーパス(CHJ)と新潮文庫の100冊により、用例を採取した。採取した用例を用法ごとに分類し、用例数とコーパスごとの出現率をまとめたものが表1である。なお、「④程度副詞用法」は、その統語的特徴(用言を修飾する用例・体言を修飾する用例・述語となる用例)によって、下位分類を設けてまとめている。

表1 「まあまあ」の各用法における時代ごとの分布

	感動詞		③副詞的	④程度副詞			複数解釈 可能	不明	合計
	①驚嘆	②促し		用言修飾	体言修飾	述語			
歴史コーパス (CHJ)	18 13.1%	71 51.8%	44 32.1%	0 0.0%	0 0.0%	4 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	137
新潮の100冊	18 22.0%	26 31.7%	13 15.9%	5 6.1%	1 1.2%	17 20.7%	0 0.0%	2 2.4%	82
現代語コーパス (BCCWJ)	29 4.5%	119 18.3%	47 7.2%	151 23.2%	76 11.7%	194 29.8%	31 4.8%	4 0.6%	651

表1より、CHJ（すなわち、およそ大正期以前）における検索範囲では、程度副詞用法がほとんど見られない。新潮の100冊においても、程度副詞用法は全体の用例の3割弱とBCCWJの用例出現率と比較すると低い。また、程度副詞用法の中でも、「まあまあ」が修飾語になるタイプの用例の出現が遅れる傾向にあることが読みとれる。ここから、「まあまあ」の程度副詞用法は、感動詞用法と副詞的用法に遅れる形で表れ、その中でも、典型的な程度副詞としての形である修飾語を伴うタイプの用例は最も後になって使用されるようになったと見られる。なぜ、程度副詞用法の中でも「述語」として用いられる用例が先に見られるようになったのだろうか。ここで、CHJにおいてもわずかながら見られた「④程度副詞用法（述語）」の全用例を確認する。ここに分類した4例のうち、最も古い用例が(12)である。

- (12) こんどはせうちはできないからはやくいつてこいとうからだすつもりだつたがまあまあとおもつてかんべむをくはへてみたがもういちにちもおくわけにはいかない (60C 口語 1873_11114)
- (13) 五十川女史に後事を托して死んだ。この五十川女史のまあまあと云ふやうな不思議な曖昧な切盛りで、(60N 或女 1911_11004)
- (14) 主人が就職して毎日出勤します様になりましてからまあまあと幾分か心も軽くなりかけた時、あどこまで私達は呪はれてゐる (60M 太陽 1925_07050)
- (15) 松本大明神身動きもせぬ。三派内閣では無いが、マアマアで居居つて茲に幾年。(60M 太陽 1925_09015)

(12)～(15)は、いずれも文中で用いられ、引用形式や状態を表す「と」「で」が後接していることから「述語」としての用例と位置づけた。しかし、具体的に何の程度を表しているかは判然としない。この時点での述語としての用例は、程度を限定しているというよりは、「③副詞的用法」の「後続文の省略」として見るのが自然である¹。例えば、(12)であれば、「まあまあいまのところはおいてやろう（とおもつて）」といった話者の考えの詳細部分が省略され、「まあまあとおもつて」とされていると考えられる。(13)～(15)においても同様に、「まあまあ」の後に何かしら事の詳細あるいは話者の思考が省略されていると見ることが可能である。その「詳細」を表現する必要がない、あるいは明確に表現することが難しい場合の「副詞的用法の修飾部が省略された用例」が述語としての用例につながったものと考えられる。

また、(13)であれば「切盛り」の状態、(14)であれば「話者の心」のレベルを示す「程度性」を読みとることも可能である。一方、(12)は何かの程度を限定しているとは読みとりづらい。ここから、副詞的用法「まあまあ」の後続文が省略されるようになったことで、話題や文脈によっては物事の程度性が「まあまあ」によって示されるパターンが表れ、それが程度副詞用法につながったのではないかとの推測できる²。このことから、「③副詞的用法」と「④程度副詞用法」の関連が深いことが読みとれる。

5. 程度副詞用法「まあまあ」の評価性

3節および4節より、「まあまあ」の程度副詞用法は、歴史的には感動詞用法に遅れる形で出現していること、副詞的用法と程度副詞用法には連続性が認められ、程度副詞用法の「述語」に分類される用例には副詞的用法の後続文の省略と見られる用例があることを確認した。ここから、程度副詞用法「まあまあ」の「評価性」を明らかにするために、特に「③

¹ 「と」「で」の後接によって、文成分の一部をなしている点で、「④程度副詞用法」の述語用法と分類した。意味的には「①感動詞驚嘆用法」「②感動詞促し用法」とも連続性はある。ただし、(12)～(15)の「まあまあ」は、話者が目の前の相手に対して直接発したものではないため、「①感動詞驚嘆用法」「②感動詞促し用法」の条件とは逸脱している。よって、「③副詞的用法」の後続文が言表されない（省略された）ものと理解し、「③副詞的用法」から「④程度副詞用法」の述語用法へのつながりと位置づけた。「④程度副詞用法」と「②感動詞促し用法」との関わりについては5.1.も参照されたい。

² 本章では程度副詞用法「まあまあ」の「評価性」を明らかにすることが目的であるため、程度副詞用法確立の具体的な時期や過程については詳述しない。この点については程度副詞用法獲得の過渡期にあたる時期の用例を採取し、より深く分析する必要がある。今後の課題としたい。

副詞的用法」の意味的特徴を明らかにすることが必要であると考えられる。本節では、程度副詞用法「まあまあ」の「評価性」を明らかにするために、「③副詞的用法」と「④程度副詞用法」の関連を主に見ていくが、「②感動詞促し用法」においても、「④程度副詞用法」を見るにあたって注目すべき特徴があるため、まずはこれを確認する。

5.1.感動詞促し用法との関連

「②感動詞促し用法」は、対人場面で用いられ、相手への行動の要求を伴う用例である。注目したいのは、その要求の中身である。以下、(16)～(19)の用例を通して「相手への要求」を確認する。

(16)丁 / \ はつしと打すへるきくの井はその手にむづととりすがり菊そりやあんまりな短気の仕方。まあ / \ 待てくださんせ。こんな悲しい事になりいしたも。(52-洒落 1826_01063)

(17)「まあまあ、結論を急がんで下さい。まず私の理論を簡単に説明します。(『世界の終りとハードボイルド』)

(18)いつだって、どこでだって、僕は白い眼で見られてきました」「まあまあ、そう気を悪くするな。専門家の狭量なのは、なにも警察に限ったわけではあるまい。(LBm9_00076)

(19)辞令を受け取りにいくという前段階で、班員同士が火花を散らしあうなど、先行き不安もいいところだ。「まあまあ、みんな仲良くやりましょうや」苦労人の重松が、肉の厚い手のひらを広げる。(LBo9_00240)

(16)はすぐにも行動を起こしそうな相手に対して待つように、(17)は結論を急かす相手に急がないように、(18)は物事を悲観的に捉える相手に気を悪くしないように、(19)は後続文は形式的には「勧め」であるが、揉め事を起こしそうな人たちに向けて仲良くするように、求めていることがわかる。いずれも、発話場面において相手が起こしている、あるいは起こそうとしている「望ましくない言動」を抑えるための求めであると判断できる。「②感動詞促し用法」の中には「まあまあ、一杯飲みましょう」「まあまあ、お上がりください」といった前向きな「勧め」ともとれる働きかけも存在するが、「勧め」ととれる用例の出現率は

低い³。そのため、「②感動詞促し用法」の「まあまあ」にある主な意味機能は相手の怒り、焦り、悲嘆などのネガティブな感情からくる衝動的な言動を抑えようという働きかけであるといえる。「負の側面を抑えようとする」という方向性が「まあまあ」の評価性を考える上でも重要になる。

5.2.副詞的用法「まあまあ」について

次に、特に「④程度副詞用法」と関連性が強いと考えられる「③副詞的用法」について詳しく見ていく。後続文に係る用法である「副詞的用法」の「まあまあ」は、単独形式「まあ」の典型的な用法と非常に類似する⁴。ここで、単独形式「まあ」について述べた先行研究について確認する。

文に係るタイプの「まあ」については、川上(1993,1994)が詳しい。川上(1993)は「まあ」について談話形式から「応答型用法」と「展開型用法」に用法を大きく二つに分け、「応答型用法」の本質的な意味を「概言」とし、「いろいろな問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べようとする」という姿勢・態度に関わるものである(川上 1993;p.77)」としている。この説明は、たしかに後続文に係る「まあ」の用例に当てはまる。

(20)このような結論を息子が出した時、僕は「そうか。そこまで考えているンやったら、まあ、やれるだけやってみい」と言うしかなかった。(PB21_00042)

(21)部屋の掃除は、「四角い畳を丸く掃く」の類だったけれど、まあ、今日のところは
大目に見てあげよう。(PB14_00332)

³ BCCWJの「②感動詞促し用法」を下位分類していくと、行動の「抑制」にあたる用例が105例(88.2%)、「勧め」にあたる用例が14例(11.8%)であった。また、「まあまあ、一杯飲みましょう」や「まあまあ、お上がりください」の発言の背景には「相手はその行為を遠慮している」状況が伺われ、その「遠慮」の行為を抑制するための発話であるとの見方も可能である。

⁴ 用例を確認すると後続内容に係る用法の出現率が非常に高い。BCCWJにて検索条件「語彙素読み“マア”」で採取された「まあ」の用例を用法ごとに分類した結果、77.9%が「文修飾用法」であることがわかった。なお、検索の結果、「まあ」の用例は15333件と数が大きかったため、採取された用例をRAND関数でランダムに並び替えたうちの先頭1000例を分析・考察対象の用例とした。なお、固有名詞(「マークくん」「まーちゃん」の類)の用例など、「まあまあ」の単独形式として認められない用例については除外している。

(20)は話者が「と言うしかなかった」としていることから、「まあ」に続く「やるだけやってみい」は手放しで勧めるものではなく、「不安要素があるにしても、それを我慢して」といった妥協の上での結論であると考えられる。(21)についても、掃除の質としては不十分(「四角い畳を丸く掃く」)であるが、いくらかのマイナス要素は目をつむって良しとする(「大目に見てあげ」る)態度がわかる。

この意味機能は、副詞的用法の「まあまあ」にも同様に当てはめられる。

(22)亦びつくりいたしてやう / \ 今日こちらへまゐりました此「をやそうでありますか
まあ / \ 半さんのことは便りのないももつともわかりいしたが唐琴屋はどうしい
した (53-人情 1833_02012)

(23)ゲーリーたちお招ばれされた子供たちはまあまあいいようなものだけど、ティナが
かわいそうでしょ。(『若き数学者のアメリカ』)

(24)だったら自由作付けでいこう、という話が出てくる。それを三回ぐらいの周期でや
れば、まあまあ、落ち着くところに落ち着くのではないか。(9)再掲)

(25)昨年ああいう結果になりましたので、今度はできるだけ広く国民のお考えを聞いて、
そうして、まあまあそれならばやむを得ないと考えていただけるようなものを
御提案しなければならない。(OM35_00001)

(22)は「唐琴屋」の状況が分からないという懸念がありながらも、とりあえず「半さんのこと」については何とか事情を理解できたという意味で「まあまあ」を用いている。(23)は、手放しで「いい」とは言えないものの、ティナという人物に比べて招かれた子供たちの境遇は概ね悪くない、完全に「いい」とは言い切れないが、いくらかの妥協を踏まえて良しとするといった意味で「まあまあいいようなもの」と表現されていると捉えられる。(24)は「三回ぐらいの周期で」自由作付けを行うことによってどのような結果が招かれるのかを定かではない、不確かな要素はあるが、概ね「落ち着くところに落ち着くだろう」という話者の態度が読みとれる。(25)も、不満な点は残るにしても、それに妥協する形で「それならばやむを得ない」という判断が下されることを期待した上での発話である。

「③副詞的用法」においては、「後続で述べる内容」が実態と完全に一致はしていないものの、「大まかにはそのように括れる」、「細かい事情を考慮せずに暫定的な判断として示す」といった話者の意図を示す役割を「まあまあ」が担っているといえる。「③副詞的用法」に

においては、理想の状態とそう遠くはない、ただし完全に理想となる状態には足りていない実態を大目に見て良しと括る役割を「まあまあ」がもつものと考えられる。

ただし、単独形式「まあ」の副詞的用法は、「まあ」に続く後続文脈が必ずしもプラスになるとは限らない。例えば、(26)(27)のように、後続文脈が否定的な用例も見られる。

(26)何もないんですが今日久しぶりに自分から3連休突然だけど遊ぼう、と友人を誘ってみました 無理でした まあこれだから誘うの嫌になっちゃったんですけどね
(OC09_06704)

(27)気持ちに応えてやりたいという小さな希望が生まれるけど、それはいつも自己嫌悪に押しつぶされた。まあとにかく光がないって事。私の頭ん中も生活も未来も真っ暗って事。(OB6X_00247)

「これだから誘うの嫌になっちゃった」、「とにかく光がない」という表現からわかるように、単独形式「まあ」はネガティブな事柄を述べる時も「細かな説明を抜きにして大まかにまとめると」といった括り方が可能である。このような明らかにネガティブな要素を後続する副詞的用法は現代語の「まあまあ」には見られなかった。一方で、CHJで採取した近代以前の用例の中には、少ないながらも後続にネガティブな要素を含むものも見られた(用例(28))。

(28)こうおめへも情ねへものだけ。まあ／＼面の善悪はさておいた所が。根性の陸でなし。おらあもうふつ／＼否だけ。(53-人情 1832_06001)

(28)では「面の善悪」という他の要素は抜きにして、性根が「陸でなし」であると括っている。このような用例が見られることから、副詞的用法の「まあまあ」においても、ある時期までは後続の内容の良し悪しに関係なく、「細かい事情を差し置いて、大まかにはそう言える」とする使用が可能であったものと思われる。ただし、現代語「まあまあ」は話者にとって(どちらかと言えば)肯定的な内容につくものに絞られている(この共起制限が、近代以前のCHJと現代語BCCWJとの副詞的用法の出現率の差につながっている可能性もある)。この共起制限は、程度副詞用法「まあまあ」がマイナスの被修飾語をとりにくいこととも関連しそうである。なぜ、副詞的用法「まあまあ」の後続内容が肯定的なものに絞られ

ていったのか、その過程や要因を明らかにすることは今後の課題となるが、話者が一括りに集約していきたい内容が肯定的なものに偏ることは、程度副詞用法との連続性をうかがわせるものである。

5.3.程度副詞用法「まあまあ」の評価性

ここで、前項までに述べてきたそれぞれの用法における「まあまあ」の特徴について再度整理したい。

「②感動詞促し用法」では、主に相手の負の言動を抑制する機能を「まあまあ」が担っていた。「③副詞的用法」では、話者の「理想とする事態」と比較し、不足点のある実態を踏まえ、多少のネガティブな要素を大目に見たうえで大まかに良しと括る機能があった。

これらの「まあまあ」の意味特徴を踏まえつつ、程度副詞用法の用例について考える。

(29)天井には裸電球、ベッド二台と鏡、ハンガー一個あるのみ。シーツもピローもまあまあ清潔だが、百年間使い込んだと思われるほど古びていた。(PB52_00139)

(30)夕方からなんだか頭が痛くて、それでも食欲はまあまああったので晩ごはん食べて、さっき頭痛薬飲みました。(OY07_01319)

(29)、(30)は程度副詞用法のうち、用言を修飾する用例である。(29)は寝具の「清潔さ」を、(30)は「食欲の度合い」を程度限定している。(29)では、単に「清潔だ」と述べるのに比べ、「まあまあ清潔だ」とすることで、その清潔さの程度をやや低めているように見える。また、後続内容に「百年間使い込んだと思われるほど古びていた」ともあることから、寝具の清潔さは話者にとって非の打ちどころなく良いわけではないとわかる。つまり、話者にとって「理想形である清潔な寝具」と「実際の寝具」には幾分かの差が生じているのである。しかし、その差を露骨に、あるいは否定的に見るのではなく、「多少の瑕疵は大目に見れば良し」と大まかに肯定する、「③副詞的用法」で見られた意味特徴が反映されているのではないだろうか。さらに、この「肯定的な大まかな括り方」は、単に細かい事柄を無視した結果生じたものではなく、「②感動詞促し用法」で見た「ネガティブな言動の抑制」にも通ずるのではないかと考える。「理想と実態に隔たりがある」ことを否定的に捉える話者自身の思考を抑制し、事実や結果を大まかに自分の理想像として捉えようとするとき、「まあまあ」が程度副詞用法として運用されるのである。ここから、程度副詞用法「まあまあ」は話者の

理想と実態の間にある不足部分に対し、話者自身の思考に折り合いをつけた上で肯定する「妥協」の評価性があると考えられる。これを踏まえて考えると、(30)は体調が万全(理想)の場合の「食欲」と比較し、そこに達するほどではない現状に対して「それでも何とか肯定的に見るべきレベルである」と妥協の上、「まあまああった」と表現されているのだと説明できる⁵。

この見方は、体言を修飾する用例、述語となる用例においても適用できることが確認できる。

(31)大きな家ではないが、敷地が百七、八十平方メートルぐらいはあり、都会ではまあまあの広さであろう。(PB39_00293)

(32)店員さんに確認してやっと出てきた。まあまあの味だが、生姜だけじゃなくニンニクも添えて欲しかった。(PM51_00491)

(31)は「大きな家ではない」という表現や「都会では」という条件の提示から、話者が「理想とする広さ」と実際の広さが一致していないことがわかる。(32)も「生姜だけじゃなくニンニクも添えて欲しかった」といった「味付けに関する不足点」を挙げていることから、話者が理想とするレベルの味に、実際の料理の味が到達していないことが読みとれる。しかし、その「到達していないこと」を否定的に表すのではなく、話者自身の思考に折り合いをつけ、細かいことを大目に見て「妥協」した結果が「まあまあ広さ」であり、「まあまあ味」なのである。

⁵ 「(話者の)理想と実態の差」は、「まあまあ」の程度副詞用法全てにおいて明示的に読みとれるわけではない。例えば、以下に挙げる(a)の用例は、物件に対するネガティブな要素は読みとれず、感嘆符が用いられていることから物件の安さは話者にとって積極的に評価できるものであるように見える。

(a) 浦安市の富士見って所に住んでた頃よく自転車で行きましたよ！浦安駅から離れてるので家賃とかはまあまあ安いですよ！駅へも自転車使えば住みやすいし、TDLにも旧江戸川沿いに行けば十五分くらいで着けるかと…(OC13_00816)

このような用例は、話者というよりむしろ「発言先の相手」の理想を推測した上での表現だと思われる。相手にとっての「理想」が分からない以上、「安い」と断定した上で提案を行うことには心理的負担を伴う。そこで、「あなたの理想には及ばない実態かもしれませんが(悪くないですよ)」といった相手の理想と実態との差(が生じている可能性)を認めたくえて、積極的な方向に話を進めようとする際に「まあまあ」が用いられるのである。話者自身の理想と実態の差に折り合いをつける「妥協」とは、やや趣を異にするが、このような使用も「妥協」に含まれると考える。

(33)詰将棋談義になり私の作品を一、二示したところ、泥くさいねとにべもなかった。

ただ、そのあとに筋はまあまあだねと続けられ、多少は慰めの気持ちがあったらしい。(LBn7_00006)

(34)当時の写真製版の技術はまあまあだが、なんと言っても紙質が悪い。(LBf9_00184)

(33)は前文脈に「にべもなかった」とあり、作品についての評価が理想的ではないことが明らかである。その「理想的ではないという評価」を前提にしつつ、「筋」という観点においては、肯定的な見方ができることを「まあまあ」で示している。全体として理想の状態でないにしろ、ひとまず「筋」に関しては大まかに見て良しと肯定する「妥協」の評価性が(33)から読みとれる。(34)も同様に、「写真製版の技術」について、理想と言えるほど良くはないが、およそ肯定的に捉えられるレベルにあることを「まあまあ」で示している。

以上より、程度副詞用法における「まあまあ」は「話者の理想と実態の差に折り合いをつける」意味機能をもち、結果として「やや消極的な肯定感につなげる妥協」の「評価性」を表すといえる。理想と実態に隔たりがあるため、その隔たり部分は「不満足感」と捉えられ得るが、その不満足部分をあからさまに示すのではなく、負の側面に対する否定的な思考を抑制し、大まかに肯定的な見方(満足感や納得感)にもっていこうとする話者の心の向きが「まあまあ」によって表されるのである。「まあまあ」そのものに「満足感」と「不満足感」が同居するというよりは、不満足が残る実態に対して、折り合いをつけ「満足感」にもっていこうとする話者の思考の向きを示す機能(=「妥協」)が程度副詞用法「まあまあ」の「評価性」である。

5.4.否定的な見方を示す程度副詞「まあまあ」について

前項では、程度副詞用法「まあまあ」の評価性は「妥協」であり、「負の要素を大目に見たうえで、満足感につなげようとする思考の向き」があることを示した。しかし、程度副詞用法「まあまあ」の中には、わずかながら否定的な見方を示す用例もある。BCCWJにおいて見られた否定的な見方を示す「まあまあ」の全用例を以下に挙げる。

(35)一番クラスで小さかったこの子は、自分でも、まあまあ小さい方、といった。でももうすぐ大きくなるんだ、と決意を見せた。(LBs3_00070)

(36)昔はソビエトのモスクワの市民というのは、ダーチャという、まあまあ粗末なものでしたけれども、それぞれちょっと出掛けていく別荘というのをみんな持っていましたね。(OM66_00001)

(37) 6 k までの 4 k 超は人の後ろでレースを展開。5 k 十八分五十三秒くらいだったがまあまあつらい。今日はベストはきつそうだ。(OY15_21519)

(35)は体が大きくなりたいと願う子どもが、自分の体を「まあまあ小さい」と評しており、肯定的な見方だとは捉えられない。(36)(37)は、それぞれ「粗末な」「つらい」を修飾しており、明らかにネガティブな見方を示している。これらの用例は、本章で述べてきた「まあまあ」の「評価性」である「妥協」をそのまま当てはめて考えることが難しい。そこで、分析のヒントになりそうなのが、副詞的用法を分析するにあたって述べた、単独形式「まあ」のネガティブな内容を修飾する用例(5.2.用例(26)(27))である。単独形式「まあ」はネガティブな事柄を述べる時も「細かな説明を抜きにして大まかにまとめると」といった括り方が可能である。この副詞的に用いられる「まあ」と程度副詞の「まあまあ」が連続的であると考え、(35)～(37)も「小ささ」や「粗末さ」「つらさ」が断言できるほどのものではなく、「正確に見ていくと完全にそう言い切って良いというわけではないが、大まかに言えば」という注釈的な役割として「まあまあ」が使用されていると捉えることが可能になる。副詞的用法の「まあまあ」の後続文脈が肯定的なものに偏ることからも、程度副詞用法「まあまあ」基本的には「ネガティブな要素」について大目に見て良しとする(=妥協する)機能をもつといえる。一方で、時として「考えられる多少の肯定的な要素を抜きにして、大まかに見ると否定的である」といった場合も「まあまあ」が使われる場合があることも補足しておきたい。否定的に括る場合の用例は、単独形式「まあ」に見られる用例と関連があると考えられるが、程度副詞用法として現れるときの条件がいかなるものであるのかという点については検討の余地が残る。

6.まとめ

本章では、程度を表す「まあまあ」の評価性を明らかにするため、「まあまあ」を4つの用法に分類し、程度副詞用法との関連が深いと考えられる用法、用例に焦点を当て、意味的特徴を探ってきた。

談話で用いられる感動詞用法のうち、対人的に用いられる「感動詞促し用法」は、主に相

手の怒り、焦り、悲嘆などのネガティブな感情から引き起こされる言動を抑制しようという働きかけの際に用いられる。

「副詞的用法」は、話者の心内でマイナス要素や不確定要素を大目に見て、大まかに後続内容が成立することを示す用法である。完全に理想的な状態とは異なるものの、理想の状態と遠くは離れていない実態に対し、大目に見たうえで良しと捉えようという話者の態度の表明が「まあまあ」によってなされる。

「程度副詞用法」には上記の「感動詞促し用法」と「副詞的用法」の意味特徴が反映されていることを確認した。「程度副詞用法」の「まあまあ」は、話者の理想と実態に差が生じる場面で用いられる。その差（不満足感が残る部分）について、大目に見て最終的には良しと括るあり方は「副詞的用法」の「マイナス要素や不確定要素を大目に見て、大まかに後続内容が成立することを示す」機能と連続的である。また、理想と実態の差分の不満感を表に出すのではなく、話者の心内で留め納得感につなげていこうとする方向性は、「ネガティブな言動を抑制する」という「感動詞促し用法」の機能が引き継がれていると考えられる。副詞的用法の「(不足部分を) 大まかに見る」点と、「感動詞促し用法」の「ネガティブな部分を抑制しようとする働きかけ」の2つの要素が引き継がれた程度副詞用法「まあまあ」は、「理想と実態の間にある不足部分を大目に見て話者自身の思考に折り合いをつける」という「妥協」の評価性が認められる。

第8章 中程度を表す「そこそこ」の〈評価性〉

1.はじめに

本章で扱う「そこそこ」は(1)～(3)に見られるように、修飾語あるいは話題となる事柄に対する程度限定を行う用法が見られ、統語的な特徴は「評価を表す程度副詞」と合致する¹。

- (1)銀座という場所にもかかわらず格安で使えるうえに料理もそこそこおいしく、理恵子たちはよく利用しているようだ。(PM11_00633)
- (2)とにかく薄味。濃味だったら合格点だったんですけどねえ～。まあ、値段を考えれば、そこそこのクオリティでした。(OY03_00271)
- (3)背も高く容姿もそこそこだったが、そこに映った自分の姿は、やはりどう見ても少し疲れた顔をした若いサラリーマンにしか見えない。(LBm9_00216)

しかし、程度副詞を「評価」の観点から体系的に論じている工藤(1983)、渡辺(1990)、田和(2017)、疏(2018)などにおいて、「そこそこ」に関する記述は見られない。程度副詞用法を中心に、「そこそこ」の諸用法の「話者の心内にある価値観や基準」、「その基準に対する位置づけ」、話者による「評価(品定め)」の実態を明らかにすることは、程度副詞が評価を表す条件、あるいは程度副詞が評価を表す仕組みを考察するための示唆を得るうえで重要であると考え。そこで、本章では、現代日本語を中心とした「そこそこ」の用例について、先行の渡辺実の副詞論などを踏まえ「①対象領域」「②話者の心内にある基準(価値観)がどのように表れるか(=基準の明示性)」「③基準(価値観)における位置づけ」「④評価(品定め)のあり様」の4つの観点から、用法ごとの特徴をまとめ、特に「程度を表す用法」における「そこそこ」の意味的特徴を具体的に記述することを目指す。なお、観点の名称に用いた「話者の心内にある基準」、「基準(価値観)における位置づけ」「評価(品定め)のあり様」などの語句は田和(2017)によるものを参考にしているが、内実は、田和(2017)と全同ではない。

¹ 田和(2017)では「評価を表す程度副詞」の統語的特徴として「派生的な連体修飾用法・述語用法を持つ」ことを挙げている。本章(2)は「の」を伴った連体修飾用法、(3)は述語用法と捉えられ、この特徴と一致する。

2.「そこそこ」の種々の用法

現代語における「そこそこ」は、程度副詞として用いられる割合が最も高いが、(4)のように「(前接する主語の動作や行為を表す名詞を) 急いで済ます様を表す用法」や、(5)のように数量詞に後接し、「前接の数量詞をかろうじて超えている様を表す用法」がある。

(4)その日はよく晴れ、水面を波立たせる風もなく、私は昼食もそこそこに針金と棒をもってパイクを一匹とりに出かけた。(LBf7_00030)

(5)目の前に立っている女は、どう見ても三十そこそこ、ひょっとしたら二十代でも通用するような美人だった。(LBc9_00061)

また、現代語においてはほとんど用いられていないが、近世以前の用例には(6)のような、「場所を示す用法」も存在する((6)は日本語歴史コーパス(CHJ)により採取したものである)。

(6)これはただ志の初めを見するなり。京のおはしまし所はそこそこになん。必ず参れ。
(30-宇治 1220_07005)

清田(2014)は、(6)のように場所を示す代名詞として働く用法を「名詞用法」、(4)のように「NもソコソコにP」の形に代表して現れる「急ぐ様子」を示す用法を「状態副詞用法」、(5)のように数量詞に後接する用法を「接尾辞的用法」、第1節の(1)~(3)で示した評価を表す程度副詞としての用法を「程度副詞用法」、それらのいずれとも判断しがたいものを「曖昧用法」と分類し、時代ごとにまとめている。次ページに示す表1は清田(2014)による用法ごとの用例分布である²(清田 2014;p30 表1 より引用。ただし、体裁を一部変更した)。

² 清田(2014)は、中古~近世には「日本古典文学大系」を対象にした国文学研究資料館データベースと「新編日本古典文学全集」を対象としたジャパンナレッジを、近現代には「CD-ROM版 明治の文豪」と「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」を、現代語には「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を使用してデータ収集を行っている。

表1 ソコソコの量的分布

	中古	中世		近世	近現代	現代	計
	コーパス	コーパス	抄物	コーパス	コーパス	コーパス	
名詞	32	7	19	16	1	1	76
状態				22	28	103	153
曖昧				48	5		53
接尾辞					24	114	138
程度					2	788	790
計	32	7	19	86	60	1006	1210

また、清田（2014）は表1の結果から、「そこそこ」の変遷過程を以下のようにまとめている。

$$(7) \text{ 名詞用法 (中古)} > \left\{ \begin{array}{l} \text{状態副詞用法 (近世)} \\ \text{接尾辞的用法 (近代)} \end{array} \right\} > \text{程度副詞用法 (現代)}$$

これらの変遷過程を踏まえて、清田（2014）は「そこそこ」の程度副詞用法について、「状態副詞用法の、副詞用法として有する構文的特徴と、量的側面に言及するという接尾辞的用法の意味的特徴の支えのもとに成立した（清田 2014;p34）」と言及している。

清田（2014）が提示する時代ごとの「そこそこ」の用法の分布は、筆者の調べと概ね一致しており、「状態副詞用法の、副詞用法として有する構文的特徴」（「そこそこに」の形式）が、程度副詞用法成立に寄与したという指摘についても異論はない。また、「量的側面に言及するという接尾辞的用法の意味的特徴」が程度副詞用法「そこそこ」の意味を支えているという点についても、一定の理解はできる。一方で、程度副詞用法「そこそこ」には(8)(9)に見られるような、「質的側面」に関わる用例も少なくない。(8)は対象となる人物の「外見」、(9)は「話者自身が納得できるほどの人物像」といった質的側面に言及するのに「そこそこ」を用いている。

(8)とびきりの美人ではないがそこそこ可愛く、真面目だが時として兄ゆずりのおっちょこちょいな一面を見せることもあった。(LBd9_00089)

(9)私もまた、世の中の価値基準を批判しながら、その中でもそこそこの自分を示したいって思いは、きっとあったんだよね。(LBk3_00032)

また、接尾辞的用法の「そこそこ」は、話者が「数量が大きい」と捉えている用例はほぼ

見られない³のに対し(用例(10)(11))、程度副詞用法の「そこそこ」は、(12)(13)のように、比較的「程度量が大きい」と話者が捉えていると考えられる用例も見られる。

(10)目の前に立っている女は、どう見ても三十そこそこ、ひよっとしたら二十代でも通用するような美人だった。(5)再掲)

(11)アルバイトを必要とする者のなかで、現にアルバイトにありついている者がわずかに一割そこそこで、全体の七割近くが仕事を求めなければ食ってゆけない窮迫状態にあったのである。(LBi3_00062)

(12)給料はほかの店並みで、もうひとつの仕事の分と合わせると、そこそこの額にはなる。(LBn9_00025)

(13)トヨタ車でコンパクトな車であればヴィッツが代表的だと思います。グレードも多数あり、中古もそこそこ出ていると思います。(OC06_03333)

このように、「接尾辞的用法」と「程度副詞用法」では、量を表す点では共通しているものの、「質的側面に言及し得るか否か」「示し得る程度量の大きさ」については異なると考えられる。また、清田(2014)には「評価(品定め)」という観点からの「そこそこ」における分析・考察は見られない。

そこで、第3節では各種用法の「①対象領域」「②基準の明示性」「③基準(価値観)における位置づけ」「④評価(品定め)のあり様」の4つの観点を中心に、その特徴をまとめる。

3.各用法の特徴

本節では、「名詞用法」、「状態副詞用法」、「接尾辞的用法」「程度副詞用法」の4用法について、典型的な用例と周辺的な用例をそれぞれ取り上げ、前節で示した4つの観点を中心に考察を加える。用例は現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、新潮文庫の100冊によって採取されたものを対象とする⁴。補足的に日本語歴史コーパス(CHJ)のデータも参照する。

³ ただし、「数量が大きい(と話者が捉える場合)」の用例もわずかながら(1例)見られた。

⁴ BCCWJ、CHJにおいては、それぞれ語彙素読み「ソコソコ」で検索した結果得られた用例を対象とした。検索結果はBCCWJでは920例、CHJでは78例であった。新潮の100冊では、「そこそこ」をキー検索することで用例を採取した。得られた用例は58例である。

3.1.名詞用法

名詞用法は、現代語ではほとんど用いられないが、中古から近世においては中心的な用法であった。この用法の「そこそこ」は、主に存在場所や着点を表す「に」格を取り、大まかな場所を指し示す機能をもつ。CHJによって採取された名詞用法の「そこそこ」29例のうち、「に」格を伴うものは21例(72.4%)に及ぶ。最も多く見られる形式が「に有り」を後接するもので7例見られた(用例(16))。また、「の+場所を示す名詞(山、河など)」を後接する用例が4例、断定の助動詞「なり」を後接する用例が3例、移動の方向を表す「へ」格をとる用例が1例見られた。典型的な形式としては「に格(+移動あるいは存在動詞)」をとり、その他、場所に関わる名詞や助詞をとる場合、断定形をとる形がこの用法に分類される。以下、CHJによって採取された用例について4観点から分析を試みる。

名詞用法「そこそこ」は、(14)(15)のように、「そこそこ」の直前に特定の場所を表す語句(「町の小路」「河内国」)が表れ、「その土地辺りを大まかに指し示す」ものもあれば、(16)(17)のように、場所を示していることはわかるものの、具体的な地理的名称・情報が明かされない用例もある。

(14)「内裏にのがるまじかりけり」とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。(20-蜻蛉0974_00001)

(15)染着の心のいとどますますにおこりつつ、道心つくべくもはべらぬに、河内国そこ
そこにに住むながしの聖人は、庵より出づることもせられねど、(20-大鏡
1100_02010)

(16)大臣の云く、「思願ふ所何事ぞ」と。女霊の云く、「我れは其処其処に有し人也。生
たりし時、帝王の召に依て、只一度懐抱したりき。(30-今昔 1100_14004)

(17)「昨日は西園寺に参りたりし」、「今日は院へ参るべし」、「ただ今は、そこそこに」
など言ひ合へり。(30-徒然 1336_01050)

いずれの場合も話者が想定する「大まかな場所」を示す点、すなわち「話者の心内における基準範囲の中」を「そこそこ」が表すという点では共通している。しかし、その指示対象の範囲(名詞用法の場合は、具体的な場所)は明示される場合もされない場合もあるといえる。受け手側に「そこそこ」によって表される具体的な場所を把握させることは必ずしも意図されないものと考えられる。また、名詞用法においては「そこそこ」によって表されるも

の(場所)に対する話者の評価(品定め)は存在しないものと考えられる。例えば、指し示そうとする場所が神聖であるかどうかなどによる共起制限はない。

以上より、名詞用法「そこそこ」は、意味的な「対象領域」が「場所」であり、その場所(話者の基準範囲)は示される場合もそうでない場合もあるということを確認した。「評価(品定め)」という観点からすると、名詞用法においては存在しないといえる。

現代語における名詞用法「そこそこ」の用例出現率はわずかだが、BCCWJにおいては(18)に示す1例のみ見られた。

(18)日商はだいたいワードです。そこそこの商工会議所によりますが、どっちじゃないと駄目という決まりはありません。(OC04_00445)

「場所を示す」という点から、名詞用法と分類したが、(18)の「そこそこ」は「それぞれ(の場所における)」と解釈するのが自然だと思われる。「複数の場所」が想定されている点で、(14)～(17)に見られる中古から近世にかけての用例とは一線を画すものである。

3.2. 状態副詞用法

状態副詞用法は、BCCWJにおける出現率は高くない(920例中25例、2.7%)。一方、新潮の100冊においては高い出現率(58例中24例、41.4%)を得た。時代の違いによる要因もあると考えられるが、文体差によるものの可能性もある。

状態副詞用法「そこそこ」は「NもソコソコにP」という形式で多く用いられる。対象としたデータベースの用例において、Nにあたる名詞は「挨拶(「別れ」、「こんにちは」なども含む)」が最も多く、次いで「食事(「朝食」、「昼食」なども含む)」が多く表れた(用例(19)(20))。その他、「話」「着衣」などが散発的に見られたが、いずれにしても先行する名詞は、動作主の行動を表す語である(用例(21))。

(19)ミドリが来たときいはもう発車の時刻が迫っていたので、挨拶もそこそこに食堂を出た。(『焼け跡のイエス・処女懐胎』)

(20)はねられた人は重傷らしい。昼食もそこそこにヘルメットをかぶり、ミニパトカーに飛び乗って犯人の逃走が予想される塩狩峠のふもとにある検問所に急行した。(OW1X_00342)

(21)星野が3本塁打を浴びて8失点。新エースに、との期待も大きかっただけに、打線の話もそこそこに監督は「十勝したんだけどな…。どうもエースとは言えません」と嘆いた。(PN1e_00003)

また、動作主の行動にあたる名詞を前接せずに、動作主の行動が「そこそこ」の後に示される(22)(23)のような用例も見られる。ただし、(22)の場合は「彼は勘定もそこそこに(すませ)、あたふたと帰ってしまった」、(23)の場合は「昼食もそこそこに(済ませて)、キャビンへ戻る」といった言い換えが可能である。

(22)ノレンのおとに手を出した客は、急にとんきょうな声を張りあげた。彼はそこそこに勘定をすませ、あたふたと帰ってしまった。(『路傍の石』)

(23)いよいよ、腹が据わる。そこそこに昼食を済ませて、キャビンへ戻る。

(PB32_00210)

以上より、状態副詞用法「そこそこ」は、「NもそこそこにP」の形式をとる場合も、主体の行動が「そこそこ」の後に示される場合も、「主語の行動を表す名詞」をとり、その行動が「短時間のうちに済まされる」ことを示す用法であるといえる。よって、状態副詞用法「そこそこ」は対象領域として「(何かしらの行動に要する)時間」をとり、その行動時間が「短い」ことを位置づける機能があると考えられる。ただし、実際の「行動」は示されていても、具体的な行動時間が明示される用例は存在しない。話者の心内にある「通常ならこの程度の行動時間が想定される」という基準が前提にされているものの、それが文中に表れることはない。また、(24)のように物理的な時間の長さではなく、心理的な面で「通常想定される場合に比べて程度が小さい」ことを示す用例も存する。

(24)東京で下宿生活をしながら高校生活を送っていた私も、連日、授業もそこそこに友人の家に押しかけ、テレビ観戦しました。(OY14_48952)

特別な状況でない限り、「授業」は話者の都合によって短時間で切り上げられるものではない。(24)の表す「そこそこ」は、一般的に高校生に求められるような授業に対する「姿勢」や「熱意」といった心理的な面において「程度が小さい」ことを示していると考えられ、状

態副詞用法の周辺的な用例であるといえる。

また、(25)(26)のように、主体の先行行動が名詞ではなく動的述語による節によって示される用例も少数ながら見られた。この類の用例は、「先行の行動から後続の行動に移るまでの時間」が短いことを示すものと考えられる。例えば、(25)は「相談が極まる」から「休暇を貰い」までの時間が短いことを示し、(26)は「手ばやくからだをぬぐって」「浴衣をひっかけて出て来た」までの時間がわずかであることを「そこそこ」が示している。

(25)相談が極まるとそこそこに、会社の方は十日間の休暇を貰い、大森の家に戸じまりをして、月の初めに二人は鎌倉へ出かけました。(『痴人の愛』)

(26)「一枚買わしておいてくれ」と、いいながら手ばやくからだをぬぐって、そこそこに浴衣をひっかけて出て来たのだった。(LBh9_00045)

ここから、典型的には、「そこそこ」の前後に現れる名詞(動作)そのものの「(話者の判断による)行動時間の短さ」を示すものの、周辺的な用例として心理的な程度の低さを表す場合や、ある動作からある動作へ移行するまでの時間が短いことを示す場合もあるということがわかる。

また、主に「時間」の「短さ」を表す状態副詞用法の「そこそこ」は「その行動が満足に実施されないことへの不満」へとつながる可能性も考えられるが、用例を見る限り、話者の不満などのマイナスの評価が表れるものは取り立てて多くない。(27)のような「～てしまう」の表現が数例見られるのみである。

(27)ノレンのおとに手を出した客は、急にとんきょうな声を張りあげた。彼はそこそこに勘定をすませ、あたふたと帰ってしまった。(22)再掲)

以上より、状態副詞用法における「そこそこ」は「時間」を「対象領域」として、話者の心内にある「通常想定される行動時間」を基準に「短さ」を示すものであることを確認した。また、話者の基準で「短さ」を示しているものの、その短さに対する話者の「評価(品定め)」は感じられにくいことを確認した。

状態副詞用法は、「先行行動 N もそこそこに P (後続行動文)」を典型形式としながら、「すます」に代表される終了動作の場合には「そこそこに行動 N をすませ、後続行動文」

という構造（用例(22)(23)）をとる場合も少なくなく、「先行行動節、そこそこに後続行動文」という構造（用例(25)(26)）もとる。意味としては、話者の判断による「(通常想定される行動時間と比較した場合の) 行動時間の短さ」を表す場合が大半を占めるが、中には(24)のように心理的な側面における程度の小ささを表す場合もある。

3.3.接尾辞的用法

接尾辞的用法は現代語においても比較的多く用いられている。BCCWJ から採取された用例の分類では、920 例中 181 例（19.7%）を得た。

ここに分類される用例は、「数量+そこそこ」の形式をもち、それ以外の形式は見られない。また、名詞用法が「場所（空間）」を、状態副詞用法のほとんどが「時間」を対象領域としてもつのに対し、接尾辞的用法は「数による測定が可能であるもの」であれば様々な事柄について示すことができる。ただし、特に共起しやすい領域があり、最も多いものは「年齢」（181 例中 81 例、44.8%）であり、次いで「身長」（181 例中 18 例、9.9%）という結果となった。

(28)そこで大黒を紹介してもらい、取材の協力を頼むと中山勝正をつけてくれた。未だ

二十歳そこそこの、初々しさが残る青年だった。(LB13_00059)

(29)わずか五十歳そこそこで、もう完全にボケている。(PB22_00167)

(30)ドアが細目に開き、若い東洋人の男が顔を出した。なるほど、えらく小柄だった。

百五十センチそこそこしかなかった。(OB2X_00299)

接尾辞的用法の「そこそこ」は、前に見た名詞用法・状態副詞用法とは異なり、話者の想定する基準が「数値」の形で必ず明示される。(28)～(30)は、それぞれ「二十歳」「五十歳」「百五十センチ」という基準が示されており、「そこそこ」が「その数値をわずかに超えている程度」を位置づけていることがわかる。

明示される数量詞の近辺を指し示すという機能だけであれば「約、およそ」などの概数を表す語と類似すると考えられるが、「そこそこ」は単に概数を表す役割を担うだけでない。「話者の基準から判断したときに、その数値が小さい」ことを示す機能をもつ。「話者の基準」と照らし合わせた結果であるため、基準となる数値自体が小さいものであるとは限らない。(28)(29)からもわかるように、年齢を表す場合、「二十歳そこそこ」も「五十歳そこそ

こ」も問題なく使用できる。ただし、基準となる数値の客観的な大きさに関わらず、「話者の心内基準で捉えたときにその数値が小さい」ということが前提となっている。(28)の場合は「未だ」、「初々しさが残る」、(29)の場合は「わずか」という語と共起していることから、「二十歳そこそこ」も「五十歳そこそこ」も同様に、話者の心内基準から見て数値が小さい(若い)ものであることがわかる。基準となる数値を「わずかに超える」ことを示すと同時に、話者による「基準となる数値が小さいという前提」をも表すのが接尾辞的用法の「そこそこ」である。

話者の前提とする基準と比較して「小さい」ことを示す点では、状態副詞用法と接尾辞的用法は共通の意味特徴をもつといえる。一方で、状態副詞用法の用例には「そこそこ」以外の「程度の小ささ(短時間であること)」を示すための標識となるような言語表現が現れないのに対し、接尾辞的用法の場合は、「話者がその数値を小さいとみなしている」ことを示す言語表現がたびたび共起するという異なりがある。(28)～(30)の場合、「未だ」「わずか」「しか」がそれにあたる。状態副詞用法の場合は、「*挨拶も短時間でそこそこに出かけた」や「*食事も急いでそこそこに寝床に入った」などのように、「そこそこ」の示す領域を補強するような語(「短時間」、「急ぐ」など)が共起する用例は皆無である。また、現代語の接尾辞的用法には(31)に示すような、「話者の基準から見てその数値が大きいことを示す」例外的な用例が見られた。

(31)その頃おいくつだったか知りませんが、相手のお爺さんは、どう考えたって

七十そこそこ。そんなお年で色恋が出来るもんなんですか (LBe9_00127)

「そんなお年」という表現から、話者にとって「七十そこそこ」が高齢であることがわかる。例外的な用例は(31)の1例のみであったが、「数値が小さいことを示す別の語と共起しやすい」ということから、接尾辞的用法「そこそこ」は状態副詞用法「そこそこ」と比較した場合、「程度の小ささ」を示す機能がやや弱いと考えられる。「話者の心内における基準が明示的に示され、その基準をわずかに超える」という具体的な位置づけが可能である一方、「その程度が小さい」ことを示す機能は状態副詞用法に比較し弱い(他の語による補強を必要とする場合が多い)。

また、接尾辞的用法は「話者の基準」で「示された数が小さい」ことを表しはするが、「数が小さい」ことに対して「評価(品定め)」は行われない。

(32)そこで大黒を紹介してもらい、取材の協力を頼むと中山勝正をつけてくれた。未だ二十歳そこそこ、初々しさが残る青年だった。((28)再掲)

(33)わずか五十歳そこそこで、もう完全にボケている。((29)再掲)

文全体を見ると、(32)は肯定的な文脈、(33)は否定的な文脈に受けとれる。しかし、それらのプラス・マイナスイメージは「そこそこ」が用いられることによって生じるものではない（「そこそこ」を取り除いた文においても、文全体の是非のイメージは変化しない）。

接尾辞的用法の「そこそこ」を用いる文脈では、話者による基準が明示され、それに対する位置づけ（基準をわずかに超える）も明確に規定されるが、その事実（実際の数値と、その数値を話者が小さいとみなしていること）に対する「評価（品定め）」は行われたいといえる。また、状態副詞用法と比較すると、話者の「基準とする数値が小さいことを示す」機能はやや弱いことも明らかとなった。

3.4.程度副詞用法

程度副詞用法は現代語において最も使用率が高い。BCCWJ による用例検索の結果、「そこそこ」の全用例 920 例のうち、程度副詞用法をとる用例は 705 例（76.6%）であった。この用法は、その他の用法に比べ統語的な制約が少ない。第 1 節で示した通り、程度副詞ながら連体修飾語や述語としても用いられる。(34)は静態述語を修飾する用例、(35)は動的述語を修飾する用例、(36)は連体修飾格「の」を伴い名詞を修飾する用例、(37)は述語として働く用例である。

(34)北信太駅を降りてすぐ案内板もあったし、難なく葛葉稲荷を見つけることができた。鳥居はそこそこ大きいのが、京都、奈良の名だたる神社仏閣に比べると、なんともこぢんまりした神社だった。(PB29_00026)

(35)ピアスは、海軍でこれより上位に昇格することはないと承知していながらも、今の地位にそこそこ満足している。(LBI9_00088)

(36)とにかく薄味。濃味だったら合格点だったんですけどねえ～。まあ、値段を考えれば、そこそこのクオリティでした。((2)再掲)

(37)背も高く容姿もそこそこだったが、そこに映った自分の姿は、やはりどう見ても少し疲れた顔をした若いサラリーマンにしか見えない。((3)再掲)

名詞用法であれば「場所」、状態副詞用法であれば「時間（の長さ）」、接尾辞的用法であれば、年齢や身長に代表される「数値による測定が可能なもの」が「そこそこ」の対象領域であったが、程度副詞用法の場合は「程度量の幅が規定されるあらゆる事柄」を対象領域とする。しかし、接尾辞的用法のように、話者が規定する「明確な基準」が示されるわけではなく、状態副詞用法のように、話者の心内にある基準と比較し「程度が小さい」ことを示す機能が内包されると考えることもできない。例えば、以下の(38)(39)はいずれも話題としている事柄の値段について言及したものだが、(38)は「値段がある程度高い（大きい）こと」を示すのに(39)は「値段がある程度安い（小さい）こと」を示すのに「そこそこ」が使用されている。

(38)男性用セカンドバッグなんかは、オクでも思ったより値が付かないようです。最近のモノで未使用・美品なら、そこそこの金額はいきますけど。(OY15_20060)

(39)土曜は込み合っているので二時間制とかになりますますがそのあと他へ行けるし、駅から近いし、値段もそこそこだし、ぐるなびにクーポンついてますし。(OC08_07180)

このように、程度副詞用法「そこそこ」は一見すると、話者の心内基準における「位置づけ」が高い場合と低い場合が混在するように思われる。

しかし、「評価（品定め）」の観点から(38)(39)を見ると、共通点が見出される。どちらの用例にも、話者による肯定的な含意が見られる点である。(38)の場合、話者は「品物売る側の立場」から発言しているため、商品が「高値であること」が期待されていると考えることができる。一方、(39)の場合は、話者が消費者側の立場から発話しているため、値段が「安値であること」が期待されるだろう。(38)の「そこそこ」は「値段がある程度高いこと」を、(39)の「そこそこ」は「値段がある程度安いこと」を示しているので、どちらも話者にとって期待される結果が「そこそこ」によって表されていると捉えられる。程度副詞用法の場合は、話者の「肯定的な評価」が数値的側面を支えているといえる。

しかし、「肯定的な評価」といっても、「そこそこ」で示される話者の評価は際立って高いものではない。(38)の場合は「基本的には思ったより値がつかない」状況が前提にあり、「最近のもので未使用・美品」ならば（悪条件ながら）「そこそこの金額」になると表現されている。(39)の場合も、「土曜は込み合っているので二時間制になる」という話者にとって都合の悪い側面を抱えながらも金銭的な面を見ると「値段もそこそこ」と評価しているのであ

る。(34)～(37)についても同様である。いずれも「そこそこ」の先行文脈あるいは後続文脈に話者にとって不都合な側面(「こじんまりした神社」「上位に昇格することはない」「濃い味を望んでいたのに)薄味」「少し疲れた顔をした若いサラリーマン」)がありつつも、別の側面から見ると「何とか肯定される」、いわば「許容できる」といった評価が「そこそこ」にあると考えられる⁵。接尾辞的用法「そこそこ」は、話者の設定する基準(数値)を「わずかに超える」ことを確認したが、程度副詞用法においては、話者の設定する「許容できる基準」を「わずかに超える」位置づけがなされる(許容のラインを大きく超えることはない)といえる。

なお、程度副詞用法「そこそこ」は、大半が上述した「(話者が納得できる基準をわずかに超えるという)許容」の意味として認められるが、中には(40)(41)のように話者にとってマイナスの評価と捉えられる事柄に対して用いられる用例や、(42)(43)のようにマイナスの語を修飾する用例も、出現率としては高くないものの存在する。(40)(41)に見られる「そこそこ」がマイナスの評価で使用されていると捉えられる用例は35例(5.0%)、(42)(43)に見られるマイナスの語を修飾する用例も11例(1.6%)見られた。

(40)クエ進行したいキャラ達が、あんまり習得が進んでなかったり装備もそこそこだったりしたのもあって、ある意味ちょうどいい緊張感と強さでしたねぇ。

(OY15_15403)

(41)お金に困っている人や、困ってはいなくてもそこそこの収入しかない人は、たいていの場合お金に動かされるままになっている。(OB5X_00197)

⁵ 程度副詞用法における「そこそこ」は、話題となる事柄について「不都合な側面」がありつつも「許容できる」ことを示すものであるため、「(不都合な側面) だが、そこそこ～だ」「そこそこ～だが、(不都合な側面)」といった逆接表現を文中に伴う用例が多く見られる。「そこそこ」を含む文中に現れる逆接表現について調査したところ、用例(35)に見られる「…だが、そこそこ～だ」の形は98例、用例(34)(37)に見られる「そこそこ～だが、…」の形は104例見られた。両者を合わせると202例となり、程度副詞用法全体の用例数(705例)の28.7%にあたる。また、前後の文も含めた逆接表現との共起も加えるとさらに割合は高くなりそうである(例えば、用例(36)は「そこそこ」が用いられる文の前文文末に「けどねぇ～」という逆接表現が見られる)。逆接表現の出やすさは、程度副詞用法「そこそこ」の「許容」の意味を支えるのに大きく関連すると思われるが、現段階の調査における「文中で逆接表現が使用される割合28.7%」が他の語と比較し有意に高いとは断定できないため、調査結果に触れるに留める。分析・考察は今後の課題としたい。また、「不都合な側面」は、必ずしも逆接表現を伴って明示されるとは限らないため、逆接表現を伴わない用例における「許容」の表れ方についての検討も進めていく必要がある。

(42) わずかですが、損を挽回し儲けてるひといます。大半は、大損して撤退するか、そこそこの損で撤退するかです。バブル期は株を持ってれば、勝手に上がりましたが、今はむしろ下がります (OC03_01868)

(43) 個人差はあると思いますが、そこそこ痛いですよ。我慢できないほどってわけではないですが。(OC09_02485)

(40)は、「そこそこ」の先行文脈に「あんまり習得が進んでいなかったり」とあることから、「装備もそこそこ」は話者にとって「肯定的には捉えられない程度」を指していると考えられる。(41)も「そこそこの収入しかない」という表現から、話者の収入が、肯定的に捉えられるほどのものではないといえる。どちらの用例においても甚だしく低い評価ではないものの、「話者が納得できる程度を超えている」とは判断しがたい。ただし、(41)では先に「お金に困っている人」を取り上げ、その段階と比較して一段上の収入レベルとして「そこそこの収入しかない人」を挙げている。(40)も、後続文脈に「ある意味ちょうどいい緊張感と強さ」であったとしていることから、「装備」のレベルは十分でなかったにしろ、最低限のレベルには達していたものと考えられる。「許容できる(ほど一定程度に高い)基準」が設けられる典型例とは違うものの、(40)(41)に類する用例にも「最低限の基準(明らかに許容できないほどではない一定の水準)」と呼べるような、低く見積もられた基準については「わずかに超える」という位置づけが存すると考えられる。

また、(42)は「損」、(43)は「痛い」というマイナスの語を修飾しており⁶、「そこそこ」がより否定的な意味で用いられているように見える。しかし、これらの用例においては「そこそこ」自体が話題となる事柄に対してマイナスの評価を付与しているのではなく、「修飾語の程度を規定する」機能が中心となって働いていると捉えるのが自然だろう(むしろ、(42)(43)の「そこそこ」は「損」や「痛み」のレベルをやや抑えているようにも感じられる)。例えば、(42)の場合は「大損」と比較したときの「それほど大きくはないが、ある一定の基準を超えた損」、(43)の場合は、「我慢できないほどの痛み」と比較したときの「それほど強くはないが、ある一定の基準を超えた痛み」を「そこそこ」で位置づけている。(40)(41)と同様に、(42)(43)のようなマイナスの評価語を修飾する用例も「示された基準」を「わずか

⁶ 程度副詞用法「そこそこ」が修飾するマイナスの評価語には、「損」「痛い」の他に、「悪い」「グロい」「面倒な」「危険な」「悩む」「おかしくなる」などが見られた(第2章・第3章参照)。品詞は限定されないが、いずれも他の程度副詞との共起も自然な「スケールを伴うタイプ」の語であるといえる。

に超える」という位置づけ方は共通してあり、「許容できないほどではない」という意味((42)であれば一応許容はできるほどの損、(43)であれば一応許容できる程度の痛み)をもつと考えられる。

以上より、程度副詞用法「そこそこ」は、「許容」という話者のプラスの評価が前提となり「その前提となる基準をわずかに超える」位置づけが行われる用例を典型としてもち、周辺のなものに「良くはないものの最低限度の基準はわずかに超える」ことを示す用例や、マイナスの修飾語(という基準)を「わずかに超える」位置づけを行う用例があることを確認した。話者の心内にある基準と比較し、それを「わずかに超える」位置づけを行うという点で、接尾辞的用法と程度副詞用法は共通の特徴をもつと考えられる。一方、接尾辞的用法においては「基準が明示的」であり、「是非の評価をもたずに、話者の『程度が小さい』という見方のみを表現する」のに対し、程度副詞用法では、「許容」という(主にプラスの)評価を前提とした基準が暗示的に(直接的な基準値として表現されずに)存するという点で違いがある。ただし、「～しかない」などの否定的な文脈と共起する場合やマイナスの評価語を修飾する場合は、「許容」の評価性が薄れ、「最低限のレベル」や「基準(マイナスの修飾語)」を「わずかに超える」という、より接尾辞的用法に近い機能をもつ(ただし、その場合も「何とか許容できる程度である」という意味は残る)。これらの用例は、プラスの評価で用いられる用例と比較し出現率が低いことから(程度副詞用法全用例のうち6.5%)、周辺の用例と考えられる。

4.まとめ

第3節で述べてきた各用法における「①対象領域」「②基準の明示性」「③基準(価値観)における位置づけ」「④評価(品定め)のあり様」の4つの観点について、次ページの表2にまとめる。

表2 各用法の特徴

	対象領域	基準の明示性	位置づけ	評価
名詞用法	場所	任意	基準範囲内または 基準範囲周辺	なし
状態副詞用法	時間	なし（暗示的）	話者にとって、 動作の行動時間が短い	なし
接尾辞的用法	数値で表現 可能な事柄	あり（数値が必須）	基準をわずかに超える ※基準は話者にとって 小さいものである	なし
程度副詞用法	量・程度・質	なし（暗示的）	基準をわずかに超える	許容

「対象領域」については、名詞用法では「場所」、状態副詞用法では「時間」に限定されるが、接尾辞的用法になると数値で表現可能な事柄は（偏りは認められるものの）基本的にはすべて対象にもつようになり、程度副詞用法では質的・程度的な事柄もとるなどさらに拡大する。この対象領域の拡大は、現代語の用例出現率の増加に比例しているように思われる。

「基準の明示性」については接尾辞的用法では必須の要件となるが、そのほかの用法においては、必須ではないか、暗示的である。ただし、暗示のされ方は用法ごとに異なる。名詞用法では、そもそも受け手に基準（場所）を特定させないことが意図されるのに対し、状態副詞用法では「通常想定される行動時間」を前提としている。典型的な程度副詞用法の場合は「許容」という評価の支えのもと、話者の基準を（明確でないものの）受け手に悟らせるように表現されている。「話者の心内基準を受け手が共有できていることが期待される」という面から見れば、状態副詞用法と程度副詞用法は「基準の明示性」の観点で共通の特徴をもつといえる。

「基準に対する位置づけ」に関しては、接尾辞的用法と程度副詞用法が「基準をわずかに超える」という点で共通している。ただし、「基準をわずかに超え」た結果に対する話者の捉え方は両者で異なる。接尾辞的用法の場合は、話者にとって「結果として導き出される数値が小さい（小ささに対するよし悪しの判断は存しない）」ことを表現する機能を担っている。一方、程度副詞用法の場合は「程度の小ささ」を示す機能よりも、「結果が許容できるものである」という「評価」が、「そこそこ」で表される中心的な意味である。接尾辞的用法と程度副詞用法は「話者独自の観点が介入し、基準が設定される」という点で、他の用法間よりも関連性が強く思われるが、「小さい」という事実認識の伝達を主としているのか、

「許容できる」という話者の感情に関わる評価の伝達を主としているのかという点で、意味的に対立している。

以上より、現代日本語において中心的な用法である程度副詞としての「そこそこ」の意味の特徴は、「許容」の評価ができる一定の基準が話者の心内にあることを前提に、その基準をわずかに超える位置づけを示すものであると考えられる。

「基準をわずかに超える」という位置づけ方は接尾辞的用法と連続的である。また、「示される語を（そうと認められる程度に）かろうじて上回る」という点は、状態副詞用法とも関連する。状態副詞用法は、主体の動作が短時間で済まされる様子を表すが、見方を変えると「ある名詞（動作）が、その名詞として成立する程度にかろうじて実施される」とも捉えられる。例えば、「食事もそこそこに出かける」であれば、「通常想定されるほど十分ではないが、一応『食事』として成立する程度にかろうじて行われる」との解釈が可能である。ここから、現代語「そこそこ」は「ある基準をわずかに（かろうじて）超える」語彙的意味を中核にもち、動作を表す名詞を伴う場合は状態副詞用法、数量を基準とする場合は接尾辞的用法、スケールをもつ語を修飾したり、事柄の程度量を規定する述語となったりする場合は程度副詞用法として用いられるといえる。程度副詞用法がもつ「許容」の〈評価性〉は、「そこそこ」の中核的意味である「基準をわずかに超える」という意味特性が「スケールをもつ語に対する修飾」として使用されることによって生じたものであろう。ただし、程度副詞用法が「ある一定基準を超えて悪い」というマイナス評価になりにくく、「許容される一定基準をわずかに超える」というプラス評価を中心にもつ要因については詳細を述べるに至らなかった。この点は、今後の課題としたい。

第9章 接続表現からみる「まずまず」「まあまあ」の違い

1.はじめに

第6章～第8章で、各語を1語ずつ取り上げ、それぞれの〈評価性〉の具体的な記述を試みた。「まずまず」には「妥当性」、「まあまあ」には「妥協」、「そこそこ」には「許容」の〈評価性〉があると確認したが、3語の中で特に「まずまず」と「まあまあ」は類似点が多い。そこで、本章では前章までの内容に補足する形で「まずまず」「まあまあ」が共起する接続表現に着目した分析から、両者の評価の出方の違いについて述べる。分析に移る前に、まずは再度「まずまず」「まあまあ」の共通点を確認しておく。

現代日本語で用いられる「まずまず」「まあまあ」は、下記(1)～(4)に見られるように、事態の程度を限定する用法をもつ ((1)～(4)はいずれも作例)。

- (1) 学生時代の成績は (まずまず／まあまあ) 良かった。
- (2) 新しく始めたスポーツを (まずまず／まあまあ) 頑張っている。
- (3) 初出場ながら (まずまず／まあまあ) の結果を残した。
- (4) 今月の売り上げは (まずまず／まあまあ) だ。

(1)は「学生時代の成績 (の良さ)」について、(2)は「新しく始めたスポーツの頑張り具合」について、(3)は「出場した大会の結果」について、(4)は「今月の売り上げ」について、「どの程度のレベルにあるのか」を「まずまず」「まあまあ」によって限定している。このときの「まずまず」「まあまあ」は、「極端に高くも低くもない、それなりの」といった程度を示していると考えられる。また、「まずまず」「まあまあ」は(1)のように静態述語を修飾する場合だけでなく、(2)のように動詞述語を修飾したり、(3)のように「の」を伴って名詞を修飾したり、「だ」を伴うなどして述語として働いたり、統語的な制約が小さいという特徴も一致している。このように「極端に高くも低くもない、それなりの」程度を表すという意味的にも、統語的にも非常に似た2語であるが、いずれも淘汰されることなく現代日本語として日常的に用いられている。しかし、管見の限り、「まずまず」「まあまあ」の2語を取り上げ、その違いや使い分けについて論じた研究は見当たらない。そこで、本章ではそれぞれの語の特徴を共起する接続表現の傾向から記述することを目的とする。

2.「まずまず」「まあまあ」に関する辞書記述の確認

前述の通り、「まずまず」「まあまあ」の両語を取り上げ、その違いを具体的に述べた先行研究は管見の限りない。そこで、本節では、「まずまず」「まあまあ」の評価性について具体的な言及が見られる『あいまい語辞典』、『基礎日本語辞典』、『現代副詞用法辞典』の語義記述に触れる。

以下に、「まずまず」「まあまあ」の評価性に関わると思われる辞書の語義記述を引用する。『あいまい語辞典』、『基礎日本語辞典』は「まあまあ」、『現代副詞用法辞典』は「まずまず」で立項されているものである（下線は筆者による）。

(5)『あいまい語辞典』

よく使われるのは、「調子はどう？／まあまあですね」「今日の試験どうだった？／まあまあ」といった類の「まあまあ」である。この類における「まあまあ」は「まずまず」や「ほどほど」に似ている。

「まあまあ」とは、十分とは言えないが、自らの限度を見極めれば、ある程度満足するべきところまでは来ている、といった感じである。

「まあまあ」には、「まっ、いいか」「まあ、こんなものか」と通じる、ほどほどの「達成感・自足感」と、「まだまだ」という「不満足感」が同居している。つまり、「まあまあ」は、ある程度の「満足感」と「不満足感」を同時に含む両義性を持っているのである。（後略）

(6)『基礎日本語辞典』

「まあまあ」は、その限界点に達して手放しで満足せず、不十分さを認めながらも、一応は満足する程度に達しているものと判断するとき用いる。決して十分ではないが、だめでもない、それでよしとすべき不完全な十分さ、不満ながらも認めてやらねばなるまいという、飛びきり上等ではないやや低めの評価である。「まずまず」に近い。

(7)『現代副詞用法辞典』

不完全ながら評価できる様子を表す。ややプラスイメージの語。（中略）完全に満足できる状態ではないが、最低の部分はクリアーしたという安堵の暗示を伴う。（中略）この「まずまず」は「まあまあ」に似ているが、「まあまあ」は感情や判断の直接の表明を抑制する様子を広く表し、好ましいものについて用いる場合には、積極的な

賞賛や評価をはばかりというニュアンスで、許容の暗示が強い。

- ? 弟は英語はできるが、国語はまずまずだ。
→ 弟は英語はできるが、国語はまあまあだ。
→ 弟は英語はできるし国語もまずまずだ。

(5)~(7)より、「まずまず」と「まあまあ」は類似の語として捉えられており、評価に関わる記述としては、「不完全」「不満足」という事態に対する話者のマイナスの見方と、「(ある程度の)満足感」「十分さ」「安堵感」という事態に対する話者のプラスの見方が示されている。ここから、「まずまず」「まあまあ」はプラスの認識とマイナスの認識が同居すると解釈されていることがわかる。また、(7)においては「まずまず」「まあまあ」の違いについての言及が見られる。挙げられている用例を見ると、「まずまず」は、前件のプラスの内容に逆接する形でマイナスの内容を示す場合(「弟は英語はできる^が、国語はまずまずだ」)は使用されにくいのに対し、「まあまあ」は自然に使用できる(「弟は英語はできる^が、国語はまあまあだ」)ことが示されている。逆に、前件のプラスの内容に並列(累加)する形でプラスの内容を示す場合は、「まずまず」において自然に用いられること(「弟は英語はできる^し、国語もまずまずだ」)も表されている。なお、(7)に言及はないものの、前件のプラスの内容に並列(累加)する形でプラスの内容を示す用例は、「まあまあ」においても散見される(用例(8)(9))。

(8)義姉さんは優しい^し、須美ちゃんの料理だってまあまあです。(LBm9_00076)

(9)夫婦喧嘩もせず、食べ物はおいしい^し、天気はまあまあだったし、途中娘はお腹痛がったけど元気になったし。(OY14_01747)

3. 「まずまず」「まあまあ」を分析する観点

以上より、先行研究においては、「まずまず」「まあまあ」の評価に関わる記述として「満足」「許容」「十分さ」といったプラスの要素と「不完全」「不満足」といったマイナスの要素が指摘されていることを確認した。さらに、プラスの前件要素に累加する形でプラスの認識(「満足感」など)を示す場合には「まずまず」(と、先行研究には記載がないものの「まあまあ」も)が自然に使用されるのに対し、プラスの前件要素に逆接する形でマイナスの認識(不満足、不完全など)を示す場合には「まあまあ」が自然に使用され、「まずまず」は

使用されにくいことを確認してきた。

このような評価は、「まずまず」「まあまあ」が現れる前後の内容によって、明示的になると考えられる。実際に、(7)～(9)における用例では、逆接や累加の接続表現を元に、「まずまず」「まあまあ」の評価を探り、使用のされやすさについて確認してきた。しかし、評価的な側面そのものについての部分的な言及は複数見られるものの、対象語の前後に現れる内容に触れて、使用制限や評価の表れ方の違いについて述べたものは、(7)にわずかに見られるのみである。

本章では、「まずまず」「まあまあ」に存する評価的な側面を、対象語の前後に現れる「接続表現」の出現傾向を分析することで明らかにしていく。上述の通り、(特に対象語の前件がプラスの場合)逆接表現を伴ったときに「まずまず」と「まあまあ」で異なる結果が生まれる可能性がある。また、「プラスの評価とマイナスの評価が同居する」という先行研究における記述も、逆接表現の出方によって、より詳しく論ずることが可能になると推測される。

接続表現に着目した分類の分析・考察では、まず「まずまず」「まあまあ」の用例について、接続表現の出現傾向を概観する。次に、接続表現が無い場合、すなわち前件や後件と比較した形での評価が表れないタイプの用例に対する両者の傾向の違いについて言及する。そして、並列(累加)の接続表現をとる用例に対する分析を行い、最後に逆接表現を伴う用例を詳しく見ていく。

4.調査方法

BCCWJ を用いて語彙素読み「マズマズ」「マアマア」で用例を採取した結果、「まずまず」306 例、「まあまあ」651 例の用例を得た。その中から、程度を表す用法以外の用例を除いた結果¹、対象となる用例は、「まずまず」が 269 例、「まあまあ」が 419 例となった。それらの全用例について、対象語が現れる文中における接続表現を(10)に表す 5 タイプに分類した。それぞれのタイプに当てはまる具体的な接続表現とともに列挙する(／より後ろは文頭に現れるいわゆる接続詞である²)。

¹ 「まずまず」においては、「この空模様であればまずまず雨の心配はない」といった話者の確信を表す場合に用いる文全体を修飾する用法、「まあまあ」においては「まあまあ、大きくなって!」、「まあまあ、そう怒らないで」に類する、感動詞用法については、本章の調査から除外した。

² 本章で扱う「接続表現」は「まずまず」「まあまあ」を含む文中のみを対象範囲として見ている。そのため、例えば、「ここ数日あまり寝てなかったので、私は途中ウトウトしてしまった。でも話自体はまあ

- (10)A 順接系…カラ、タラ、テハ、ナラ、ニハ、ノデ、バ、レバ／ナゼナラ
 B 逆接系…アレド、ガ、ケド、ケレド (モ)、ダケド、テモ、トモ、ナガラ (モ)、
 ノニ、マデモ、モノノ／ケレド、シカシ、デスガ、ニモカカワラズ、
 C 並列系…シ、テ、デ、ト、連用形、読点
 D 前置き系…ガ、ケド、ケレドモ
 E 無し… (接続表現が現れない用例)

また、接続表現が現れる位置について、「前件と対象語が現れる節をつなぐ接続表現」と「対象語が現れる節と後件をつなぐ接続表現」を分けて調査した。例えば(11)の場合、「前件と対象語が現れる節をつなぐ接続表現」は「逆接系ケド」、「対象語が現れる節と後件をつなぐ接続表現」は「順接系カラ」といった具合である。

- (11)われわれの家はそんなに豊かじゃないけど生活はまあまあだから、ゆっくり休んで生活を楽しんだ方がよくないかと言ったら、(LBk3_00042)

5.調査結果

5.1.「まずまず」「まあまあ」の用例における接続表現の出現率傾向

前節の分類方法に従って「前件と対象語が現れる節をつなぐ接続表現」と「対象語が現れる節と後件をつなぐ接続表現」を分類すると、それぞれ表1・表2の結果を得た。なお、(10)による分類が困難な用例は「未分類」に含めている³。

まあ面白かった。(OY14_01595)」といった用例の場合は、「前件と対象語が現れる節をつなぐ接続表現」として「逆接系デモ」をカウントするが、「ブレンドコーヒーの味はまあまあ。だが、ホットケーキの立派なものには素人のぼくでも驚いた。(LBm9_00143)」といった用例の場合には「対象語が現れる節と後件をつなぐ接続表現」としては「ダガ」を含まない(「対象語が現れる節と後件をつなぐ接続表現」は「無し」と分類する)。

³ 例えば「上辺は低位に甘んじても、下辺、左辺の大場に打てたので、まずまずです。(LBf7_00004)」といった用例は、前件と「まずまず」をつなぐ接続表現が「条件系テモ」と「順接系ノデ」の2種類存在することになる。このような対象語の節に対する接続表現を複数持つタイプの用例は、今回の調査では「未分類」とした。

表1 前件に対する接続表現の種類					表2 後件に対する接続表現の種類				
	まずまず		まあまあ			まずまず		まあまあ	
	用例数	出現率	用例数	出現率		用例数	出現率	用例数	出現率
A：順接系	31	11.5%	42	10.0%	A：順接系	9	3.3%	20	4.8%
B：逆接系	42	15.6%	44	10.5%	B：逆接系	34	12.6%	65	15.5%
C：並列系	62	23.0%	46	11.0%	C：並列系	35	13.0%	44	10.5%
D：前置き系	7	2.6%	18	4.3%	D：前置き系	1	0.4%	4	1.0%
E：無し	122	45.4%	267	63.7%	E：無し	190	70.6%	285	68.0%
未分類	5	1.9%	2	0.5%	未分類	0	0.0%	1	0.2%
合計	269	100.0%	419	100.0%	合計	269	100.0%	419	100.0%

表1・2より、「A：順接系」においては、「まずまず」「まあまあ」とともに、対象語の後に現れる用例より、対象語の前に現れる用例が多いという特徴が一致している。

(12)株価の下落と相まって崩壊寸前まで追い込まれたことを考えれば、政府の対応はまずまずの成果を上げたといつてよいであろう。(PM43_00037)

(13)トータル十二万円ほどの利益になりましたので、こちらはまずまず成功でしたね。(OY14_50066)

(14)結果的には、みじん切りを炒めるタイミングが速過ぎたのと、唐辛子を入れ過ぎて辛くなり、事後苦しい思いをしている点を除けば、まあまあ上出来ではないか。(OY14_38122)

(15)詰め物をたくさん入れているので、まあまあ静かである。(PB25_00026)

(12)～(15)は、いずれも対象語の前に「順接系」の接続表現が用いられる場合である。(12)、(14)はそれぞれ「背景にある苦しい状況」や「調理過程におけるいくつかのミス」が前件に示されており、それらを話者が総合的に判断した結果が「まずまず」「まあまあ」で表されている。(13)、(15)の場合は「トータル十二万円ほどの利益になりました」、「詰め物をたくさん入れている」といった結果に至るまでの判断の理由が示された上で「まずまず」「まあまあ」が用いられている。対象語の前件に「順接系」の接続表現が現れる用例からは、「まずまず」「まあまあ」が、「判断に至るまでの話者の状況分析が踏まえられた上での『一定の満足感・許容感』」を示しているといえる。一方で、(16)のような対象語の後件に順接系の接続表現が現れる用例は少ない。

(16)八百八十三系の一部で先行試験をしてまあまあの結果が出ているので、本格的に
今後は活用していくことになるでしょう。(OY15_03399)

ここから「まずまず」「まあまあ」ともに、主節(用例(16))でいうところの「今後は活用していくことになるでしょう」といった結論部分)に対する根拠や分析的観点の明示といった役割は担いにくいと考えられる。

「A:順接系」と比較すると、「B:逆接系」「C:並列系」「E:接続表現無し」の用例は、「まずまず」「まあまあ」による出現率の違いが大きい。「順接系」においては、「まずまず」「まあまあ」共通の特徴を見てきたが、B、C、Eに分類した用例においては、両者の違いに着目して論じる。

5.2.接続表現を伴わない用例について

表1より、「対象語の前に接続表現を伴わない用例」の出現率は「まずまず」が45.4%と半数以下なのに対し、「まあまあ」は63.7%にのぼっている。ここに分類される用例のうち、「まあまあ」に特徴的に現れる「応答」としての用例と「中間的な評価」としての用例を挙げながら、分析を加える。

(17)麻也子はこの問いにふさわしく、語尾を伸ばすようにして答える。「まあまあって
いうところかしら」「まあまあ、ってどういうこと」野村はベルリッツスクールで、
英語の意味を尋ねる生徒のように首を傾げた。(OB5X_00031)

(18)あんまり綺麗な人だからびっくりしちゃった。私が一度訊いたとき『まあまあかな』
なんて浩さん言ってたくせにさ (LBr9_00215)

(17)、(18)は何かしらの質問に対して「まあまあ」が応答として用いられたものの、その程度(および評価)が受け手に正確に伝わっていないことが示されている用例である。(17)、(18)のような「質問に対する応答」として用いられる「まあまあ」は32例に及ぶ⁴。一方、「まずまず」はわずか2例であり、その場合も「まずまず」の判断が下されるに至る状況説

⁴ ただし、32例全てが(17)(18)のように「まあまあ」の判断材料がない示されないものというわけではない。「まずまず」の用例として挙げた(19)のように、そのような判断に至る根拠となる状況や条件が示されている用例も見られる。

明があり、受け手が事態の程度をある程度正確に把握できるものである（用例(19)）。

(19)「わざわざ帰ってもらって申し訳ないが…。ところでパリはどうかね?」「機構の方は、まずまずといったところですね。養成所もちゃんと機能してますよ。しかし博士、そんな話をするために、私を呼んだわけじゃないでしょう」(LBi7_00041)

また、以下のように、段階的な項目の中間評価として用いられる用例が多いのも「まあまあ」の特徴である。

(20)窓口の対応について、どう感じられましたか。親切 五十三% まあまあ 四十二% 感じ悪い 5% (OP47_00003)

(21)土壌動物をAグループ5：良い環境にいるもの（5点）Bグループ3：まあまあの環境（3点）Cグループ1：悪化しても生息できる（1点）の3つのグループに分け点数をつけます。(OY11_07560)

(20)、(21)の「評価性」はプラス（「親切」「良い環境」）でもマイナス（「感じ悪い」「（環境が）悪化（している）」）でもなく、「ちょうど中間」を表すものといえる。これに類する用例は「まずまず」に見られないのに対し⁵、「まあまあ」では9例見られた。

以上のように、対象語の前に接続表現を伴わない「まあまあ」は、話者がその良し悪しを（意図的か無意識化は別として）明示しない用例や、プラス・マイナスの判断に偏らない中間的な評価としての用例が使用されることを確認した。

以下、(22)～(24)に見るように、文中に接続表現がなくとも、「まずまず」「まあまあ」に至る話者の判断が前後の文によって読みとれるものもある。しかし、「まあまあ」のみに見られる(17)(18)、(20)(21)タイプの用例が、出現率の異なりを生んでいるとはいえるだろう。

⁵ ただし、「まずまず」においても「甘谷の戸数は三十余家にすぎないが、百二、三十歳を長寿と呼び、百歳あまりというのがまずまずで、七、八十歳で死ぬと「大夭」（早死）だといわれた。(LBf9_00197)」のように、並列表現（この場合は読点）を伴いながら段階的評価の1つとして用いられているものは数例見られた。これは「段階的な項目の中間評価として用いられる用例」に近いが、「まあまあ」が「良くも悪くもない中間」を表すのに対し（「点数」が明記されている点からもそれが明らかである）、「まずまず」は「飛び抜けて良くはないが、肯定的に捉えられる」といった話者の一定のプラス評価がうかがえそうである。

- (22)探し回った挙げ句、まずまずの部屋を見付けた。二人にとって充分だ。小さい台所も付いている。風呂場は付いていなかったが。(LBh9_00037)
- (23)その後は、とにかく肩を回すことだけを意識してプレー。結果はまずまず。飛距離も出るようになり、レギュラーティから打っている時とそう変わらない所まで飛ぶことに。(OY15_07838)
- (24)枚方市は京阪沿いはまあまあ都会です。必要最低限、なんでも市内でそろいます。(OC13_02797)

5.3.並列系接続表現をとる用例について

「接続表現無し」の次に出現率の差が大きいのは「並列系」の接続表現を伴う用例である。表1より、「まずまず」は「まあまあ」に比べ、出現率が2倍以上となっている。

- (25)音が静か[□]印刷結果もまずまずきれいである。(OB3X_00117)
- (26)生れて初めてスキーを履いた時、歩く度に転んでいた私も、教育を受けるにつれ、次第に歩けるようになり[□]、やがて直滑降もまずまずとなった。(OW1X_00544)
- (27)確かにMGよりは楽に乗り込めた[□]、エンジン音もまずまず軽快だった。(PB39_00292)

(25)～(27)はいずれも、「音が静か」「次第に歩けるようになり」「楽に乗り込めた」などの話者にとって好ましい評価に並列(累加)する形で「印刷結果」や「直滑降」や「エンジン音」が「まずまず」だと程度づけられている。このときの「まずまず」は「話者の(ある程度の)満足感」を示していると読むのが自然だと思われる。なお、「*弟は英語は苦手だし、国語もまずまずだ」などといった「マイナス(不満足、不十分)の要素」に並列(累加)する形での「まずまず」の用例は見られない。これは「まあまあ」にも同様のことがいえる。また出現率は下がるものの、(28)に示すように「まあまあ」にも「好ましい評価」に並列(累加)する形で「話者の(ある程度の)満足感」を示す用例は見られる。

- (28)義姉さんは優しい[□]、須美ちゃんの料理だってまあまあです。(8再掲)

以上より、並列の接続表現を伴う用例は、話者にとって好ましい評価に累加する形で「(ある程度の)満足感」を示す用例であり、その特徴は「まずまず」「まあまあ」で一致するものの、「まずまず」において、より使用されやすいことを述べた。

5.4.逆接表現出現位置による「まずまず」「まあまあ」の違い

表1、表2をそれぞれ別で見ると、逆接表現の出現率について「まずまず」「まあまあ」には大きな差がないように見える。しかし、逆接表現が対象語の「前件」に出やすいのか、「後件」に出やすいのかを見ると、両者は異なる特徴をもつ。以下、表3で逆接表現のみを取り出した場合の、2語の出現率を確認する。

	まずまず		まあまあ	
	用例数	出現率	用例数	出現率
前件	42	55.3%	44	40.4%
後件	34	44.7%	65	59.6%
合計	76	100.0%	109	100.0%

表3より、対象語を含む文に逆接表現が現れる用例を取り出した結果、「まずまず」は対象語の前に多く出現するのに対し、「まあまあ」は対象語の後に多く出現することがわかる。この違いは、事態における話者の「最終判断がいかにかに下されるか」の異なりを表すことにつながるため、「まずまず」「まあまあ」の「評価性」の違いを見るのに重要だと考えられる。まずは、逆接表現が「まずまず」の後に続く用例を見ていく。

(29)ハイスピードで滑った場合には、若干、スキー板がずれるような感じがありました
が、全体的なバランスはまずまずだと思います。(PM21_01297)

(30)極端に狭いが、いちおうマンション風3LDKの三人部屋で陽当たりもまずまず。
 バス・トイレ完備。同じ階には、親友のまりあの部屋もある。(LBp9_00018)

(31)リンゴはあんまり消費できなかったけど、まずまずの出来(味はおいしい)
 (OY03_05310)

(29)～(31)はいずれも、「まずまず」の前件で「若干、スキー板がずれるような感じがありました」「極端に狭い」「リンゴはあまり消費できなかった」といった話者にとって好ましくない事態が示され、「まずまず」で「全体的なバランス」「陽あたり」「出来(味)」に対する「満足感」「納得感」を示している。話者が話題としている事態に、「不満足感」を生む要素はあるものの、最終的には「満足」しているといった場合に「まずまず」が使用されていることがわかる。

一方、「まあまあ」は下記(32)～(34)に見られるように逆接表現が後に現れる用例のほ
うが出現率が高い。

(32)繊維に抗菌剤を特殊加工するという特徴を持った商品で、発売当初の出だしはまあ
まあ好調であったが、その後は長い間鳴かず飛ばずの状態が続いていた。
(LBf6_00003)

(33)オールカラーで芸術的クオリティはまあまあだが、内容が本の体裁同様薄っぺら
いとの意見もある。(LBq2_00095)

(34)客はまあまあ入った黒字公演だったんですが、批評はおもわしくなかった。
(LB15_00051)

(32)～(34)はいずれも「まあまあ」で「話者にとって好ましい点」を述べていることがわ
かる。(29)は「発売当初の商品の売り上げ」が、(30)は「芸術的クオリティ」が(31)は「客
の入り」がそれぞれ話者にとって満足できるほど程度が高いことを示している。しかし、そ
の後の主節で「(出だしを除いて)長い間鳴かず飛ばずの状態」「内容が本の体裁同様薄っぺ
らい」「批評はおもわしくなかった」といったネガティブな要素が示されている。ここから、
(32)～(34)に見られるタイプの用例は、対象語(この場合「まあまあ」)で、事態の好まし
い側面が述べられつつも、最終的には話者の不満足感が表れたものだといえる。

ここから、「まずまず」「まあまあ」は、どちらも「プラスの要素とマイナスの要素が入り
混じる事態の程度を表すのに用いられる」という点においては共通していると考えられる。
その中で「話者の最終的な評価や判断がプラス(満足感)に偏る」のが「まずまず」で、「話
者の最終的な評価や判断がマイナス(不満感)に偏る」のが「まあまあ」であるといえる。
こと逆接表現を伴う用例においては、「まずまず」「まあまあ」はその語自体に「満足感と不
満足感が同居している」というよりも、「プラスの要素とマイナスの要素が両存する内容の

プラスの側面を示す」ときに使用されるのだと考える方が自然である。そして、その「プラスの側面」が「マイナスの側面」を上回る場合（最終的にプラスに偏る場合）は「まずまず」が用いられやすく、「プラスの側面」が「マイナスの側面」を下回る（最終的にマイナスに偏る場合）は「まあまあ」が使われやすいのである。

ただし、用例数としては多くないものの、「プラスの要素とマイナスの要素が両存する内容のマイナス側面を示す」場合に「まあまあ」が用いられる用例もいくつか見られた。

- (35)つまり、いまはまあまあだけれども、そのうちになんとか一人前になるだろう、といった調子です。(OY15_12241)
- (36)1つ百八十円で、味自体はまあまあというところすが、なんともその大きさが半端ではありません。(PB46_00059)
- (37)実力はまあまあのレベルなのに組み分けで得するチームがあったり、成績は抜群なのに予選リーグのグループが決勝トーナメント並みの戦いを強いられることになったり…。(PB27_00122)

(35)は後件の「一人前」と比較して、現在は「そのレベルに達していない低い程度」を「まあまあ」で示している。(36)(37)は、「悪い点」と言い切るほどマイナスの要素が強いとはいえないが、いずれも「半端ではない」「組み分けで得する」と比較すると、程度が知れている、不十分であるといったことを示すのに「まあまあ」を用いている。「まずまず」においては、以下に示す(38)のみ、「約百三十マイルの連続走行も可能」というプラスの側面と比較して「最高時速がやや低い程度（話者にとって不満感が残る程度）にとどまる」ことを示すのに用いられているが、それ以外の用例は全て「プラスの側面」を表すものである。

- (38)さすがに空気が動力源ですから、最高時速は約四十マイル（約六十四 k m）と、まずまずのスピード感ですけど、約百三十マイル（約二百九 k m）の連続走行も可能になっているとのことです。(OY15_11785)

以上、逆接表現を伴う用例を観察した結果、「まずまず」「まあまあ」ともに、「プラスとマイナスの要素が両存する事態のプラスの側面を示す」場合に多く用いられ、話者の最終的な評価がプラスに偏る場合は「まずまず」が、マイナスに偏る場合は「まあまあ」が用いら

れやすいことがわかった。また、「まあまあ」においては「(強力な) プラスの要素に対して、やや程度が劣る側面」を表現するときに用いられる場合が散見されることを確認した。

5.5.「まあまあ」がマイナスの語を修飾する用例について

「まあまあ」が「(強力な) プラスの要素に対して、やや程度が劣る側面」を表しうることに関連してか、「まあまあ」には以下に示すような「マイナスの語を修飾する用例」が見られた。

(39)昔はソビエトのモスクワの市民というのは、ダーチャという、まあまあ粗末なものでしたけれども、それぞれちょっと出掛けていく別荘というのをみんな持っていましたね。(OM66_00001)

(40)6 k までの4 k 超は人の後ろでレースを展開。5 k 十八分五十三秒くらいだったがまあまあつらい。(OY15_21519)

(39)の「粗末」、(40)の「つらい」は明らかにマイナスの要素であり、「まあまあ」が「満足感」などの肯定的な評価を表しているとは考えづらい⁶。このように、明らかにマイナスの語を修飾する用例は「まずまず」には1例も見られない。(35)～(37)で「高いレベルと比較する形で(相対的に)低いレベルに留まるさま」について「まあまあ」が使用できることと合わせて考えても、「まずまず」と比較し「まあまあ」は使用範囲、あるいは評価できる範囲が広い(不満足感、不十分さが中心的に表れる場面での使用も可能)といえる。

6.まとめ

本章では、「まずまず」「まあまあ」について、接続表現に着目しながら、それぞれの評価の出方を具体的に記述することを目指してきた。まず、5.1.において「まずまず」「まあまあ」における接続表現の出現傾向を概観し、「順接系」の接続表現を伴う場合は「まずまず」「まあまあ」ともに「判断に至るまでの話者の状況分析が踏まえられた上での『一定の満足感・

⁶ ただし、「粗末さ」や「つらさ」が話者にとって「何とか我慢できるレベルに留まる」といった解釈は可能である。(39)は、後件に「別荘を持っている」という事態に対するプラスの側面に対する言及があることから、「まあまあ粗末」は「話者にとって満足できるほど良くはないものの、我慢できるレベルの」といった不十分さと受容の同居を認める読み方もできそうである。

許容感』が示されることを述べた。次に 5.2. で、主として対象語の前に「接続表現がない」用例を取り上げ、「まあまあ」には「話者が評価（それを良しと捉えているかどうか）」を明示しない用例や、段階的評価の中間を表す用例（つまり、話者にとって評価がプラスでもマイナスでもない用例）など、「まずまず」には見られない用例が存することを指摘した。5.3. では「並列系」について取り上げ、「まあまあ」に比べ「まずまず」のほうが前件に累加する、あるいは後件に累加していく形で「プラスの要素を重ねる」用例が多くみられることを確認した。そして、5.4. で「逆接系」の接続表現を伴う用例について、その出現位置（対象語の前件に現れるか後件に現れるか）の取りやすさの違いを述べた。逆接表現を伴う用例は「まずまず」「まあまあ」ともに「プラスとマイナスの要素が両存する内容において、プラスの側面を示す」場合に多く用いられるが、話題とされている事柄の最終的な評価がプラスに偏る場合は「まずまず」が、マイナスに偏る場合は「まあまあ」が用いられやすいことを示した。また、「まあまあ」においては「(強力な) プラスの要素に対して、やや程度が劣る側面」を表現するとき用いられる場合が散見されることを確認し、それに関連して 5.5. では「まあまあ」にのみマイナスの評価語を修飾する用例を持つことについて触れた。

以上より、「まずまず」は話題としている事態に対して（時としてマイナスの要素を含みつつも）、話者の「(ある程度の) 満足感」というプラスの要素が中心として現れることを明らかにした。「まあまあ」も「まずまず」同様に、話者の「(ある程度の) 満足感」を示す用例をもつが、逆接表現を伴う用例においては、後件で示される事態に対する話者の最終評価がマイナスに偏る例が多く、その「満足感」が相対的にやや低められる傾向があると考えられる。また、接続表現がない場合は「評価を受け手に正確に伝えない用例」や「段階的評価の中間を表す用例」が、逆接表現を伴う場合は「(相対的に) マイナスの要素（不満足、不十分）を示す用例」が見られることから、「まあまあ」においては、話者の「満足感、納得感」は「まずまず」ほど比重が大きくないことも明らかとなった。一部、傾向を示すに留まった点に関しては、より精緻な用例分析が求められる。

終章 本研究のまとめと今後の課題

1. 本論のまとめ

本研究では、中程度を表す程度副詞「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」を取り上げ、3語がもつ〈評価性〉を明らかにすることを目的として、考察を進めた。

まず【第I部】にあたる第1章から第5章では、統語的特徴別の比較検討を通して3語の相対的な傾向について確認した。傾向の違いとして注目すべきは「示しうる程度の範囲」と「話者の評価判断の介入度」である。

「示しうる程度の範囲」については、「まずまず」がもっとも限定的であり、「まあまあ」は「まずまず」がカバーする範囲をややマイナス評価に拡大した範囲について、表すことが可能である。最も示しうる範囲が広いのは「そこそこ」であり、マイナスと判断される低い程度についても表現できる。また、程度の限定の仕方については、「まずまず」、「そこそこ」に比較し、「まあまあ」は緩やかである（明確に限定せず、あいまいである用例が多い）。

「話者の評価判断の介入度」については、3語の中では「そこそこ」が最も小さく、事態に対する話者の判断が伴いにくいのに対し、「まずまず」には「積極的な評価」が、「まあまあ」には良し悪しが明確でない「微妙な判断」の意思表示がされうることを確認した。

【第II部】では各語の程度副詞用法以外の用法との関わりを元に、各語が独自にもつ〈評価性〉の具体的な記述を試みた。

第6章では「まずまず」に焦点をあてた。「まずまず」は程度副詞用法が確立する以前に、文全体に係り序列の筆頭であることを示す「序列性」を伴う用法があることを確認した。その「序列性」に内包される「様々考えられる事柄のうち、最も妥当であると判断できる事柄を選択して示す」といった「妥当性」に基盤が移り、「話者の判断の妥当性」や「話者の判断による物事の程度の妥当性」を示す程度副詞用法が運用されるようになったことを示唆した。そして、程度副詞用法における「まずまず」は「話者が妥当とするレベルや期待値に即していること」を表す「妥当性」を〈評価性〉としてもつことを主張した。

第7章では、「まあまあ」について程度副詞以外の用法との関連を見ながら具体的な〈評価性〉の記述を試みた。「程度副詞用法」の「まあまあ」は、「副詞的用法」の「(不足部分を) 大まかに見ておよそ後続文の状態であると括る機能」と、対人的に用いられ相手への働

きかけを表す「感動詞促し用法」の「ネガティブな言動を抑制する機能」の要素が引き継がれ、「理想と実態の間にある不足部分を大目に見て話者自身の思考に折り合いをつける」という「妥協」の〈評価性〉が認められると結論づけた。

第8章では「そこそこ」を取り上げ、「接尾辞的用法」の「基準をわずかに超える」という位置づけ方と、「状態副詞用法」の「ある名詞（動作）が、その名詞として成立する程度にかろうじて（短時間で）実施される」という意味特徴が「程度副詞用法」と連続的であることを指摘した。「接尾辞的用法」および「状態副詞用法」の特徴から、「そこそこ」は「ある基準をわずかに（かろうじて）超える」という語彙的意味をもち、この特性が「スケールをもつ語に対する修飾」として使用されることによって生じたのが程度副詞用法であると捉えた。さらに、程度副詞用法「そこそこ」は「スケールをもつ語の状態をかろうじて満たす」ことを示すことから、その〈評価性〉の主眼が「許容」にあると述べた。

第9章では、3語の中で評価性に関する諸特性に近い「まずまず」と「まあまあ」の2語を取り上げ、接続表現に着目しながら、両者の〈評価性〉の違いをより具体的に記述することを目指した。その結果、「まずまず」は話題としている事態に対して（時としてマイナスの要素を含みつつも）、話者の「(ある程度の) 満足感」というプラスの要素が中心として現れることを明らかにした。「まあまあ」も「まずまず」と同様に、話者の「(ある程度の) 満足感」を示す用例を持つが、逆接表現を伴う用例においては、後件で示される事態に対する話者の最終評価がマイナスに偏る例が多く、その「満足感」が相対的にやや低められる傾向があることを示した。

第9章で示した傾向は、「まずまず」が「話者が妥当とするレベルや期待値に即していること」を示す「妥当性」の〈評価性〉をもつ点と、「まあまあ」が「理想と実態の間にある不足部分を大目に見て話者自身の思考に折り合いをつける」という「妥協」の〈評価性〉をもつ点に合致する（第6章・第7章参照）。また、【第I部】で指摘した、「まずまず」に比べ「まあまあ」は「示しうる範囲」がマイナス評価側に拡大傾向にあるという点や「まあまあ」が「まずまず」と比較し程度の限定の仕方が緩やかで、話者の判断があいまいであるという点とも矛盾しない。

2.各語における話者の想定と結果の対応関係

上記の「本論のまとめ」を踏まえ、3語の〈評価性〉の表れ方について整理する。本研究では、程度副詞における〈評価性〉について次のように定義した。

- (1) 評価性：話者の想定を基準としたとき、事態の結果（ありよう）がどこに位置づけられ、話者がそれをどのような態度で受け止めているかを表す性質

〈評価性〉の内実は、基準となる「話者の想定」と「事態の結果」の位置関係、それに対する話者の受け止めによって定められる。本研究では、「まずまず」に「妥当性」、「まあまあ」に「妥協」、「そこそこ」に「許容」の〈評価性〉があると述べたが、その〈評価性〉が表れるに至る「話者の想定」および「事態の結果」の対応関係はいかようであろうか。各語について、図示した上でまとめたい。

低水準	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	高水準
						話者の想定						
						事態の結果						

図1 「まずまず」における話者の想定と事態の結果の対応関係

低水準	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	高水準
							話者の想定					
					事態の結果							

図2 「まあまあ」における話者の想定と事態の結果の対応関係

低水準	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	高水準
			話者の想定									
			事態の結果									

図3 「そこそこ」における話者の想定と事態の結果の対応関係

「まずまず」では、「およそこの程度は見込めるだろう」という予想が「話者の想定」として存在し、「事態の結果」がその想定に即しており、「予想を超えてはこないが納得できる」とした受け止めがなされる。それが、「まずまず」の〈評価性〉である「妥当性」の内実だと考えられる。

「まあまあ」では、「話者の想定」がやや高めに設定され（これを第7章では「理想」と表現した）、事態の結果がそれにやや及ばない状況である場合に使用される。想定と実態に差があるために、話者の受け止め方は「まずまず」に比べ、やや消極的になる。しか

し、不足点について大目に見て不満感を抑制しようという働きが「まあまあ」にあるため、〈評価性〉の内実は「妥協」と捉えられる。

「そこそこ」は「話者の想定」が「最低限」とも呼べる低い程度である場合にも用いられる。「事態の結果」としては「基準をкаろうじて超える」状態にあるため、「話者の想定」と「事態の結果」はおよそ合致している場合に用いられるといえよう。ただし、そもそもの想定が「期待」や「理想」といった高い基準にないため、話者の受け止め方としては「最低限の想定は何とか満たしている」といった程度に留まり、その〈評価性〉の本質は「許容」となる。

図1～図3の通り、3語はいずれも「事態の結果」が中程度であるときの使用が可能である。しかし、前提としている「話者の想定（基準）」が異なるため、結果に対する話者の受け止め方が異なり、その違いが各語独自の〈評価性〉につながる。

本研究では、3語が共起する語のタイプ等の比較検討および、各語の程度副詞用法以外の用法との関連を中心に、それぞれの〈評価性〉を考察してきた。結論として、「まずまず」には「妥当性」の〈評価性〉が、「まあまあ」には「妥協」の〈評価性〉が、「そこそこ」には「許容」の〈評価性〉が認められることを示した。

3.今後の課題

本研究では、中程度を表す副詞を複数取り上げ比較検討し、語義を詳しく論じることを目的の中心として考察してきた。対象語とした「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の独自性を〈評価性〉の観点から具体的に記述できた点で、その目的は一定程度達成されたものとする。

ただし、「3語がいずれも畳語形式である」という点を対象語選択の理由に挙げておきながら、単独形式との関わりについては「まあ」と「まあまあ」で一部触れるにとどまり、「まず」と「まずまず」、「そこ」と「そこそこ」については考察に組み込めなかった点が課題として残る。特に「まずまず」においては、(2)～(4)のように物事の「初め」を表す語を修飾する用例が複数見られ、「最初に、第一に」を表す副詞「まず」との関連をうかがわせる。

(2) 苦悩のシーズンが続いたが、さすがはオリンピックイヤー、今季はまずまずの滑り出し。(PM21_00102)

(3)演出などが自ずと目に入るわけですが、今回はまずまずの出だしといってもいいんじゃないでしょうか。(OY15_10536)

(4)全国的に激しい渋滞はみられず、各社とも「まずまずの出足」と評価した。(毎日新聞)(OY14_50460)

「まずまずの折り返し」や「まずまずのラストスパート」など、物事の中盤から終盤を想起させる語と共起する用例が見られないことも踏まえると、「まずまず」の単独形式「まず」との関連について考察の必要があると考える。

また、各語が評価する対象は何なのか、誰(どこ)にむけた評価なのかを明らかにしていく作業も必要であると考え。鈴木(2011)は「そこそこ」について「語彙のもつ肯定的意味を限定することで謙遜の意を表す、その《自賛》の程度を抑制する」機能があると述べている。例えば、以下の(5)の用例について、「とても」などの高程度を表す副詞が修飾する場合や程度副詞を用いない場合は《自賛》となるが、「そこそこ」を用いることによって《自賛》の程度が抑制されると述べている。

(5)私は隣町にある、そこそこ風名な洋食屋の娘だった。どのくらいかと言うと、観光のガイドブックにはいつでも載るし、家族でちょっと外食しようか、とか、独身サラリーマンが今日はちょっと奮発して外でごはんを食べて帰るか、でもフランス料理程奮発したくないな、というような時に寄っていくような感じの店だった。(鈴木 2011;pp84.(1)より引用。下線は筆者による。)

鈴木(2011)の程度が限定されることによって《自賛》が抑制されるという主張は「まずまず」や「まあまあ」にも同様に当てはめられることから、「そこそこ」が独自にもつ機能ではなく「中程度を表す」機能をもつ程度副詞の運用の結果であると考え。一方で、「何に対する評価であるのか」という観点、本研究で述べてきた〈評価性〉をより精緻に検討するのに必要であると考え。【第I部】で行った3語の比較検討では、「まあまあ」については「自己評価」の用例が多いことに触れた。それに対し、「そこそこ」の場合は、自分や身内と関係のないものについての評価も多い(ただし、(5)の場合が「自己評価」にあたるように、「そこそこ」において「自己評価」の用例が少ないとは言い切れない)。「《自賛》の抑制」のような配慮的機能は語用論的問題として捉えることもできる

が、程度副詞の種類によって評価対象の傾向が異なる可能性があり、それが〈評価性〉と関わることも考えられる。例えば、自分や身内ではない他者について評価する場合、「妥当性」を示す「まずまず」と比較し、「理想に到達していない」ことを想起させる「まあまあ」や「そもそも想定している基準が低い」と捉えられる「そこそこ」を使用するのは失礼にあたりそうである。評価の対象が何（誰）であるのかという観点から分析することで、本研究で述べた〈評価性〉がより正確に示せる可能性があるため、この点については今後分析を進めたい。

ここまで、本研究で対象とした3語の〈評価性〉をより精緻に記述するための課題について示したが、序章で述べた「程度副詞と「評価」の関係性を掘り下げ、派生的な程度副詞の語彙形成の仕組みについて示唆を与える」という点に関していえば、より多くの程度副詞を対象にして、その〈評価性〉を分析していく必要がある。本研究で採用した方法と同様に、共起する語のタイプや程度副詞以外の用法との関連を見ることで〈評価性〉の把握は可能であるのか否か、分析や考察の手法も含め検討の余地が残る。今後は、「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」と類似の程度性、統語的特徴、語構成をもつ「なかなか」をはじめ、「極大ではないが高程度を表す」副詞である「けっこう」「かなり」「相当」や、畳語形式をとる「ぼちぼち」「ほどほど」なども考察対象として検討を進めていきたい。

用例出典

第1章～第5章

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 1.1, 中納言バージョン 2.4.）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2020年3月確認）

第6章

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（検索アプリケーション「中納言」を使用）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2017年7月確認）
- ・ 国立国語研究所『歴史コーパス』（検索アプリケーション「中納言」を使用）
<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>（2017年7月確認）
- ・ JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com.ejgw.nul.nagoya-u.ac.jp/library/>)
- ・ 『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（1995），新潮社

第7章

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 1.1, 中納言バージョン 2.4.）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2020年3月確認）
- ・ 国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2021.3, 中納言バージョン 2.5.2）<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>（2022年1月確認）
- ・ 『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（1995），新潮社

第8章

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 1.1, 中納言バージョン 2.4.）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2020年3月確認）
- ・ 国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』（検索アプリケーション「中納言」を使用）
<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>（2020年3月確認）
- ・ 『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（1995），新潮社

第9章・終章

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 1.1, 中納言バージョン 2.4.）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2020年3月確認）

参考文献

- 浅野百合子(1984)「程度副詞の分析 ―ずいぶん・だいぶ・なかなか・相当・かなり―」『日本語教育』(52),pp.47-54.
- 禹 吳穎(2015)「畳語の諸機能」『学習院大学人文科学論集』(24),pp.25-57.
- 沖久雄(1983)「小さな程度を表す副詞のマトリックス」『副用語の研究』, pp.199-215.
- 加藤豊二(1999)「談話標式「まあ」についての一考察」『日本語学・日本語教育論集』(6),pp.21-36.
- 川上恭子(1993)「談話における「まあ」の用法と機能(一)―応答型用法の分類―」『園田国文』(14),pp.69-79.
- 川上恭子(1994)「談話における「まあ」の用法と機能(二)―展開型用法の分類―」『園田国文』(15),pp.69-79.
- 川端元子(2012)「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』(47), pp.115-124.
- 北原保雄(2003)『日本国語大辞典 第二版』,小学館
- 清田朗裕(2014)「ソコソコの語史」『筑紫日本語研究』2013 筑紫日本語研究会,pp.25-35.
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』,pp.176-198.
- 小出慶一(2007)「フィラー化の様相―「まあ」の場合」『埼玉大学紀要 教養学部』43(1),pp.57-72.
- 清水泰生(2003)「「まあ」について」『埼玉大学国語教育論叢』(6),pp.82-90.
- 譙燕(2001)「畳語副詞の意味 ―成分の意味とのかかわり―」『同志社国文学 玉村文郎教授退職記念号』(54), pp.101-112.
- 鈴木夕佳(2011)「配慮の機能をもつ副詞についての考察―「そこそこ」を中心に―」『日本語コミュニケーション論集』(1),日本語コミュニケーション研究会,pp.82-89.
- 疏蒲剣(2018)「現代日本語における程度副詞の研究」名古屋大学,博士論文(文学),甲第12195号
- 田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』(61),pp.25-36.
- 田和真紀子(2012)「評価的な程度副詞の成立と展開」『近代語研究』(16), pp87-100.
- 田和真紀子(2017)『日本語程度副詞体系の変遷 ―古代語から近代語へ』,勉誠出版
- 丹保健一(1981)「程度副詞の諸相―「ほぼ」「やや」「少し」を中心に―」『国語学研究』(21),

pp.11-19.

茶谷恭代(2014)「現代日本語の副詞の研究—副詞「よほど」における程度性・評価性・叙法性—」道教外国語大学,博士論文(学術), 博甲第 177 号

富樫純一(2002)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』(7),pp.15-31.

鳴海伸一(2009)「「相当」の意味変化と程度副詞化」『国語学研究』(48),pp.120-133.

鳴海伸一(2012)「程度的意味・評価的意味の発生—漢語「随分」の受容と変容を例として—」『日本語の研究』8(1),pp.45-60.

鳴海伸一(2013)「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』(6), pp.93-110.

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』,くろしお出版

苗田敏美(2003)「「まあまあ」の表す程度について」『日本語教育論集』(12),pp.80-88.

芳賀綏、佐々木瑞枝、門倉正美(1996)『あいまい語辞典』,東京堂出版

服部匡(1996)「程度副詞と比較基準—「多少」,「少し」を中心に—」『同志社女子大学学術研究年報』47(4),pp269-284.

原美築(未公刊)「程度副詞「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性」名古屋大学大学院文学研究科,平成 27 年度修士学位論文

原美築(2018)「現代日本語「まずまず」の諸用法と基盤的意味」『名古屋大学人文学フォーラム』(1),pp.45-59.

原美築(2018)「被修飾語からみる「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性について」『名古屋言語研究』(12),pp.123-136.

原美築(2020)「接続表現からみる「まあまあ」「まずまず」の評価性について」『名古屋大学国語国文学』(113),pp.202-187.

原美築(2021)「現代日本語「そこそこ」の諸用法」『名古屋大学人文学フォーラム』(4), pp.377-392.

原美築(2021)「述部に現れる「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の評価的機能」『名古屋言語研究』(15),pp.15-28.

飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法時点』,東京堂出版

藤本真理子(2018)「日本語指示詞の複合形式にみられる問題」『尾道市立大学芸術文化学部紀要』(17),pp.177-181.

水野吉徳(2006)「談話管理から見た標式「まあ」について」『日本語用論学会大会発表論文

集』(2),pp.121-126.

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』,角川書店

渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』(23),pp.1-16.

初出一覧

序章：書き下ろし

第1章：原美築（未公刊）「程度副詞「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性」第2章,名古屋大学大学院文学研究科,平成27年度修士学位論文（大幅に加筆修正）

第2章：原美築(2018)「被修飾語からみる「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性について」『名古屋言語研究』(12),pp.123-136.（大幅に加筆修正）

第3章：原美築（未公刊）「程度副詞「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性」第5章,名古屋大学大学院文学研究科,平成27年度修士学位論文（大幅に加筆修正）

第4章：原美築（未公刊）「程度副詞「まあまあ」「まずまず」「そこそこ」の評価性」第6章,名古屋大学大学院文学研究科,平成27年度修士学位論文（大幅に加筆修正）

第5章：原美築(2021)「述部に現れる「まずまず」「まあまあ」「そこそこ」の評価的機能」『名古屋言語研究』(15),pp.15-28.（一部改変）

第6章：原美築(2018)「現代日本語「まずまず」の諸用法と基盤的意味」『名古屋大学人文学フォーラム』(1),pp.45-59.（一部改変）

第7章：書き下ろし

第8章：原美築(2021)「現代日本語「そこそこ」の諸用法」『名古屋大学人文学フォーラム』(4), pp.377-392.（一部改変）

第9章：原美築(2020)「接続表現からみる「まあまあ」「まずまず」の評価性について」『名古屋大学国語国文学』(113),pp.202-187.（一部改変）

終章：書き下ろし